本庄市遺跡調査会報告書　第18集

児 玉 清 水 遺 跡

－Ａ地点の調査－

２００７

本 庄 市 遺 跡 調 査 会

本庄市遺跡調査会報告書　第18集

児玉清水遺跡（こだましみずいせき）

－Ａ地点の調査－

２００７

本庄市遺跡調査会

序

児玉清水遺跡は、本庄市児玉市街を臨む生野山丘陵の裾近く、児玉地区の台地上に位置しております。この児玉の地は、古くから鎌倉街道の宿や市の栄えた土地として知られております。また、遺跡名のもととなった清水は、綺麗な湧き水が豊富にあったことにちなんで名付けられた地名であり、古くから集落が営まれております。しかし、ここに報告する児玉清水遺跡のある区域は、本庄市児玉市街の東側に位置し、国道２５４バイパスに接しておりますところから開発が進み、近年では急速に古い歴史的な景観が失われつつあります。

このたび、この児玉清水遺跡で発掘調査された古墳時代や平安時代に営まれた先人達の集落跡については、ここに記録として保存し、この『発掘調査報告書』という形で永く後世に伝えることになりました。これらの埋蔵文化財は、将来の私たちの文化的な生活を形づくるためのひとつの基礎となりえるものであり、これらを守り伝えて行くことはもとより、地域の理解のために生かし、私たちのよって立つ基盤を再確認するためのひとつの資料として活用して行くことが、今後の文化財保護の課題であるといってよいでしょう。

ここに、この発掘調査報告書が刊行できましたことは、株式会社ヤオコーをはじめとする関係各位ならびに関係諸機関の皆様のご協力の賜と深く感謝いたします。このささやかな調査報告書は、埋蔵文化財の保護・活用にとっての第一歩であるに過ぎませんが、この地域の住民皆様はもとより、教育や研究にたずさわる皆様のご参考となりえるならば幸いです。

平成19年４月18日

本庄市遺跡調査会
会長　茂　木　孝　彦

例　言

1．本書は、埼玉県本庄市児玉町児玉字清水2924-2外に所在する児玉清水遺跡（№54－309）Ａ地点の発掘調査報告書である。

2．発掘調査は、株式会社ヤオコーの店舗建設に先立つ埋蔵文化財保存事業として、平成７年度に児玉町遺跡調査会が実施したものである。

3．発掘調査および整理・報告に要した経費は、株式会社ヤオコーの委託金である。

4．本報告にかかる発掘調査は徳山寿樹・大熊季広が担当した。本書の編集は、櫻井和哉・尾内俊彦の協力を得て鈴木徳雄が行った。各執筆分担については各文末に記した。なお、本書の作成・編集作業の大半は、児玉町遺跡調査会で実施したものであったところから、旧版で編集をしたものを、本庄市遺跡調査会の版形に改めたものである。

5．本書に掲載した出土遺物、遺構・遺物の実測図ならびに写真等の資料は、掲載以外の資料を含め、本庄市教育委員会において保管している。

6．発掘調査及び本書の作成にあたって下記の方々の御助言・御教示を賜った。記して感謝いたします。（順不同、敬称略）

赤熊　浩一、池田　敏宏、大屋　道則、岡本　一雄、小野　英彦、金子　彰男、
雉岡　恵一、坂本　和俊、外尾　常人、田島　三郎、田村　　誠、知久　裕昭、
利根川章彦、鳥羽　政之、永井　智教、中沢　良一、長滝　歳康、中村　倉司、
長谷川　勇、長谷川典明、平田　重之、丸山　　修、宮本　直樹、矢内　　勲、
山口　逸弘、東海大学考古学研究会
埼玉県生涯学習部生涯学習文化財課、児玉郡市文化財担当者会

7．出土遺物の実測、写真撮影および観察表の作成は、櫻井和哉が行った。

8．本書作成にかかる主たる作業は、担当者のほか、主として櫻井和哉・尾内俊彦が行った。

田口　照代、新井　嘉人、福島　礼子、倉林　常子、渋谷　裕子、藤重千恵子

目　　次

序　　本庄市遺跡調査会会長　茂木　孝彦

例言

第Ⅰ章　発掘調査の経緯 …… 1

第Ⅱ章　遺跡の地理的・歴史的環境 …… 3
1．地理的環境 …… 3
2．歴史的環境 …… 3

第Ⅲ章　発掘調査の概要 …… 7
1．遺跡の概要 …… 7
2．検出遺構の概要 …… 8
3．出土遺物の概要 …… 38

第Ⅳ章　児玉の交通路と町並みの形成 …… 57
1．古代における河川の利用 …… 57
2．古代・中世の河川と交通路 …… 60
3．交通路と児玉町場の形成 …… 62

引用・参考文献

図版

報告書抄録

児玉清水遺跡Ａ地点発掘調査組織

児玉町遺跡調査会（平成７年度：抜粋）

会　長	冨丘　文雄	児玉町教育委員会教育長	
理　事	田島　三郎	児玉町文化財保護審議委員長	
	清水　守雄	児玉町文化財保護審議委員	
	武内　和雄	児玉町文化財保護審議委員	
	野口　敏雄	児玉町文化財保護審議委員	
	小島　和子	児玉町文化財保護審議委員	
	大塚　　勲	児玉町教育委員会社会教育課長	
幹　事	関根　安男	児玉町教育委員会社会教育課長補佐	
	清水　　満	〃	係長
	田島　賢二	〃	主任
	鈴木　徳雄	〃	主任
	倉林美恵子	〃	主事
	恋河内昭彦	〃	主事
調査員	徳山　寿樹	〃	主事
	大熊　季広	〃	主事補
	尾内　俊彦	児玉町遺跡調査会	調査員

児玉清水遺跡Ａ地点整理・報告組織

本庄市遺跡調査会（平成18年度）

会　長	茂木　孝彦	本庄市教育委員会教育長	
理　事	清水　守雄	本庄市文化財保護審議委員	
	佐々木幹雄	本庄市文化財保護審議委員	
	丸山　　茂	本庄市教育委員会事務局長	（会長代理）
監　事	八木　　茂	本庄市監査委員担当副参事	
	門倉　　実	本庄市会計課長	
幹　事	前川　由雄	本庄市教育委員会文化財保護課長	（事務局長）
	鈴木　徳雄	〃	課長補佐兼埋蔵文化財係長
	太田　博之	〃	埋蔵文化財係主査
	恋河内昭彦	〃	埋蔵文化財係主査
	松澤　浩一	〃	埋蔵文化財係主事
	松本　　完	〃	埋蔵文化財係主事
	的野　善行	〃	埋蔵文化財係臨時職員
調査員	尾内　俊彦	本庄市遺跡調査会	調査員

本庄市遺跡調査会（平成 19 年度）

会　長	茂木　孝彦	本庄市教育委員会教育長	
理　事	清水　守雄	本庄市文化財保護審議委員	
	佐々木幹雄	本庄市文化財保護審議委員	
	丸山　　茂	本庄市教育委員会事務局長	（会長代理）
監　事	八木　　茂	本庄市監査委員担当副参事	
	関根　一夫	本庄市会計課長	
幹　事	儘田　英夫	本庄市教育委員会文化財保護課長	（事務局長）
	鈴木　徳雄	〃	課長補佐兼文化財保護係長
	太田　博之	〃	埋蔵文化財係係長
	恋河内昭彦	〃	埋蔵文化財係主査
	大熊　季広	〃	埋蔵文化財係主任
	松澤　浩一	〃	埋蔵文化財係主任
	松本　　完	〃	埋蔵文化財係主事
	的野　善行	〃	埋蔵文化財係臨時職員
調査員	尾内　俊彦	本庄市遺跡調査会	調査員

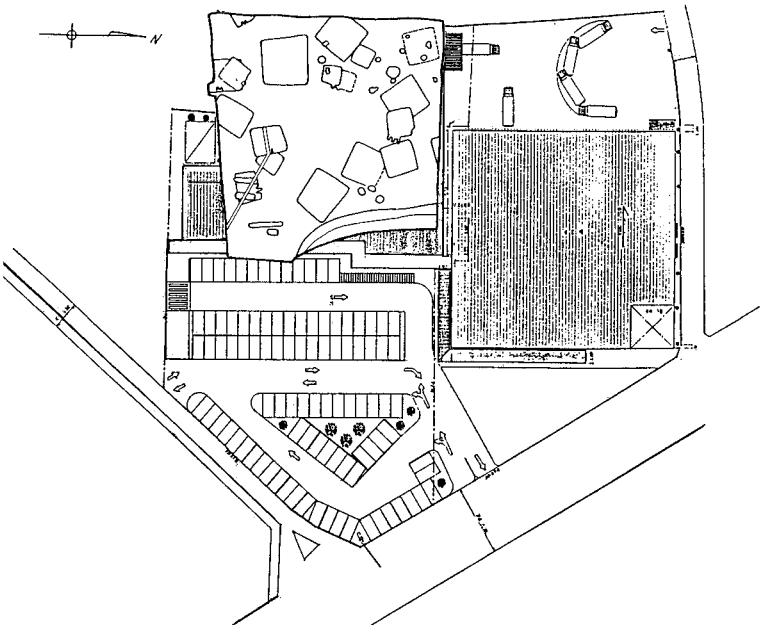
第Ⅰ章　発掘調査の経緯

発掘に至る経緯　埼玉県児玉郡児玉町大字児玉字清水2924-2番地外における株式会社ヤオコーの新店舗建設計画に基づいた、開発予定地内における埋蔵文化財の所在及び取り扱いについての照会および試掘調査依頼が児玉町教育委員会にあった。当該区域は、周知の埋蔵文化財包蔵地である児玉清水遺跡（№54-309）に該当しており、試掘調査を実施した結果においても、地場産業であった瓦生産の粘土採掘に伴う撹乱が広範囲に及んでいたとはいえ、建設予定区域に古代集落跡等が存在していることが確認された。町教育委員会は、この試掘調査の状況を踏まえ、埋蔵文化財の現状変更を最小限に実施するように株式会社ヤオコーと協議を行ったが、工事による埋蔵文化財への影響が避けられず現状変更される区域の発掘調査を実施する必要が生じた。以上の協議を踏まえて、町教育委員会の指導に基づき、児玉町遺跡調査会と株式会社ヤオコーとの間で埋蔵文化財保存事業委託契約を締結することで発掘調査を実施することとなった。

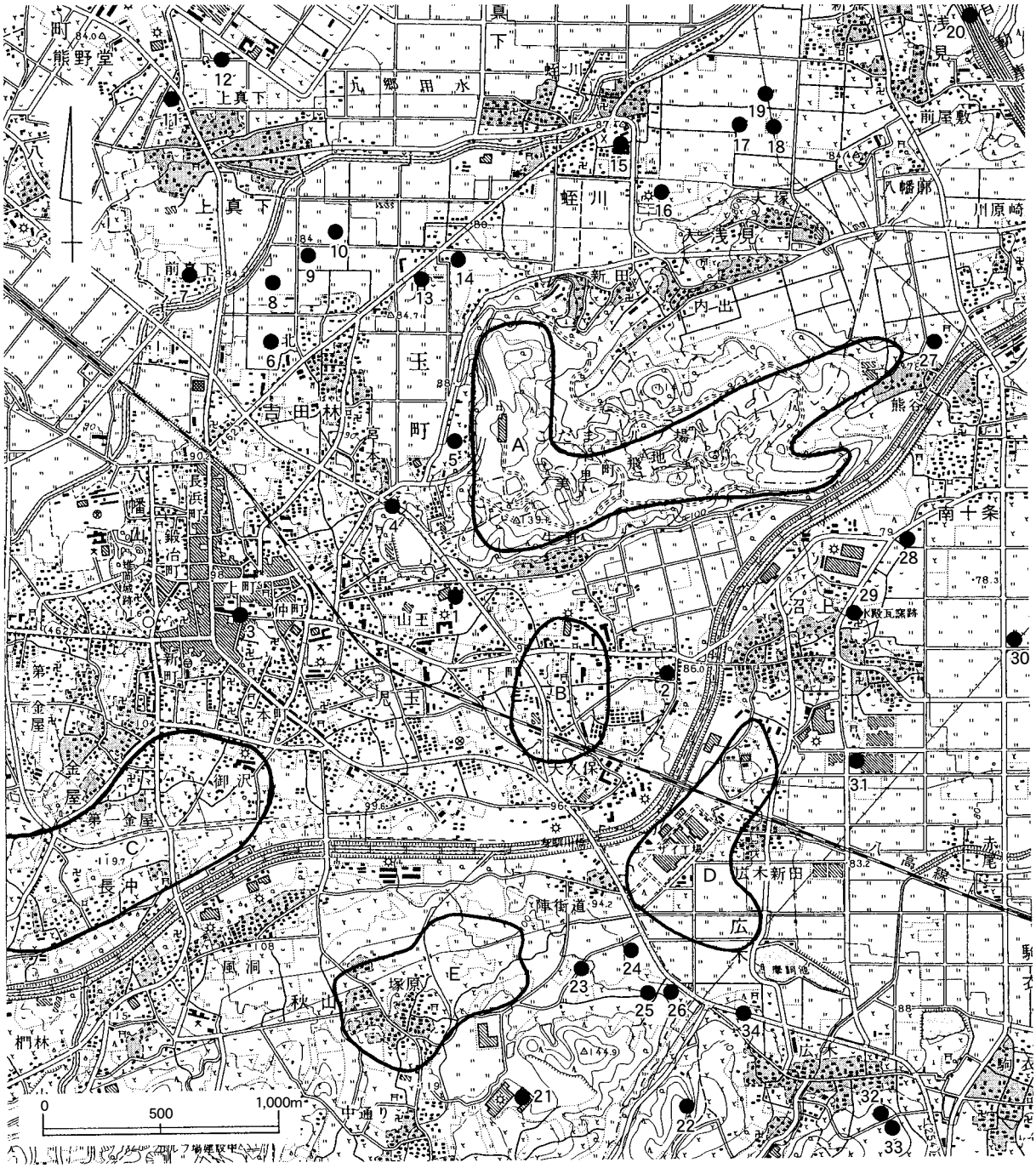
発掘の届出　平成７年５月31日に株式会社ヤオコー代表取締役川野幸夫より文化財保護法第57条の２第１項の規定に基づく「埋蔵文化財発掘の届出について」が提出された。この届出に基づいて埼玉県教育委員会教育長から、平成７年11月１日付け教文第３－391号で株式会社ヤオコー代表取締役川野幸夫に「周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事等について」の通知があった。

発掘調査の届出　また、児玉町遺跡調査会会長冨丘文雄から文化財保護法第57条第１項の規定に基づいて「埋蔵文化財発掘調査の届出について」が提出されたので、児玉町教育委員会は、同日、埼玉県県教育委員会教育長あてに進達した。この届出に基づいて、埼玉県教育委員会教育長から、平成７年８月24日付け教文第２－136号で児玉町遺跡調査会会長に「埋蔵文化財発掘調査について」の通知があった。

なお、現地の発掘調査は、児玉町遺跡調査会によって平成７年６月１日に開始され、同年８月15日に終了した。　（本庄市教育委員会文化財保護課埋蔵文化財係）



第１図　児玉清水遺跡Ａ地点の調査位置



清水児玉遺跡Ａ地点周辺の主要遺跡

1：児玉清水遺跡Ａ地点	11：真下境遺跡	21：秋山東遺跡	31：宮下遺跡
2：児玉大久保遺跡	12：辻ノ内遺跡	22：広木上宿遺跡	32：宇佐久保埴輪窯跡
3：児玉仲町遺跡	13：宮田遺跡	23：秋山大町遺跡	33：宇佐久保遺跡
4：御林下遺跡	14：南街道遺跡	24：秋山大町東遺跡	34：ミカ神社前遺跡
5：阿知越遺跡	15：共和小学校遺跡	25：秋山諏訪平遺跡Ｄ地点	Ａ：生野山古墳群
6：高縄田遺跡	16：日延遺跡	26：秋山諏訪平遺跡Ｆ地点	Ｂ：下町大久保古墳群
7：金佐奈遺跡	17：東田遺跡	27：宮ヶ谷戸遺跡	Ｃ：長沖古墳群
8：樋越遺跡	18：浅見境遺跡	28：樋之口遺跡	Ｄ：広木大町古墳群
9：鶴蒔遺跡	19：浅見境東遺跡	29：水田瓦窯跡	Ｅ：秋山古墳群
10：石橋遺跡	20：雷電下遺跡	30：烏森遺跡	

第２図　児玉清水遺跡Ａ地点と周辺の遺跡（1／25,000）

第Ⅱ章　遺跡の地理的・歴史的環境

１．地理的環境

児玉清水遺跡の所在する本庄市は、平成18年１月10日に旧本庄市と旧児玉町が合併し、人口約83,000人の埼玉県北部の中心的な都市となった。新「本庄市」の市域は、東西約17.2km、南北約17.3km、面積89.71ｋ㎡に及び、東は深谷市および児玉郡美里町、西は児玉郡神川町、南は秩父郡皆野町および長瀞町、北西は児玉郡上里町、また北側は利根川を挟んで群馬県伊勢崎市に接する、埼玉県の北西部に位置している。

本庄市には、市域の北東部に位置する本庄市街にＪＲ高崎線本庄駅が、南西部に位置する児玉市街にはＪＲ八高線児玉駅がある。また、市の北東部には上越新幹線本庄早稲田駅が平成16年３月に開業している。本庄市街の北側には国道17号線が、児玉市街には国道254号線が通り、伊勢崎市から本庄市街を経て児玉市街方向に国道462号線が延びている。また、市域の北東部に関越自動車道本庄・児玉インターチェンジがある。

本庄市の地形

本庄市の地形は、市域の南東側に八王子－高崎構造線上の断層崖を境に三波川系結晶片岩帯に相当する基盤層をもつ上武山地が位置している。また、上武山地に接して第三紀層を基盤にもつ児玉丘陵が平野部に半島状に突出しており、山地付近から流下する小河川の浸食によって幾つもの小支丘に分割されている。児玉丘陵の延長上には、やはり第三紀の丘陵である生野山・浅見山と呼ばれる各残丘が点列状に存在している。

本庄市域の北西側には、関東平野西端を構成する神流川扇状地が展開し、扇端部に位置する深谷断層を境に烏川低地が展開しており、近世以降ではこの低地帯に利根川が流下している。神流川扇状地は、本庄台地とも呼称される低位の台地面を構成するが、この扇状地扇央部には、本庄市児玉町宮内地内に水源を発する、かつて「赤根川」と呼ばれた「女堀川」と、神川町大字二宮所在の延喜式内社である金鑽神社付近に水源を発する金鑽川が合流し、これらによって開析された沖積地が形成されている。

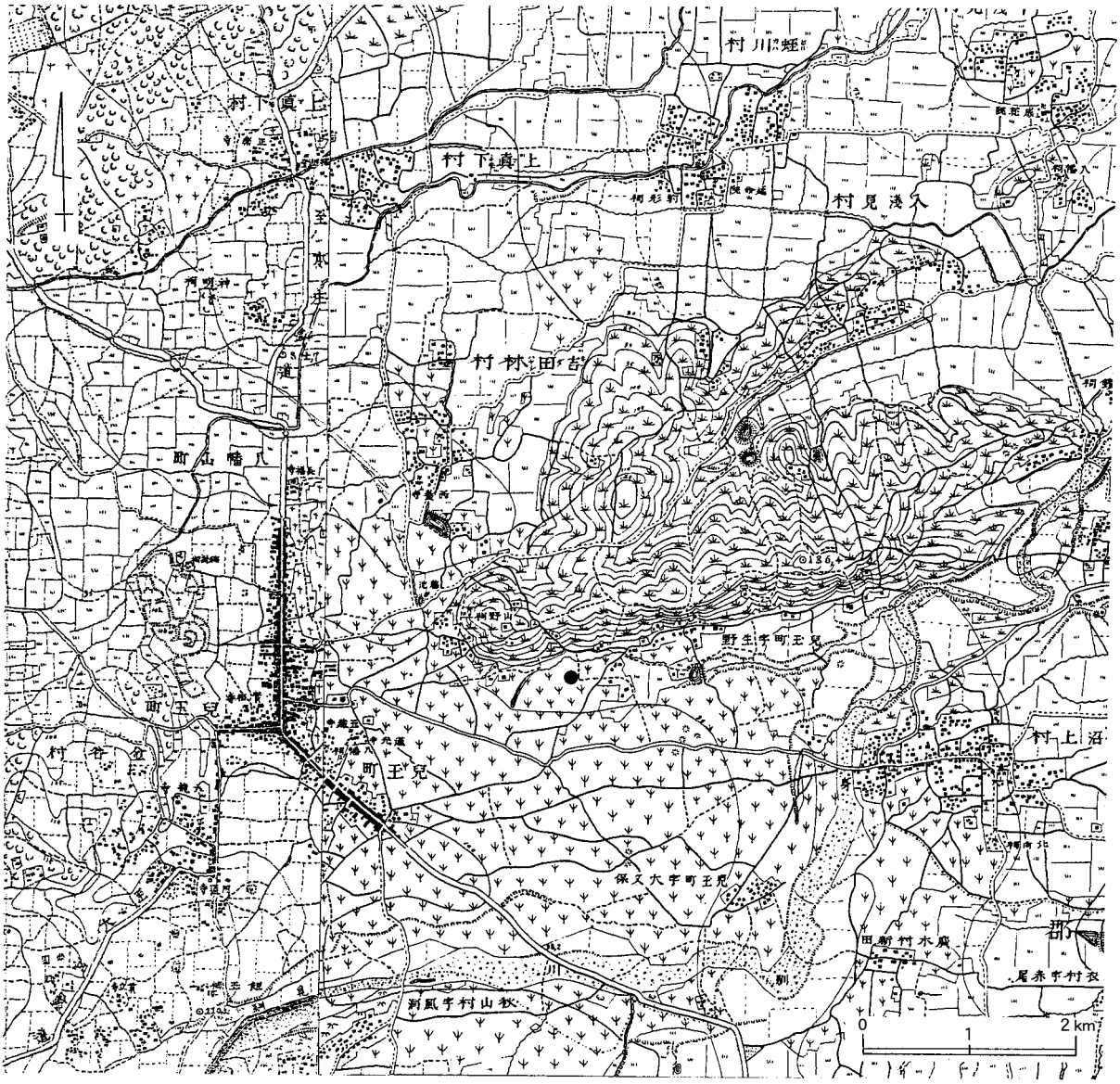
児玉丘陵の南側には、上武山地内の秩父郡皆野町金沢付近に水源を発する小山川（旧身馴川）が流れている。この小山川は、山地域の幾つもの沢水を集めて流下しているが、児玉市街の南側付近では伏流しており、美里町十条付近で表流水量を増しながら本庄市五十子付近で女堀川と合流し、また深谷市域で志戸川と合流し利根川へと注いでいる。

児玉・清水遺跡の地形

児玉清水遺跡は、この小山川左岸の台地上に位置し、第三紀の残丘である生野山丘陵を北側にひかえた占地である。本遺跡は、本庄市児玉町のほぼ中央、児玉市街の東約１kmに位置し、国道254号線バイパスに接しているところから近年は急速に市街化が進んでいる区域に位置している。

２．歴史的環境

本庄市域における弥生時代の遺跡は少なく、中期までの遺跡は小山川流域等に小規模な遺跡が点在する状況であるが、後期には谷戸を臨む丘陵部に小規模な集落跡が確認されている。古墳時代前期に入ると集落遺跡が増加するが、これは低地域の開発が急速に進展するためである。この開発は、主として生野山丘陵以北の女堀川流域の低地域の灌漑および排水が進展したためであり、後張遺跡群をはじめとする集落が形成される。このような低地域の開発はと集落の設営に伴って鷺山古墳をはじめとする古式古墳が相次いで築造され



第３図　児玉清水遺跡Ａ地点の位置と旧地形

ることは注目すべき点である。こうした集落遺跡の占地の傾向は古墳時代中期以降においても継続するとともに、丘陵部にも開発が進んでいる。

周辺の集落跡

本遺跡の位置する生野山丘陵以南の区域においては、下町・大久保古墳群［図２−Ｂ］の存在が知られており、現在１基のみ残存しているが、かつては数多くの後期古墳が存在していたようである。また、集落跡は本遺跡のほか、古墳時代後期の児玉仲町遺跡［図２−３］、また、古墳時代後期から平安時代にかかる集落跡である児玉大久保遺跡［図２−２］が確認されている（恋河内2003・桜井2004）。集落の形成時期は、古墳時代後期の６世紀代を主体とし、７世紀から奈良時代においては集落は衰退するものと推定される。また、平安時代においても集落形成が活発となり、９世紀後半から10世紀後半頃の住居跡群が確認されている。

律令期の集落は、条里水田の展開する低地内の微高地上には極めて少なく低地を臨む平坦な台地上に展開している。この時期の水田は、神流川からの導水にかかる「九郷用水」によって灌漑が開始されており、律令期における集落の占地や水田の景観の形成が計画的

かつ構造的に進行したことを示している。この条里型地割と灌漑系統が、その後の地域社会の共同性を再生産してゆく基層を構成していることは注目すべき点である（鈴木1997）。

中世の児玉の区域

児玉党系在地領主である「児玉氏」においては、この生野山丘陵以南の今日の本庄市児玉町児玉の区域にその本貫地が相当しており、児玉党系在地領主それぞれの経済基盤となった領域がこのように小山川（旧身馴川）筋および丘陵部に相当していることは注目しておくべき点である。この生野山丘陵以南の区域は、基本的に九郷用水灌漑区域である条里形地割をもった水田区域の外部に属し、これらの区域が「児玉氏」の第一次的な経済基盤であったことは注意される。

なお、この地域の中世を捉える上では、享徳の乱以降において五十子陣に関東管領上杉氏の当主房顕が本陣を張り古河公方勢力と対峙していたという事実は重要な点である。本遺跡にほど近い雉岡城には寛正年間に上杉顕定が城主であったという伝承があり、あるいは上杉氏の家臣が築いたともされ、いずれにしても上杉氏との関連を窺わせるものであるといってよい。ちなみに、『宴曲抄』では児玉に次いで記載されているのは、「者の武」の居住する「雉が岡」であり、今日の本庄市児玉町八幡山地区に所在する雉岡城付近がこれに相当するものであると推定されるところから、これ以前にも武士の居住を考えておくべきであろう。ともあれ、この時期における雉岡城の位置は、「鎌倉街道」の「上道」と「上杉道」の分岐点に相当する身馴川（小山川）上流部に位置し、同じ身馴川の下流に位置する「鎌倉街道本庄道」の要衝に設置された五十子陣との相互の関係を考えておくべきであろう。おそらくは、この時期に主要な市の立つ児玉の地をひかえた雉岡城は、五十子陣の重要な兵站の確保の拠点としての地位を占めていたものと推定してよいであろう。

周辺の灌漑

本遺跡付近には、湧水を貯水した「清水池」や「思池」および「大池」という溜池が存在しており、西側の谷津にこの水源によって灌漑された水田が展開している［字切図］。しかし、この湧水による開析によって形成された低地を中心に水田が営まれていたが、用水は潤沢ではなく、近代においても大規模な耕地とはいえないものであった［図３］。

このようなこの地域の灌漑用水の不足は、昭和十二年に完成した間瀬堰堤（現国登録有形文化財）に貯水された用水をもって灌漑する児玉用水（現美児沢用水）によって補われることとなった（野口2003）。昭和13年の「工作物引継書」によると、ここで見る児玉区域の灌漑については、児玉用水の「児玉水路」によって既存の用水に導水されるもので、この水路は昭和十年に「大字元児玉地内」および「大字下町地内」等について竣工していたものであった。ちなみに、この「児玉水路」で灌漑される児玉地内の字は、「大道北、学校、東並木、町裏、思池、南田、清水、大池、久保田下、北田」であり、これによって本遺跡の周辺を含む生野山以南の灌漑用水の不足していた区域の用水が確保された。

児玉町児玉の区域

このように本遺跡の位置する本庄市児玉町児玉の区域は、基本的に九郷用水の灌漑区域ではなく、畑地が卓越する区域であった。この点で、古代から神流川を水源とした条里水田を主とする九郷用水灌漑区域と比較すると大きな差異がある。しかし、「児玉」の区域は、九郷用水灌漑区域の外部に位置し、児玉党系在地領主であった児玉氏の本貫地として位置づけられるとともに、鎌倉街道の宿と市庭が発達したことに注意すべきであろう。この地区は、地域社会としての自律的な単位と見做し得る部分もあるが、むしろ交通の結節点としての位置づけが可能であり、古くから宿や市が発達した都市的な場を構成していた区域であったと見做すことができる。

（鈴木徳雄）

第４図　児玉清水遺跡Ａ地点とＢ地点の調査位置

第Ⅲ章　発掘調査の概要

１．遺跡の概要

児玉清水遺跡は、埼玉県本庄市児玉町児玉字清水2924-2他の番地に所在し、児玉市街地の東側に所在する生野山丘陵南下の谷戸に面した場所に位置し、遺跡の標高は海抜92～93mを測る。遺跡を載せる土地は小山川（旧身馴川）に程近く、100m前後東に向かえば小規模な河岸段丘が見受けられ段丘下は多くの砂礫を含む氾濫原である。段丘上の土地の基盤層は扇状地の特色として礫や砂を多く含んでおり、遺跡の付近には伏流する水脈からの湧水点も所々に存在している。

遺跡の概要

本遺跡は、主として古墳時代と平安時代に該当する遺構が多く、生活拠点として形成されているが、生野山丘陵の南側には本遺跡の他に発掘調査された集落遺跡として本遺跡のＢ地点、大天白遺跡、児玉大久保遺跡Ａ・Ｂ・Ｃ地点が点在している。また、遺構の時期と平行して生野山丘陵上には生野山古墳群、南から南東にかけて広がる下町・大久保古墳群の二ヶ所の墓域の存在が確認されている。

第５図　児玉清水遺跡Ａ地点の調査区域

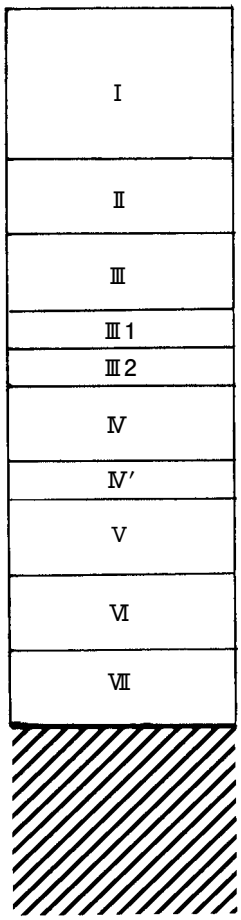
2．検出遺構の概要

本遺跡の調査区内からは、調査対象の遺構として住居址が18軒、土壙が21基の存在が検出されている。住居址は、古墳時代前・中・後期、及び平安時代の時期のものが確認されており、重複しているものも多い。また土壙は構築時期不明のものが多いが、唯一第21号土壙からは弥生時代中期初頭と思われる壷形土器を主体とした土器片が少数出土している。しかし、近世から近代にかけての掘り込みが数カ所存在しており、遺構を破壊しているところも少なくない。この掘り込みは、児玉の地場産業である瓦生産の為の粘土採掘坑と推定されるが調査区の周囲をはじめ調査区域内でも点在しており確認作業の妨げになった。また、何度か川の氾濫の被害にあったようで住居跡の壁が流失しているような住居もあり、砂や礫に覆われていて遺構の確認作業には困難が伴った。

基本土層

調査区の基本土層は、Ⅰ層からⅡ層までが近世の耕作土、Ⅲ層からⅢ２層までが古代から中世にかけての耕作土である。遺構確認面は基本土層Ⅶ層の層位である。基本層Ⅶ層はローム質の土壌であるが色褪せており、粒状感が強く酸化と還元を繰り返したような様子が窺われ、こうした性格から本遺跡の地勢の形成には河川の氾濫等の作用を伴っていることが推定される。近在に流れる小山川は、少し上流の長沖近辺から丘陵部より平野に流れ出しており、そこから扇頂部を形成しながら流下しているが本遺跡の周辺はその影響を大きく受けている場所でもある。

（尾内俊彦）



児玉清水遺跡Ａ地点土層説明

基本土層

第Ⅰ層　明灰色土　φ１㎜以下の片岩粒・φ0.5～２㎝程度の小礫を多量、φ１～５㎜程度の焼土粒子・φ５～７㎜程度の炭化物粒子・φ１㎝程度の炭化物ブロックを少量含む。浅間山系Ａ軽石の混入が確認される。しまりは強く、粘性はない。（耕作土）

第Ⅱ層　暗灰色土　φ１㎜程度の焼土粒子・φ１㎜以下の片岩粒を少量、φ１～３㎜程度のローム粒子・φ2.5～３㎝程度の明灰色土ブロックを微量含む。しまりは強く、粘性は無い。

第Ⅲ層　暗褐色土　φ２～４㎝程度の明灰色土ブロック・φ１～３㎜程度の焼土粒子を少量、φ１～３㎜のローム粒子を微量含む。浅間山系Ｂ軽石の混入が確認される。浅間山系Ｂ軽石の混入が確認される。しまりは強く、粘性は無い。

第Ⅲ１層　黒色土　φ１㎜委あの片岩粒・φ１～３㎝程度の小礫を少量、φ１～３㎜の焼土粒子・３㎜以下のローム粒子を微量含む。しまりはやや強く、粘性は無い。

第Ⅲ２層　暗褐色土　φ１㎜以下の片岩粒・φ２㎜以下のローム粒子を少量、φ２～４㎝程度の明灰色土ブロック・φ２～３㎝のローム粒子を微量含む。

第Ⅳ層　黒色土　φ１㎜以下の片岩粒・φ１㎜以下のローム粒子・φ２㎝程度の小礫・φ２～５㎝程度の黄褐色砂質ロームブロックを少量含む。

第Ⅳ′層　暗茶褐色土　φ１～1.5㎝程度の小礫を多量、φ２～５㎝程度のロームブロック・φ１㎜以下ローム粒子を少量、φ１～３㎜程度の焼土粒子をわずかに含む。

第Ⅴ層　黒色砂質土　砂粒を主体とし、φ１㎝以下の片岩粒・φ６～７㎝程度の小礫を多量に含む。しまり・粘性ともに無し。

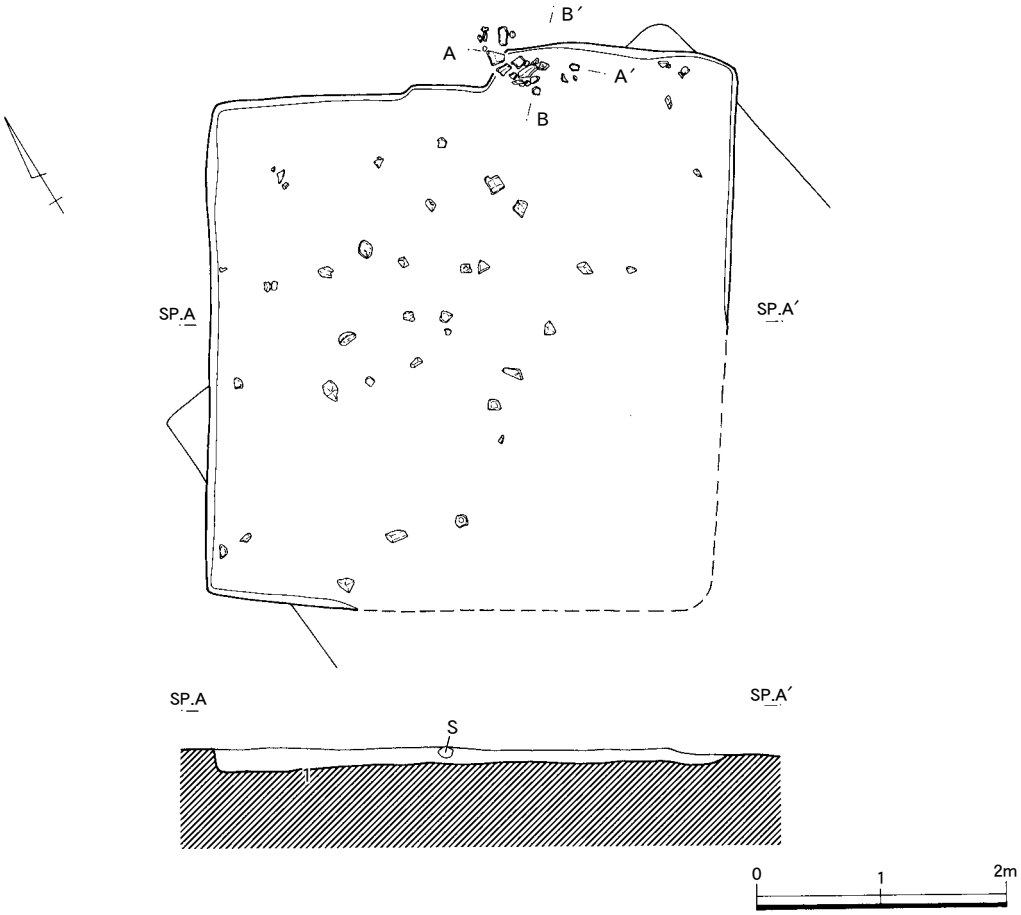
第Ⅵ層　黒色土　φ７～１０㎝程度の黄褐色砂質土ブロックをやや多量に、φ３㎜以下のローム粒子・φ１㎜以下の片岩粒を少量含む。しまりは強く、粘性は無い。

第Ⅶ層　黄褐色砂質土　φ２～７㎝程度の黒褐色粒子（多分鉄斑粒・マンガン粒の類）を少量含む。しまりは強く、粘性は弱い

第６図　児玉清水遺跡Ａ地点の基本層序

第１号住居址

調査区南壁付近のやや西よりに位置し、第２号住居址と重複しこれを切っている。遺構の遺存状態は悪く、壁高は確認面から最大15cm程度の深さを測るが西壁を消失している。住居址の平面形は張り出しのある長方形を呈し、規模は長辺は4.2m、短辺が４mを測り、主軸は南西方向にとる。カマドは住居址東側の壁に位置するが遺存状態が悪く、遺物・焼土の分布が確認される程度で形状の認知はできなかった。本住居址の帰属年代は、出土遺物から平安時代に比定される。



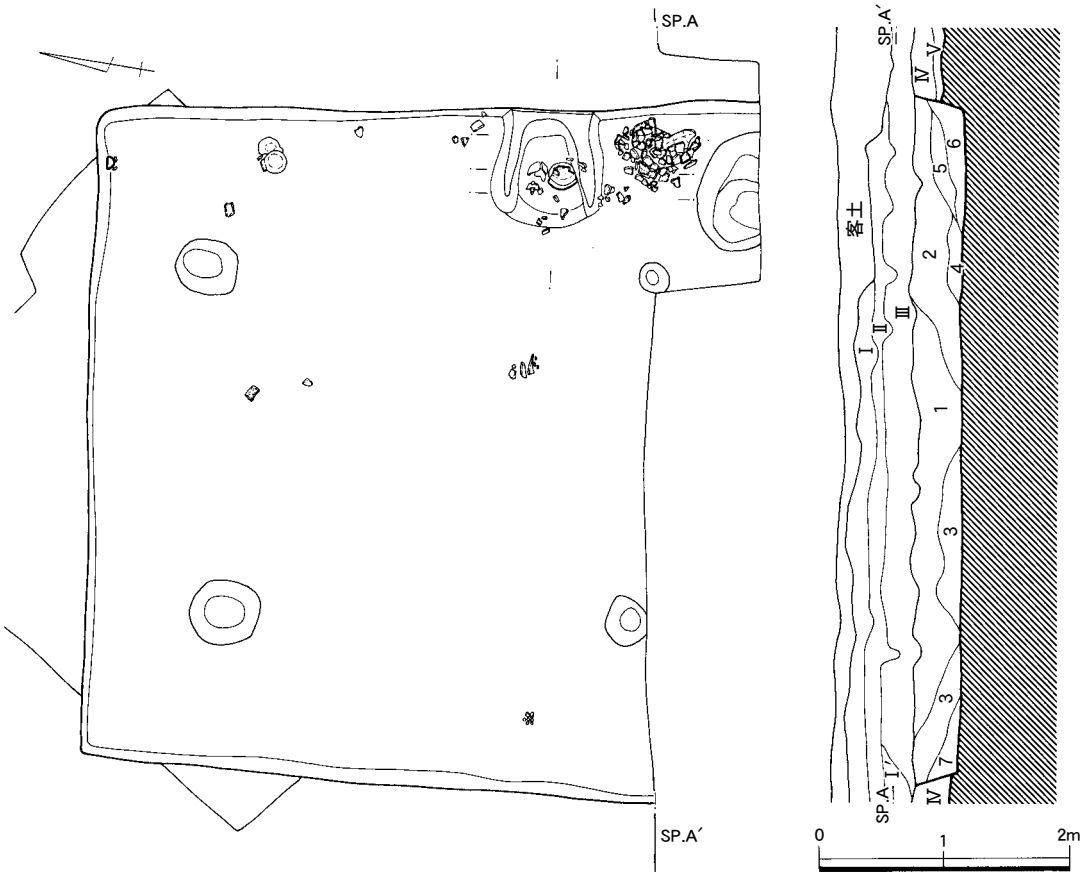
第７図　第１号住居址

第１号住居址土層説明

第１層　黒褐色土　φ5～30mm程度の小砂利を含む。しまり・粘性ともに弱い。

第２号住居址

調査区南壁付近のやや西よりに位置し、遺構の一部は調査区外に広がるが住居址南側の壁が検出されない程度であり、第１号住居址と重複しこれに切られている。遺構の遺存状態は比較的良好で、壁高は確認面から最大20cmの深さを測り、住居の平面形状はほぼ正方形を呈しており、規模は一辺が約５mを測り主軸は西南西をとる。住居内にはピットが４基検出され、何れも住居址の対角線上に位置し本址の主柱穴であると考えられる。他には住居址南東隅において調査区拡張部分から貯蔵穴が検出され、壁溝の存在は認められなかった。またカマドと貯蔵穴の間の壁際から、ほぼ床面直上より長胴甕が二個体潰れた状態で出土している。遺構の帰属年代は出土遺物から鬼高Ⅱ期に比定される。



第８図　第２号住居址

第２号住居址土層説明

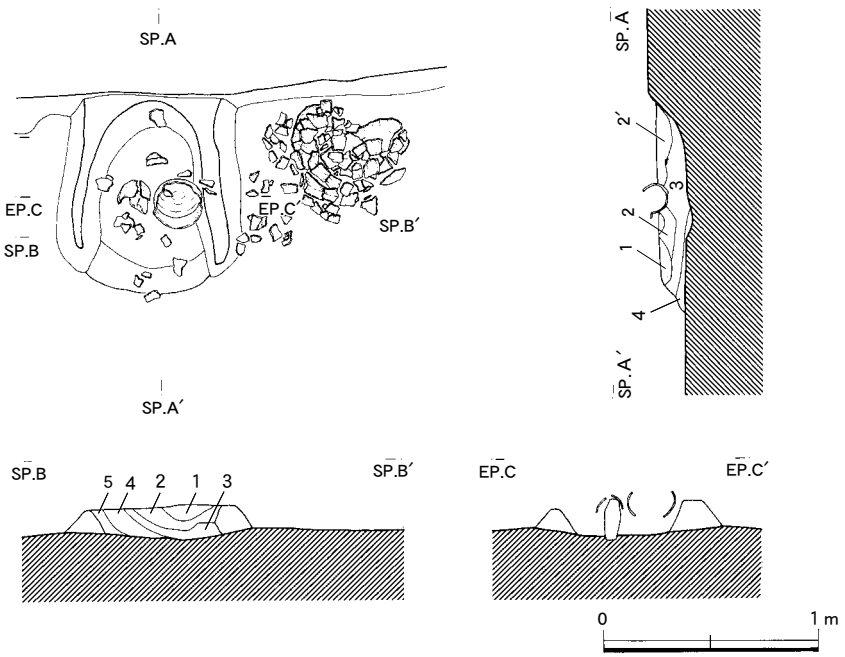
第１層　黒　色　土　φ５～30㎜程度の小砂利を服含む。しまり・粘性ともに弱い。
第２層　暗黄褐色土　黄色砂質ロームを若干含む。しまり・粘性ともに弱い。
第３層　暗黄褐色砂　黄色砂質ローム主体である（壁体崩落土）。しまり・粘性ともに弱い。

第２号住調査区南壁土層説明

第１層　暗 褐 色 土　φ１～３㎝程度の小礫を含む。しまり、粘性ともにあり。
第２層　黒　色　土　φ１～1.5㎜程度の小礫を含む。しまりはなく、粘性はやや強い。
第３層　暗灰褐色土　φ１～1.5㎜程度の小礫を若干含み、砂質である。しまりはやや強く、粘性はない。
第４層　暗灰褐色土　φ１㎜程度の焼土粒子、φ５㎜程度のローム粒子を含む。しまり・粘性ともにやや強い。
第５層　暗 灰 色 土　灰色粘土・φ１㎜程度の焼土粒子を含む。しまり・粘性ともにやや強い。
第６層　暗灰褐色土　φ１㎜程度の焼土粒子・炭化物粒子を含む。しまり・粘性ともにやや強い。
第７層　黒 褐 色 土　φ１㎜程度の炭化物粒子、φ１㎜以下の粒子を含む。しまり・粘性ともにやや強い。

第２号住居址カマド

本カマドは住居址東側の壁に位置し、壁面に対して垂直に壁体を掘り込まず中心よりやや右寄りに設置されている。燃焼部は若干床を掘り窪める程度であり、規模は全長95㎝、最大幅88㎝を測り、袖が焚き口方向に向かってわずかに開く形状を呈している。また、全体の高さは15㎝程度でその中からカマド内に鉢が掛けられた状態で出土しているが、支脚の位置から右にずれて出土しているため二つ掛けであったことが想定される。



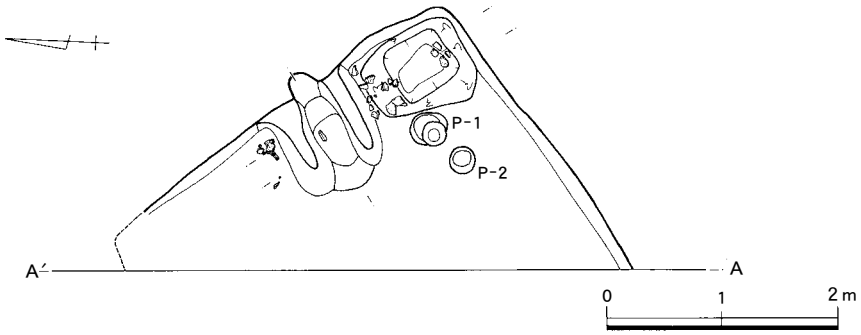
第９図　第２号住居址カマド

第２号住カマド土層説明

第 1 層　明赤褐色土　φ５㎝以内の焼土ブロックを主体とし、明褐色土を少量含む（天井崩落土）。しまり・粘性ともに強い。
第 2 層　暗 褐 色 土　暗褐色土を主体とし、φ２㎜程度の小礫・φ１㎝以内の焼土ブロックを少量含む。しまり・粘性ともにやや強い。
第 2′層　暗 褐 色 土　第２層に準ずるが、φ２㎝以内の粘土ブロックを含む。
第 3 層　暗 褐 色 土　φ１㎜以内の焼土粒子を少量含む。しまりはやや強く、粘性は強い。
第 4 層　暗赤褐色土　φ２㎝以内の焼土ブロックを主体とし、明褐色土を少量含む（天井崩落土）。
第 5 層　暗 褐 色 土　暗褐色土を主体とし、φ１㎝以内の粘土ブロック・φ２㎜以内の焼土粒子を少量含む。しまりはやや強く、粘性は強い。

第３号住居址

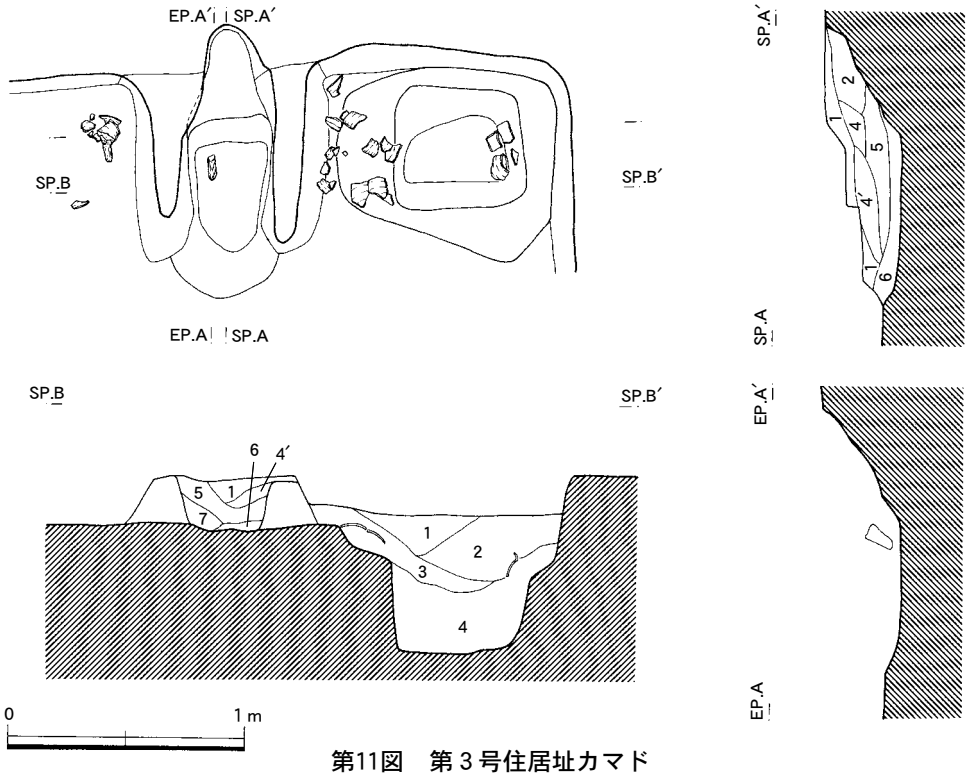
調査区西壁やや南側に位置し、他の遺構との重複関係は確認されていない。遺構は調査区外に広がり、全体の約1/2程度を検出している。遺構の遺存状態は比較的良好で、住居址は確認面から最大30㎝の深さであり、平面形状は概ね正方形を呈すると思われ、規模は一辺が3.5mを測り主軸は北東方向にとる。床面上からはピットが２基確認されており、そのうちＰ－１はその位置関係から本住居址の主柱穴であると考えられるが、Ｐ－２は遺構に伴うものか否かは確認されていない。また、住居址東側隅から貯蔵穴が検出されたが壁溝の存在は確認されなかった。遺物は、カマド・貯蔵穴付近に土師器片が散漫に分布する程度である。遺構の帰属年代は、出土遺物から鬼高Ⅱ期に比定される。



第10図　第３号住居址

第３号住居址カマド

本カマドは北東側の壁のやや中央から右側にずれたところに位置し、壁面に対し垂直に壁体をわずかに掘り込む状態で設置されている。燃焼部は床面を若干掘り窪める程度であり、規模は全長114㎝、最大幅80㎝を測り、袖は焚き口に向かって真っ直ぐ付されている。壁の高さは最大で28㎝を測り、支脚は燃焼部の中央、主軸よりやや左側に寄った位置に立てられている。



第11図　第３号住居址カマド

第３号住居址カマド土層説明

第 1 層　黒 褐 色 土　黒褐色土土を主体とし、φ５㎜以内の焼土粒子・黄色砂質ローム粒子を少量含む。しまりはやや弱く、粘性はやや強い。

第 2 層　暗 褐 色 土　暗褐色土を主体とし、焼土粒子・黄色砂質ロームを少量含む。しまりはやや強く、粘性は弱い。

第 3 層　明黄褐色土　黄色粘土を主体とする層。しまりはやや弱く、粘性は強い。

第 4 層　赤 褐 色 土　φ５㎝以内の焼土ブロック・φ１㎜程度の粘土粒子を中量含む。しまりはやや強く、粘性は強い。

第 4′層　赤 褐 色 土　第４層に準じるが、焼土ブロックの混入が少ない。

第 5 層　明黄褐色土　第３層に類似するが、φ２㎝以内の焼土ブロックを中量、黒褐色土土を少量含む。しまりは弱く、粘性は強い。

第 5′層　明黄褐色土　第５層に準ずるが、黒褐色土の混入が少ない。

第 6 層　暗 灰 色 土　暗灰色土を主体とし、焼土粒子を微量含む。しまり・粘性ともに弱い。

第 7 層　黄 褐 色 土　黄色粘土粒子を主体とし、黒褐色土を少量含む。しまりは弱く、粘性は強い。

第３号住居址貯蔵穴土層説明

第 1 層　暗 褐 色 土　暗褐色土を主体とし、φ２㎜以下の黄色砂質ローム粒を中量含む。しまりはやや強く、粘性は弱い。

第 2 層　暗 褐 色 土　第１層に準ずるが、φ２㎜以下のの黄色砂質ローム粒を少量含む。

第 3 層　暗 褐 色 土　第１層に準ずるが、φ１㎝以下の黄色砂質ロームブロックを少量含む。

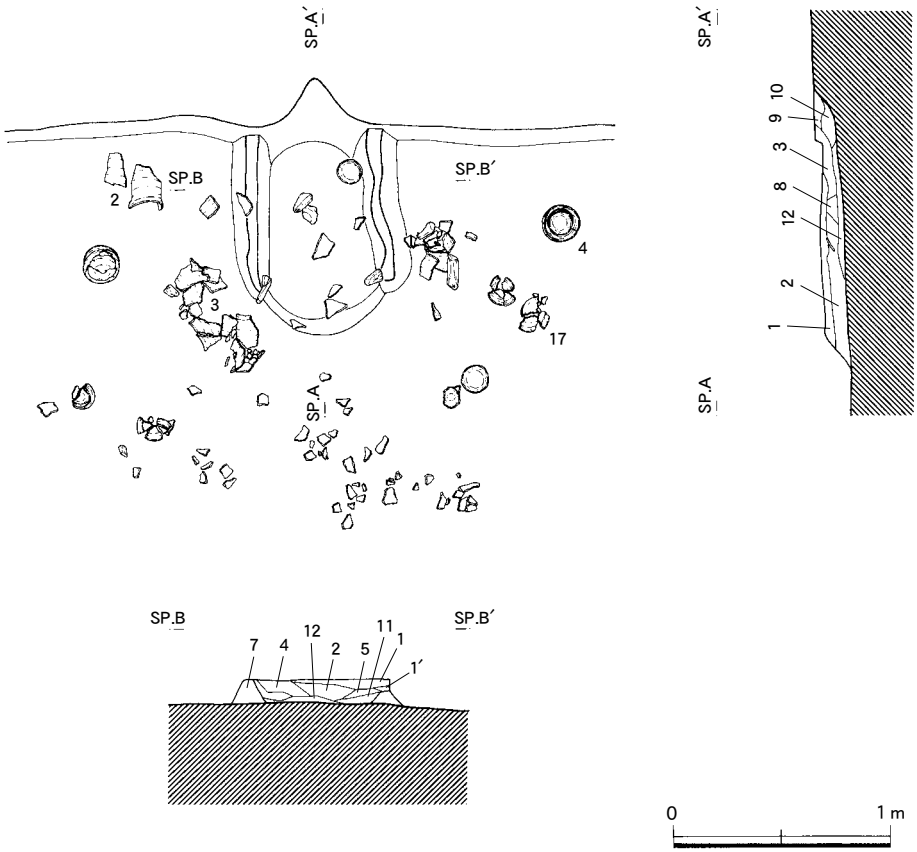
第 4 層　明 褐 色 土　暗褐色土を主体とし、黄色砂質ロームブロックを斑状に含む。しまりはややか強く、粘性は弱い。

第４号住居址

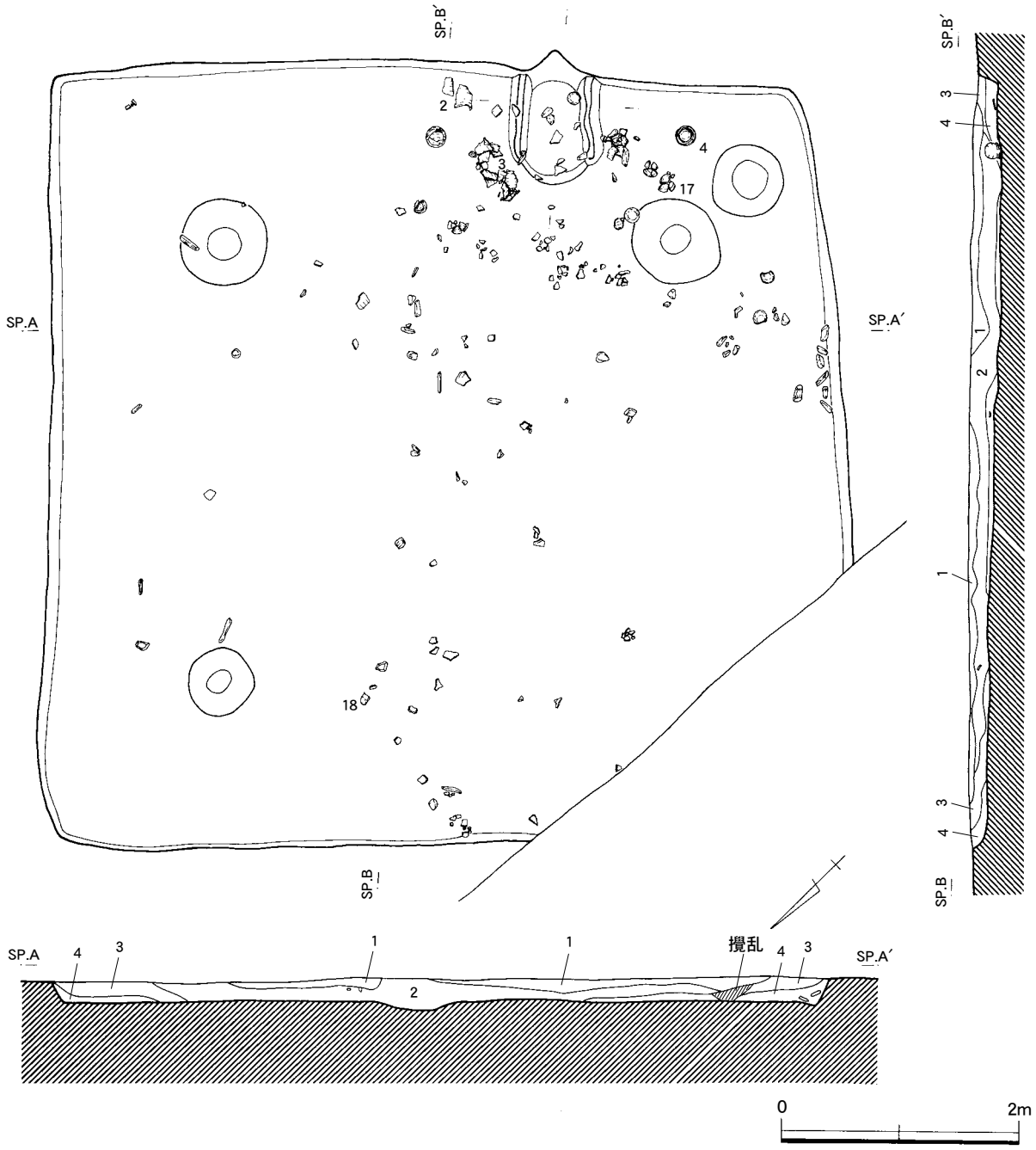
調査区西壁中央部付近に位置し、住居址南側隅が調査区外である。確認面では第９号住居址と重複し、これを切っている。遺構の遺存状態は比較的良好であり、壁高は確認面から最大20㎝の深さである。住居址の平面形は概ね正方形を呈し、規模は一辺が6.4mを測り、主軸は北西方向をとる。床面上からはピットが３基確認され、その位置関係から本住居址の主柱穴であると考えられる。また、住居址東側隅から貯蔵穴が検出されたが壁溝の存在は確認されなかった。本住居址に伴う遺物はカマド周辺を中心としてほぼ床面直上に遺棄された状態で出土するほか、全体的に散漫な状態で土器片、礫等が分布する。なお、住居址南東側の壁際中央部からは編み物石の集中的な出土が確認される。これらの出土遺物から、遺構の帰属年代は鬼高Ⅱ期に比定される。なお本住居址覆土上層からは、垂直分布の検討から、多量の真間期の土師器片と若干の羽釜等平安時代の土器片が集中する層位が確認される。また、調査時に第４号住居址の覆土上層から焼土の集中する箇所などが認められており、カマドであった可能性が高い。よって本址に於いては、最低２軒の住居の重複が想定される。

第４号住居址カマド

本カマドは北東側の壁のやや中央から大きく右側にずれたところに位置し、壁面に対して垂直に壁体をわずかに掘り込む状態で設置されている。燃焼部は床面を若干掘り込む程度であり、規模は全長115㎝、最大幅は80㎝を測り、袖は焚き口に向かって真っ直ぐ付されている。壁の高さは最大で10㎝を測り、支脚は燃焼部中央、主軸よりわずかに左に寄った位置に立てられている。



第12図　第４号住居址カマド



第13図　第４号住居址

第４号住居址土層説明

第１層　暗 褐 色 土　暗褐色土を主体とし、φ１㎜以内の小礫、砂粒を中量、淡橙褐色粒子を少量、φ１㎜以内の焼土粒子・炭化物粒子を微量含む。しまり　は強く、粘性は弱い。

第２層　暗 褐 色 土　第１層に準ずるが、φ８㎜以内の黄褐色砂質ロームブロック・焼土ブロック・φ５㎜以内の炭化物粒子・淡橙褐色粒子を少量含む。しまりは強く、粘性は弱い。

第３層　暗茶褐色土　暗茶褐色土を主体とし、φ１㎝以内の小礫・φ３㎝以内の黄褐色砂質ロームブロックを微量含む。しまりは強く、粘性は弱い。

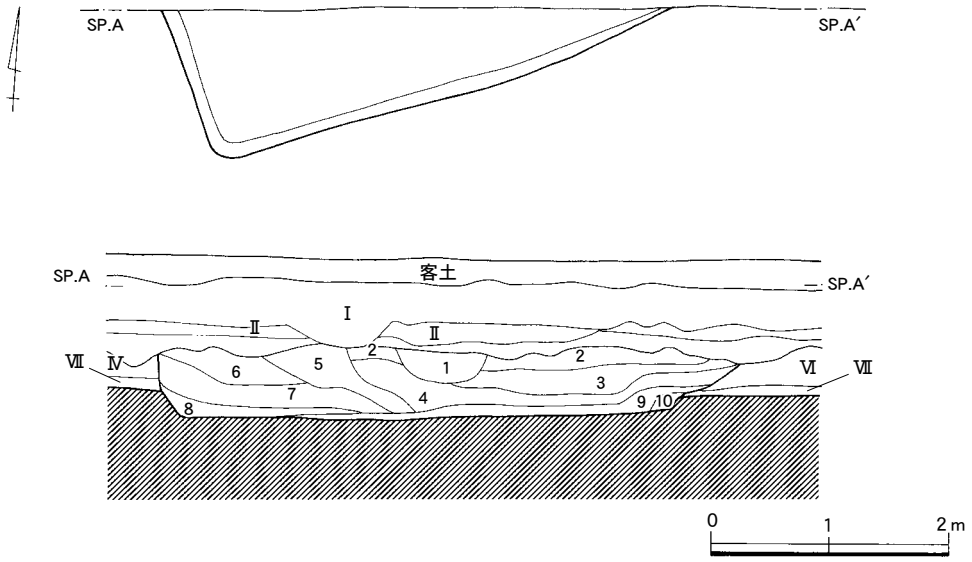
第４層　暗茶褐色土　第３層に準ずるが、混入物質は少なく、φ１㎜程度のローム粒子を少量含む。しまりは強く、粘性は弱い

第４号住居址カマド土層説明

第１層　暗 褐 色 土　暗褐色土を主体とし、φ１㎜程度のローム粒子･焼土粒子を少量含む。しまりは強く、粘性は弱い。
第２層　暗 褐 色 土　暗褐色土を主体とし、φ１㎜程度のローム粒子・φ３㎜以下の焼土粒子を中量含む。しまりは強く、粘性はやや高い。
第３層　暗赤褐色土　φ３㎝以下の焼土ブロック・φ２㎝以下の粘土ブロックを中量含む。しまり・粘性ともに強い。
第４層　暗赤褐色土　φ３㎝以下の焼土ブロック・粘土ブロックを主体とする。しまり・粘性ともに強い。
第５層　明 褐 色 土　暗褐色土を主体とし、φ５㎜以下の粘土粒子･φ１㎝以下の焼土ブロックを少量含む。
第６層　暗 褐 色 土　暗褐色土を主体とし、φ２㎜以下の焼土粒子を少量含む。しまりは強く、粘性は低い。
第７層　暗 褐 色 土　暗褐色土を主体とし、φ１㎜以下のローム粒子･焼土粒子を少量含む。しまりは強く、粘性は弱い。
第８層　暗 褐 色 土　暗褐色土を主体とし、φ１㎜以下のローム粒子を少量、φ１㎜以下の焼土粒子を微量含む。しまりは強く、粘性は弱い。
第９層　暗 褐 色 土　暗褐色土を主体とし、灰褐色砂質土を少量含む。しまりはやや弱く、粘性は強い。
第10層　暗黄褐色土　黄褐色砂質土を主体とし暗褐色土を少量含む。しまりは強く、粘性はない。

第５号住居址

調査区北壁中央部付近に位置し、遺構はほとんどが調査区外へ広がり、住居址南東隅のみが検出されている程度であり、その全容を知ることはできない。住居址の壁高は、確認面から最大26㎝の深さを測るが、規模の推定は調査区内の検出部からは不可能であり、平面形状も不明である。本住居址に伴うことの明確な遺物は検出されておらず、覆土中から古墳時代に属する土師器の破片が若干確認される程度であり、本遺構の時期の特定は出来なかった。



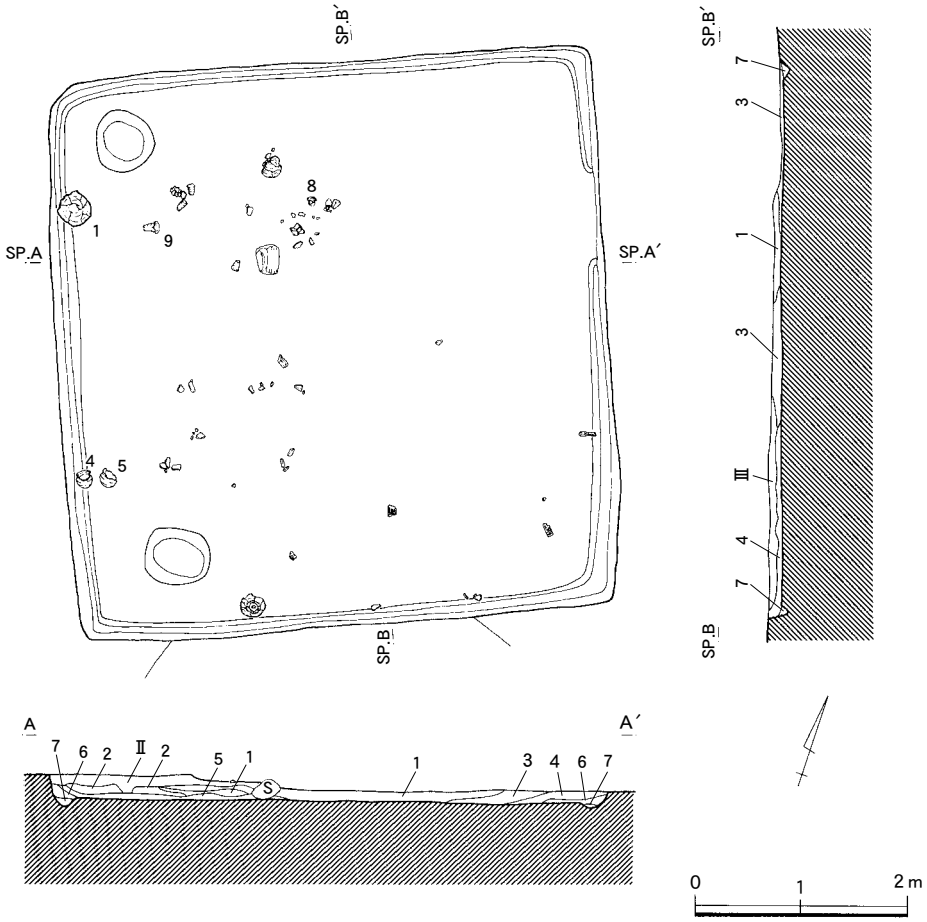
第14図　第５号住居址

第５号住居址土層説明

第１層　暗 褐 色 土　φ１～30㎜の小砂利を多量に含む。しまり・粘性ともに有する。
第２層　暗 褐 色 土　φ１㎜程度の炭化物粒子を中量含む。しまり・粘性ともに有する。
第３層　暗 褐 色 土　φ１㎜以下の白色粒子を含む。しまり・粘性ともに有する。
第４層　暗 褐 色 土　φ１～３㎝程度の片岩礫を含む。しまり・粘性ともに有する。
第５層　暗茶褐色土　φ１㎜程度の黄色粒子・白色粒子を含む。しまり・粘性ともに有する。
第６層　暗茶褐色土　φ１㎜程度の白色粒子を含む。しまり・粘性ともに有する。
第７層　茶 褐 色 土　φ１～２㎜程度の黄色粒子・白色粒子を含む。しまり・粘性ともに有する。
第８層　暗 褐 色 土　φ１㎜以下の白色粒子を含む。しまり・粘性ともに有する。
第９層　暗 褐 色 土　φ１㎜程度の白色粒子・φ１～５㎜の黄色粘質土粒を多量に含む。しまり・粘性ともに有する。
第10層　茶 褐 色 土　黄色粘質土主体の土層。しまり・粘性ともに強い。

第６号住居址

調査区北東寄りに位置し、第12ａ号住居址、第14号住居址と重複し、第12ａ号住居址に切られ、第14号住居址を切っている。遺構の遺存状態はやや良好で、住居址の壁高は確認面から25cmの深さである。住居址の平面形は概ね正方形を呈しており、規模は一辺が５ｍを測る。主軸は西南西方向をとる。住居址内からはピットが２基確認されており、両者ともに位置関係から貯蔵穴であることが推定されるが本住居址に伴うものであるかどうかは不明である。壁際には壁溝が確認されほぼ全周するが、東壁の一部分で途切れている。また、住居址からは炉が検出されており長辺35cm、短辺26cmの規模で中央やや西寄りに位置している。遺構の帰属年代は出土遺物から和泉期に比定される。



第15図　第６号住居址

第６号住居址土層説明

第 1 層　明 褐 色 土　φ５㎜以下の黄褐色砂質土

第 1′層　暗 褐 色 土　φ１㎜以下の黄褐色砂質土粒子を中量、１～２㎜程度の焼土粒子・φ１㎜以下の炭化物粒子を微量含む。しまり・粘性ともに弱い。

第 2 層　明茶褐色土　黄褐色砂質土粒子を中量、φ２㎜以下の焼土粒子・φ１㎜以下の炭化物粒子を少量含む。しまりはやや強く、粘性は弱い。

第 3 層　明 褐 色 土　φ５cm以下の黄褐色砂質土ブロックを斑状に含む。しまりはやや強く、粘性は弱い。

第 4 層　明 褐 色 土　第３層に準ずるが、φ３㎜以下の黄褐色ブロックをやや少なく、第１層に似る。

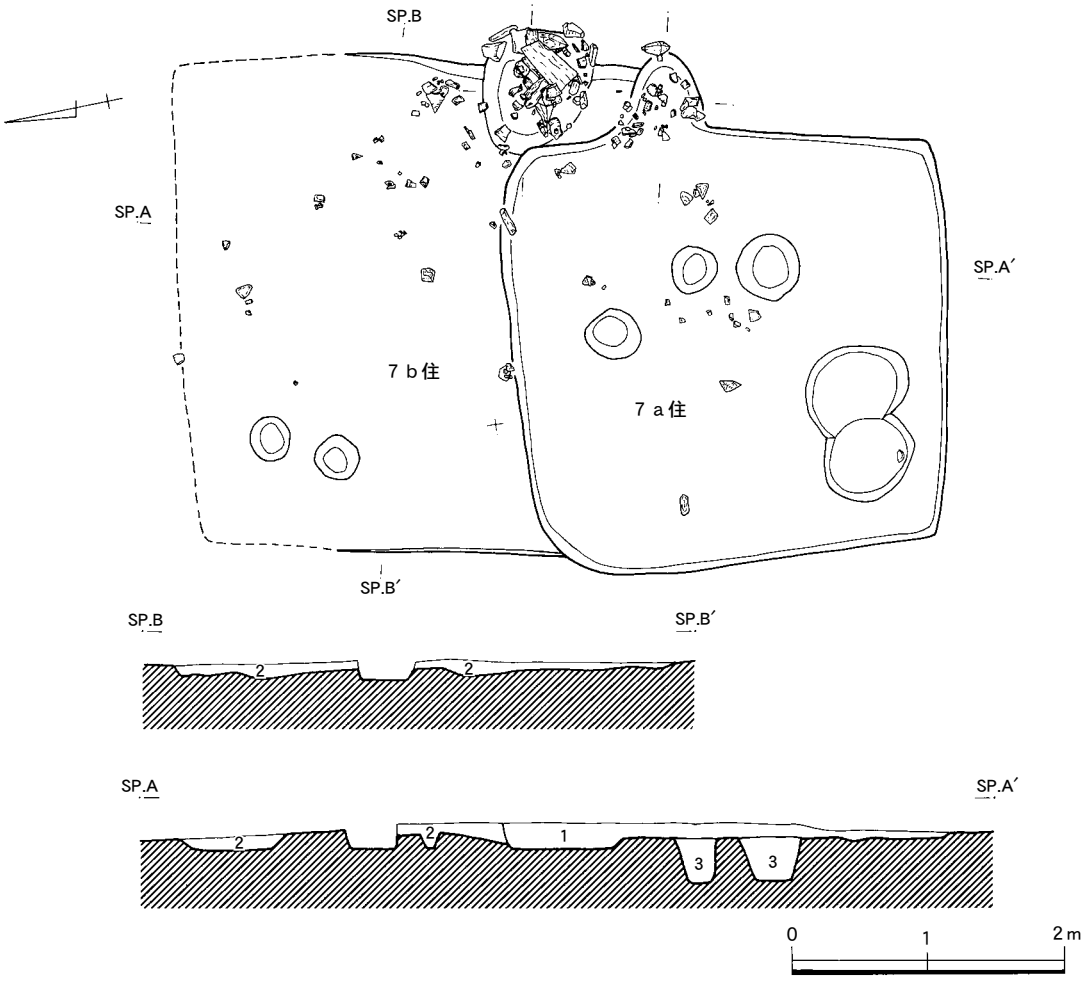
第 5 層　明茶褐色土　第２層に準ずるが、φ２㎜以下の炭化物粒子を多量に含み、φ１cm程度の炭化物を中量含む。しまりはやや強く、粘性は弱い。

第 6 層　明 褐 色 土　φ１cm程度の黄褐色砂質土ブロックを含む。しまりはやや強く、粘性は弱い。

第 7 層　暗 褐 色 土　明褐色土と黄褐色砂質土が均質に交じる層。しまりはやや弱く、粘性は弱い。

第７ａ・ｂ号住居址

調査区中央部西側寄りに位置する。両者は重複関係にあり第７ａ号住居址が第７ｂ号住居址を切っている。遺構の遺存状態は良好ではなく、第７ｂ号住居址北側の壁は失われている。両住居址の床面上からはピットが５基、土壙が重複して２基確認されているが、何れも遺構に伴うものであるかどうかは明確ではない。第７ａ号住居址は、確認面から最大高20cmの深さで残存しており、平面形状は正方形に近いがやや不整形であり、一辺が３ｍを測り、主軸は、西北西方向をとる。第７ｂ号住居址は、確認面から最大14cmの深さで残存しており、規模は一辺3.4m程と推定され平面形状は北壁を失っているため不明であるが、残存する床面の範囲から概ね正方形に近いことが想定される。第７ａ・ｂ号住居址の帰属年代は出土遺物から２軒とも平安時代に比定される。



第16図　第７ａ・７ｂ号住居址

第７号住居址土層説明

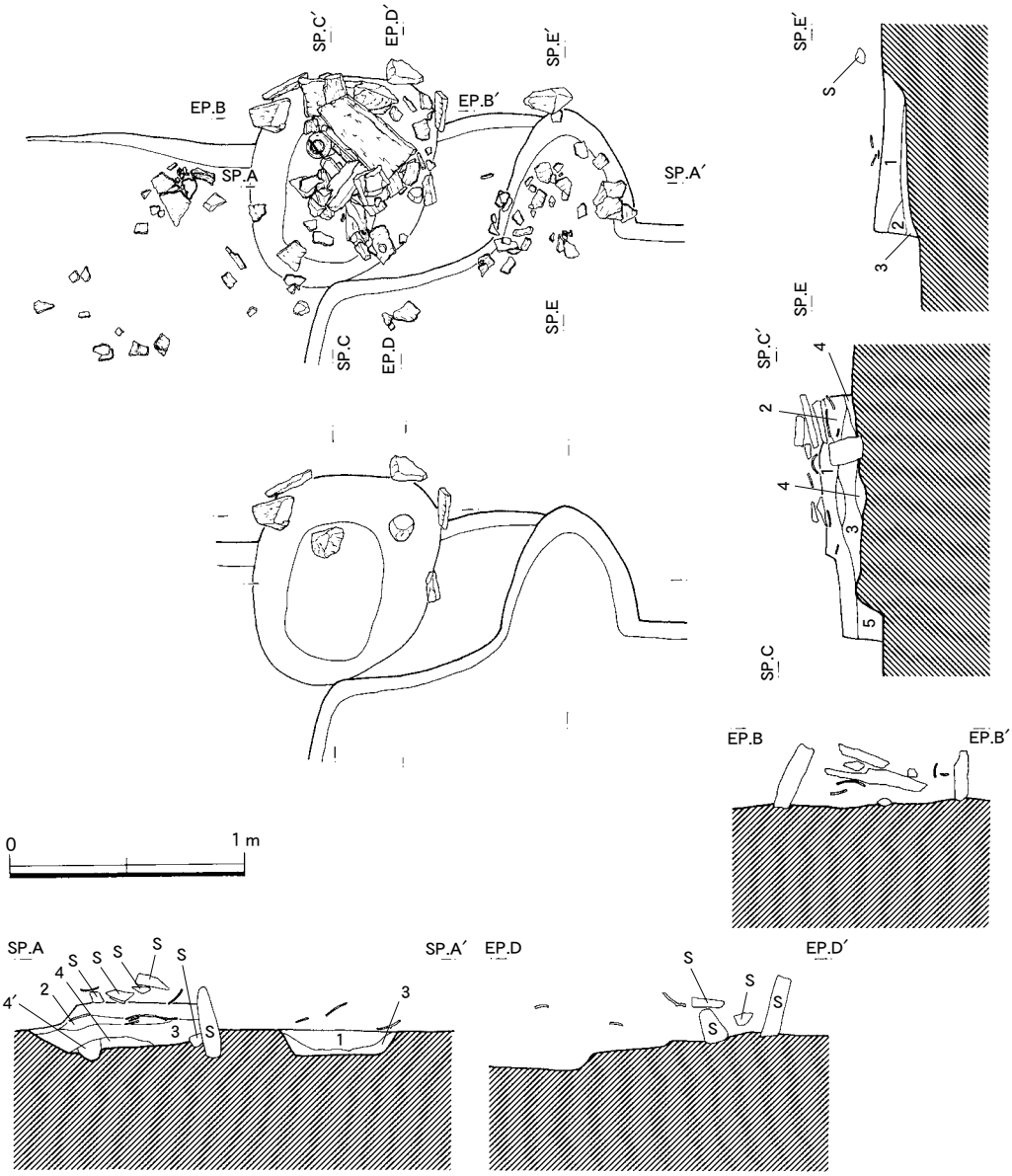
第１層　暗褐色土　φ１～３㎜程度の焼土粒子・炭化物粒子を含む。しまり・粘性ともに強い。

第２層　暗褐色土　第１層に準ずるが、色調が暗く、焼土粒子・炭化物粒子の混入が少ない。

第３層　暗褐色土　第１層に準ずるが、焼土粒子・炭化物粒子を中量含む。

第７a号住居址カマド

本カマドは住居址東壁左寄りに位置し、壁体を掘り込むことで燃焼部を確保している。燃焼部は焚き口付近でやや掘り窪まり最大で10cm程度の高さを測り、煙道へ向かってすり上がっていく形状を呈している。規模は全長66cm、最大幅55cmを測り、袖は検出されなかった。本カマド構築のため、第７b号住のカマドの一部が少々破壊されている。



第17図　第７ａ・７ｂ号住居址カマド

第７ａ号住居址カマド土層説明

第 1 層　暗 褐 色 土　黄色粘質土粒子・炭化物粒子を多量に含む。しまり・粘性ともにやや強い。
第 2 層　茶 褐 色 土　φ１㎜以下の白色粒子を多量に含む。しまり・粘性ともにやや強い。
第 3 層　茶 褐 色 土　やや砂質を帯び、φ１～２㎝程度の小礫を中量含む。しまり・粘性ともにやや強い。

第７ｂ号住居址カマド土層説明

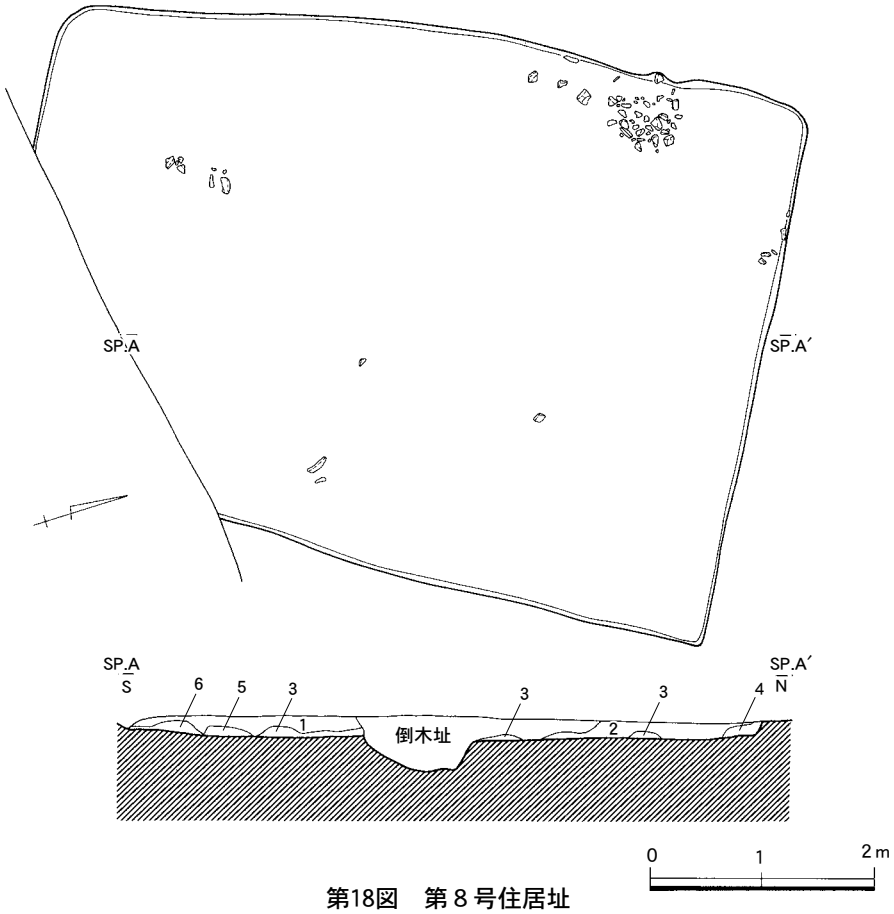
第 1 層　暗　褐　色　φ１～２㎜の焼土・炭化物粒子を若干含む。しまり・粘性ともに強い。
第 2 層　橙 褐 色 土　焼土を主体とし、若干の褐色粘質土を含む。しまり・粘性ともに強い。
第 3 層　褐　色　土　φ１～２㎜の焼土粒子・炭化物粒子を多量に含む。しまり・粘性ともに強い。
第 4 層　明橙褐色土　焼土を主体とし、φ１㎜程度の炭化物粒子を中量含む。
第4′層　明 褐 色 土　焼土粒子を多量に含む。
第 5 層　暗 褐 色 土　φ１～５㎝の礫を多く含む。

第７b号住居址カマド

本カマドは東壁やや右寄りに位置するものと思われ、カマドは結晶片岩を利用した石組みのものであり、羽釜を中心とした土器片と共に潰れた状態で検出された。規模は全長80㎝、最大幅は60㎝を測り、燃焼部は焚き口付近はやや掘り窪められ、最大高は18㎝程で壁体を掘り込むことで造られている。また燃焼部の外周に、石材が立てられたままで検出された。

第８号住居址

調査区南壁中央部付近に位置し、住居址南東側が調査区外である。遺構の遺存状態はあまり良好ではなく、住居址は確認面から最大で10㎝の深さである。住居址の平面形は、長方形に近い不整形を呈しており、規模は長辺6.6m、短辺4.8mを測り、主軸は北西方向をとる。住居址北西側の壁際に礫の集中が認められるほか、中央部からこの遺構を切る土層捻転址が検出されている。なお遺構の年代を比定しうる時期判定の可能な遺物は検出されておらず、構築年代は不明である



第18図　第８号住居址

第８号住居址土説明

第１層　黒 褐 色 土　黒褐色土を主体とし、φ３～５㎝の礫を少量含み、黄褐色砂質土ブロック【φ５～15㎝】を班点状に含む。しまりを有するが粘性は弱い。

第２層　暗褐色砂質土　黒褐色土と黄褐色砂質土を均等に含み、全体に小礫【φ３㎝】を中量含む。やや硬質で粘性はない。

第３層　黄褐色砂質土　黄褐色砂質土全体の層。含有物はなく硬くしまっているが、粘性はない。

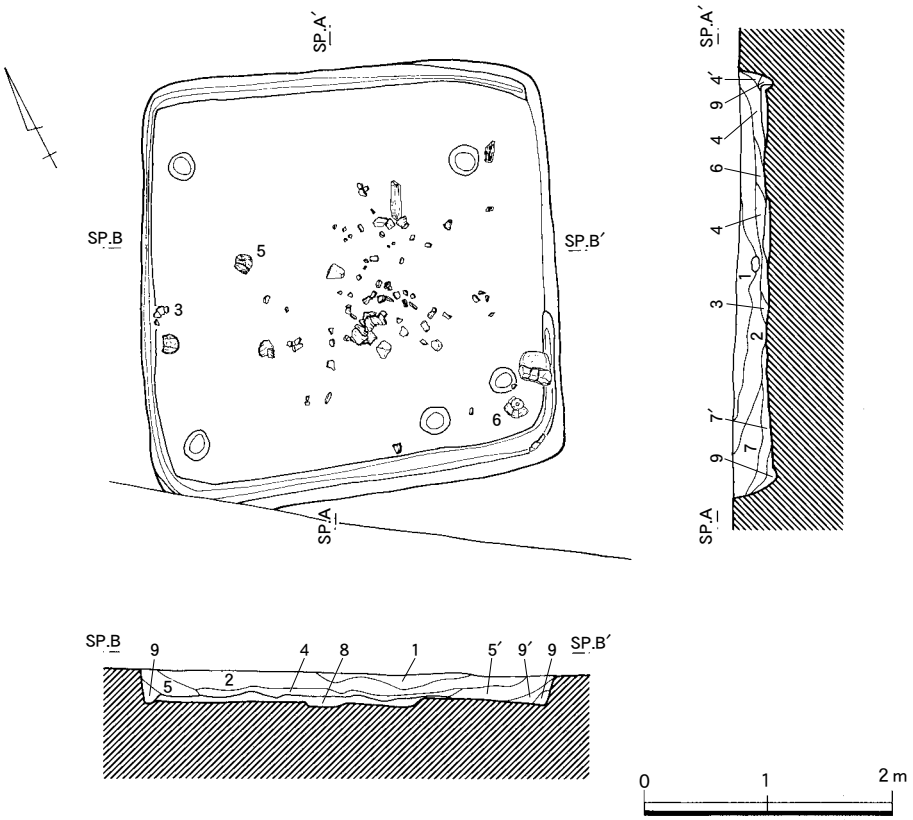
第４層　暗褐色砂質土　組成は第２層に類似するが、礫の含有量が少ない。

第５層　暗 褐 色 礫　φ３㎝の小礫主体の層。しまり・粘性ない。

第６層　黒 褐 色 礫　φ３㎝の小礫と黒褐色土を若干含む。しまり弱く、粘性ない。

第９号住居址

調査区西壁付近やや北側寄りに位置し、第４号住居址と重複し、これに切られている。遺構の遺存状態は比較的良好であり、住居址は確認面から最大21㎝の深さで残存している。住居址の平面形は、概ね正方形を呈し、規模は一辺が3.5mを測る。また、主軸は西北西方向をとる。西側の一部を除き周溝が全体に掘られており、床面上からピットが５基確認されており位置関係から主柱穴であると考えられる。なお、本住居址は炭化材と木炭層の広範な分布が認められ、床面には、被熱による硬化面が数カ所認められることから焼失住居であると考えられるが、このため住居に伴うと思われる炉の位置の特定については判定が難しい。遺構の帰属年代は、出土遺物から和泉期に比定される。



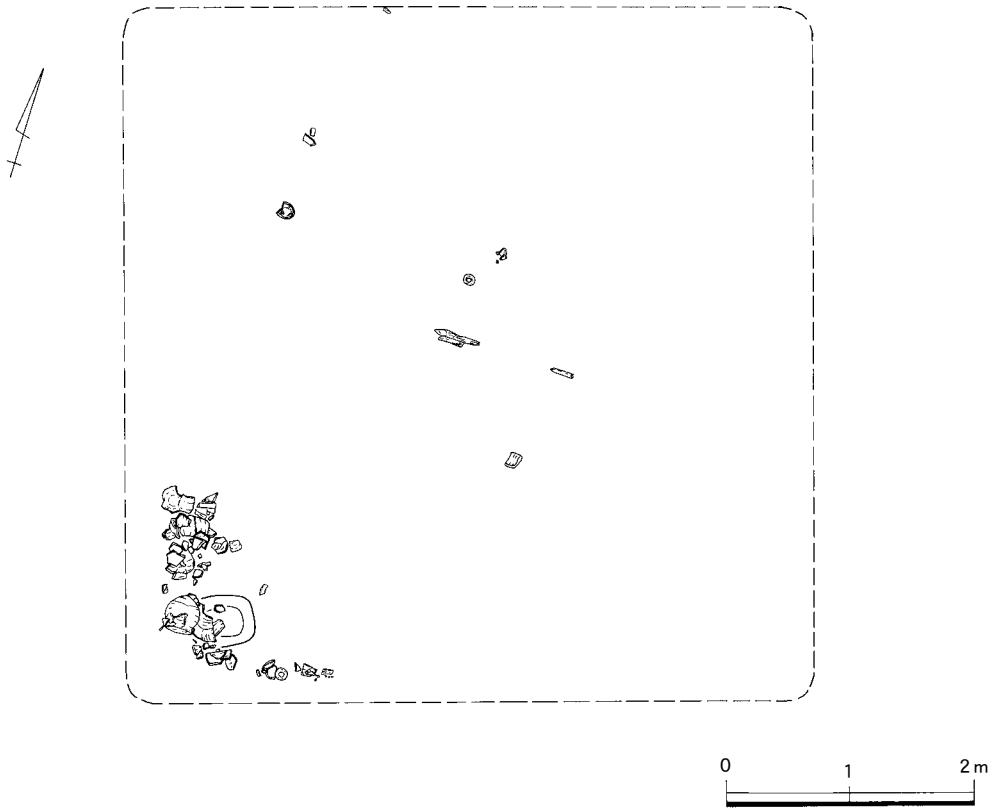
第19図　第９号住居址

第９号住居址土層説明

第 1 層　暗 褐 色 土　¢３㎝程の小礫を多量に、焼土粒・炭化物粒を中量、浅間B軽石的な砂粒を少量含む。色調は黒味がかっており、少々軟質で粘性を若干有する。
第 2 層　暗茶褐色土　焼土粒・黄褐色砂質粒・炭化物(～１㎝)を少量含む。やや硬質で粘性をやや有する。
第 3 層　暗赤褐色土　焼土粒・焼土小ブロックと黄褐色砂質粒の集合体。中央付近に所在するが炉址の可能性は低い。しまり・粘性共に有する。
第 4 層　暗茶褐色土　組成は２層に類似するが、焼土粒だけが目立ち他の混入は少ない。
第 5 層　暗赤褐色土　組成は３層に類似するが、焼土小ブロックの含有量が少ない。
第 6 層　暗茶褐色土　焼土粒・焼土小ブロックを中量、炭化物粒を少量含む。やや砂質であり、しまりは良く粘性を若干有する。
第 7 層　暗茶褐色土　焼土粒・焼土小ブロックを中量含むが、壁に近くなる程含有量は少なくなっていく。しまり・粘性共に有するが弱い。
第 7′層　暗茶褐色土　組成は７層に類似するが、黄褐色砂の小ブロックを少量含む。
第 8 層　黄 褐 色 土　黄褐色砂を主体とし、暗茶褐色土を少量混入する。しまり・粘性共有するが弱い。
第 9 層　暗黄褐色土　暗茶褐色土と黄褐色砂がほぼ同一の混合土。しまり・粘性共に有するがやや弱い。
第 9′層　暗黄褐色土　組成は９層に類似するが、黄褐色砂の割合がやや多い。

第10号住居址

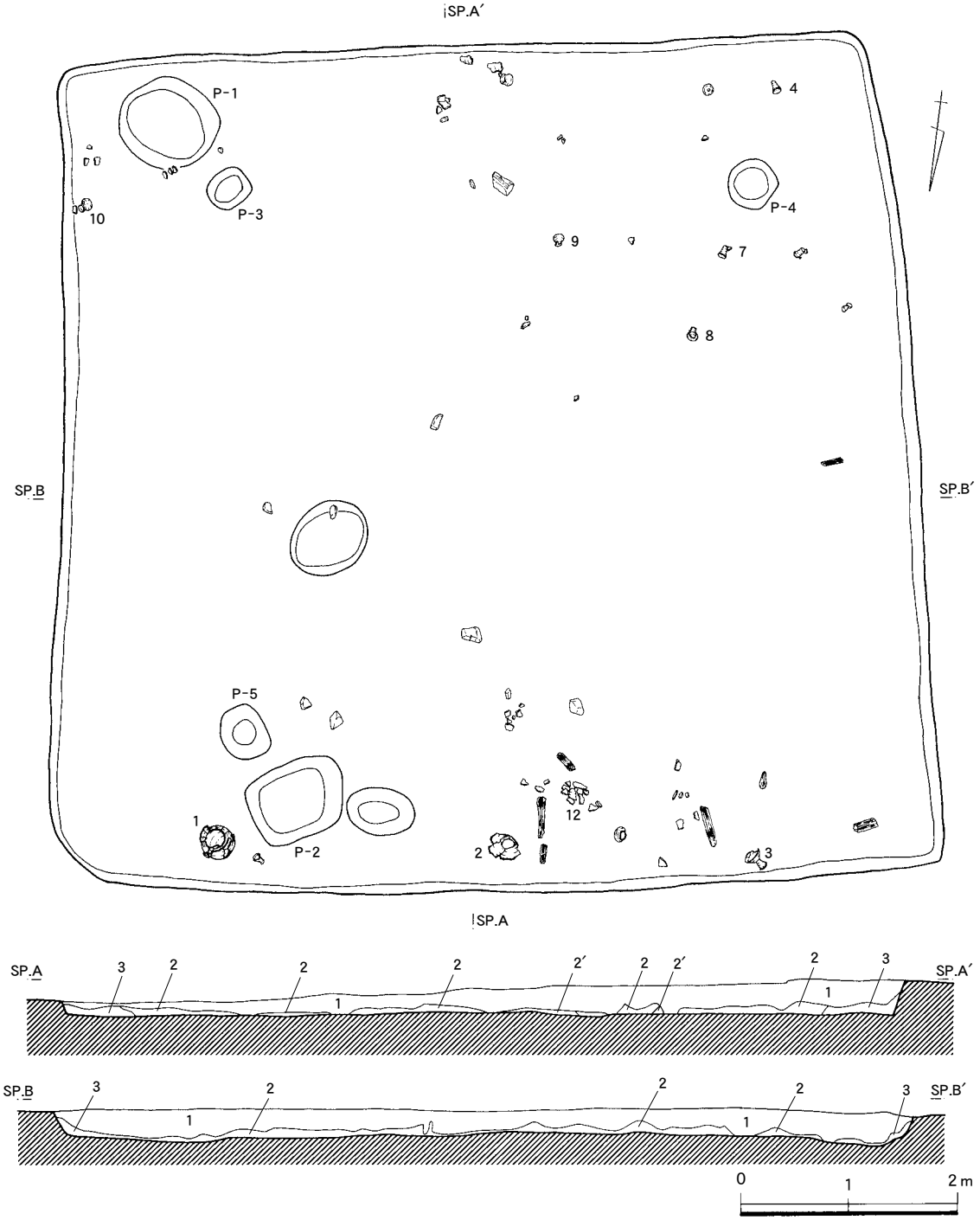
調査区北西隅に位置する。第３号土壙・第６号土壙と重複するが新旧関係は不明である。遺構の遺存状態は悪く、確認面が耕作等によって荒れていたためプランを検出することができず、このため住居址の形状・規模については床面や炉址の位置等の状況から見て、推定で一辺約５m強の正方形を呈するものと思われるが確定は出来なかった。本住居址では炉が長辺64cm、短辺42cmの規模で検出された他に貯蔵穴が確認され、遺物は主として貯蔵穴の周辺から潰れた状態での出土が確認された。これらの出土遺物の年代から、本住居址は和泉期の所産である。



第20図　第10号住居址

第11号住居址

調査区南西寄りに位置し、他の住居址との重複関係は認められない。遺構の遺存状態はやや良好であり、住居址は確認面から最大22cmが残存している。住居址は比較的大型で平面形は概ね正方形を呈しており、規模は一辺が８m前後を測り主軸は西南西方向をとる。住居址内からは７基のピットが検出されており、住居址との新旧関係は不明であるが、Ｐ－１またはＰ－２はその位置関係から貯蔵穴の可能性が確認され、Ｐ－３～Ｐ５は住居址の対角線上に位置するため本住居址の主柱穴であると考えられる。また本住居址は炉が長辺50cm、短辺40cmの規模で検出され、ほぼ床面の中央に位置している。遺構の帰属年代は、出土遺物から和泉期に比定される。



第21図　第11号住居址

第11号住居址土層説明

第 1 層　暗 褐 色 土　φ１㎜程度の黄褐色砂質土粒子・φ３㎝以下の礫を少量、φ３㎝程度の黄褐色砂質土ブロック・φ５㎝以下の礫を微量含む。しまり・粘性ともに弱い。

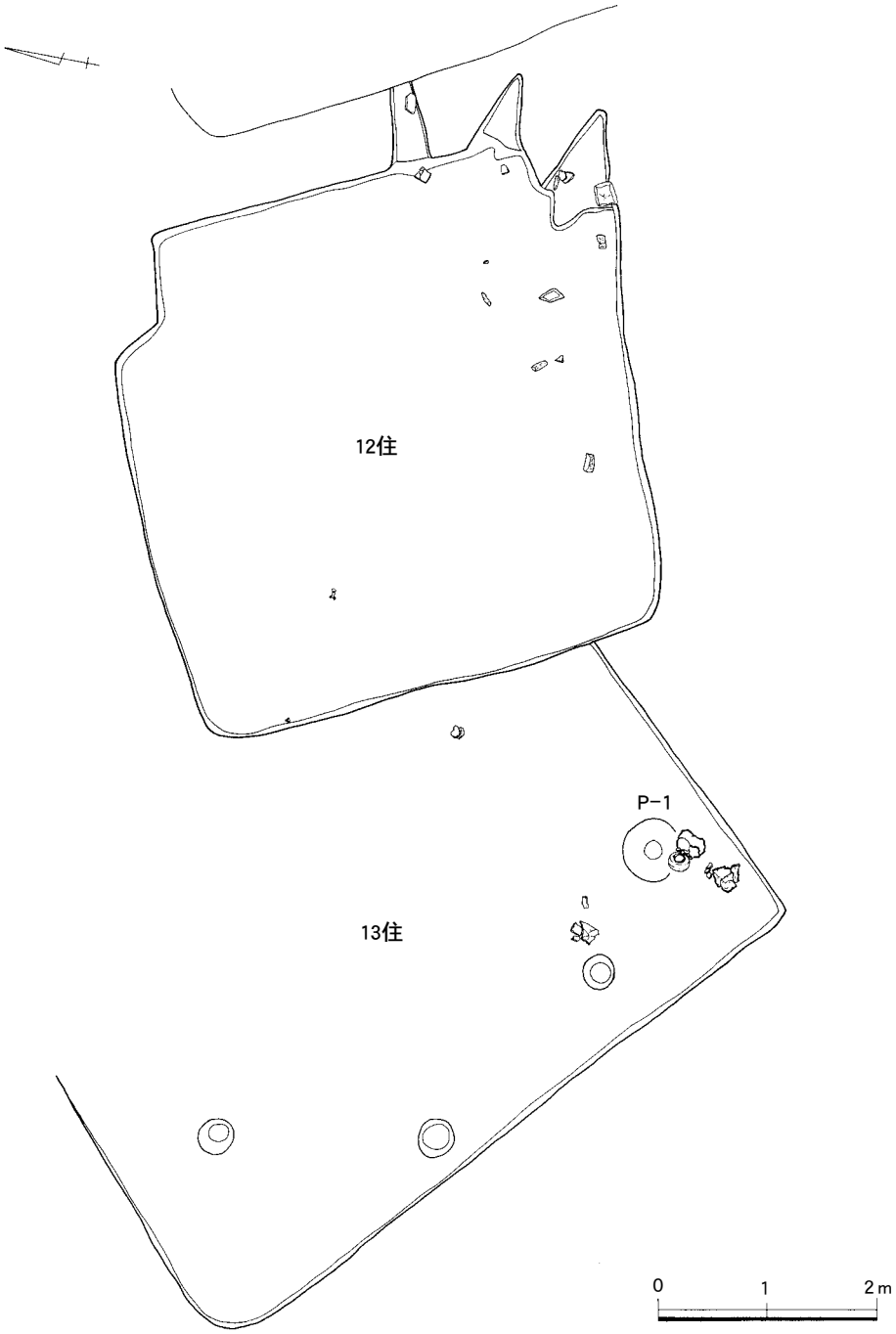
第 2 層　暗茶褐色土　暗褐色土を主体とし、第１層に類似するが、小礫・礫をほとんど含まず、黄褐色砂質土粒子・黄褐色砂質土ブロックは第１層よりやや多い。しまり・粘性ともに弱い。

第 2′層　暗茶褐色土　第１層に類似するが、黄褐色砂質土粒子・黄褐色砂質土ブロックを多量に含む。

第 3 層　暗 褐 色 土　暗褐色土を主体とし、黄褐色砂質土粒子を中量、φ３㎝以下の黄褐色砂質土ブロックを斑状に、小礫を少量含む。しまり・粘性ともに弱い。

第12ａ・ｂ・ｃ号住居址

調査区北壁付近やや東側に位置し、第６号住居址・第13号住居址と重複関係にあり、何れも切っている。またこれ以外に第12号住居址は壁体を掘り込むカマドを住居址東側の壁に３基有するため、本住居址は最低３軒の重複関係が想定されるところであるが、覆土が後世の耕作による撹乱を受けており、カマドの新旧関係やプランの確認が困難な状態になっていて明らかにすることができず、推定で4.5m前後の正方形を呈していると思われるがいずれの住居の壁であるかは定かではない。３軒の個別の年代は明らかにし得ないが、カマドの形態や混入する土器片の時期から、概ね３軒とも平安時代の範疇に収まるものであると思われる。



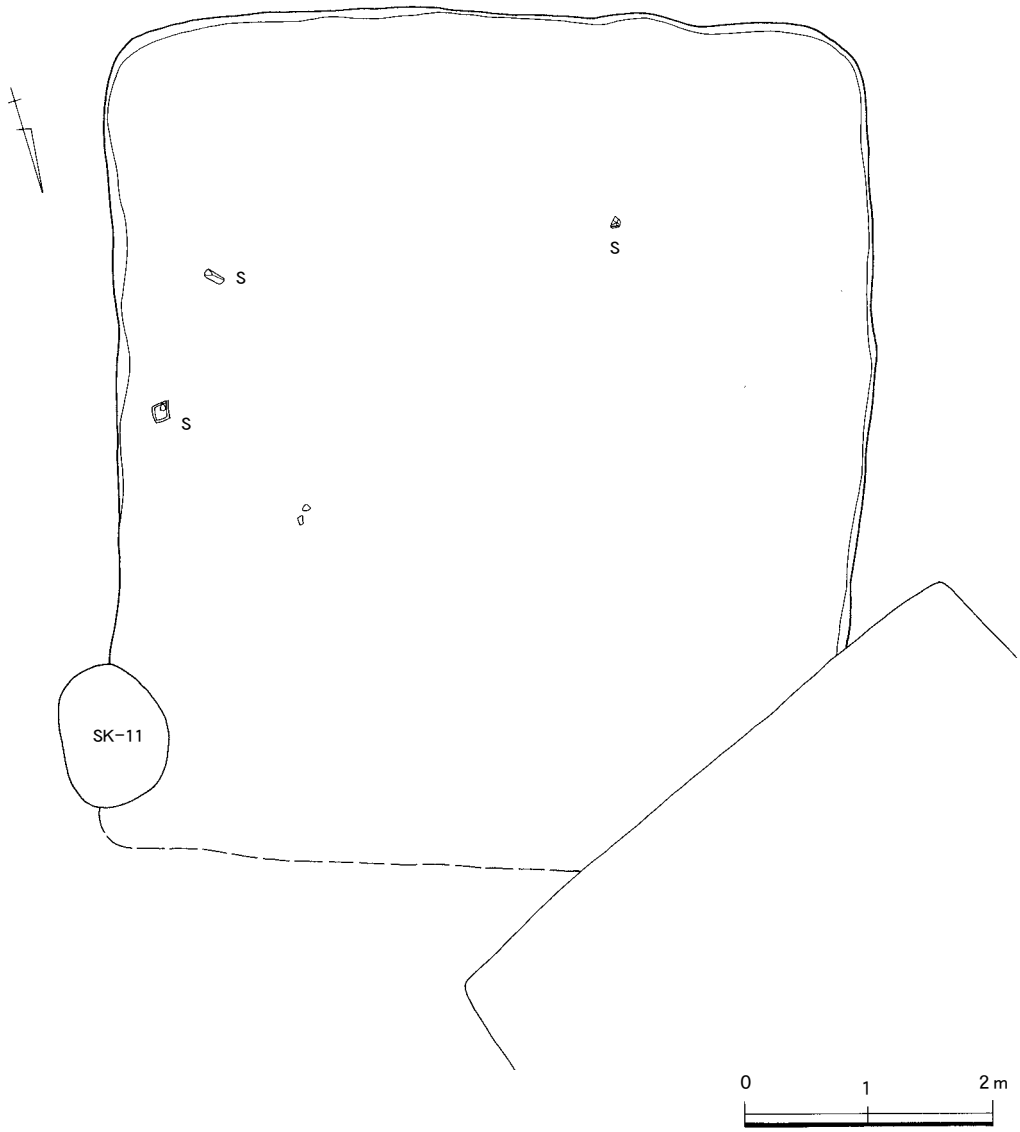
第22図　第12・13号住居址

第13号住居址

調査区北壁付近やや東側に位置し、第12ａ・ｂ・ｃ号住居址と重複関係にあり、これに切られている。遺構の遺存状態は悪く、北西側の壁が失われており、住居址は確認面から、最大で８㎝の深さが残存している。住居址の平面形は、正方形であることが推定され、規模は残存しているところで一辺が6.5mを測る。住居址内からは、ピットを４基検出しているが、Ｐ－１以外の３基については新旧関係は不明である。遺構の帰属年代は、出土遺物から概ね和泉期に比定される。

第14号住居址

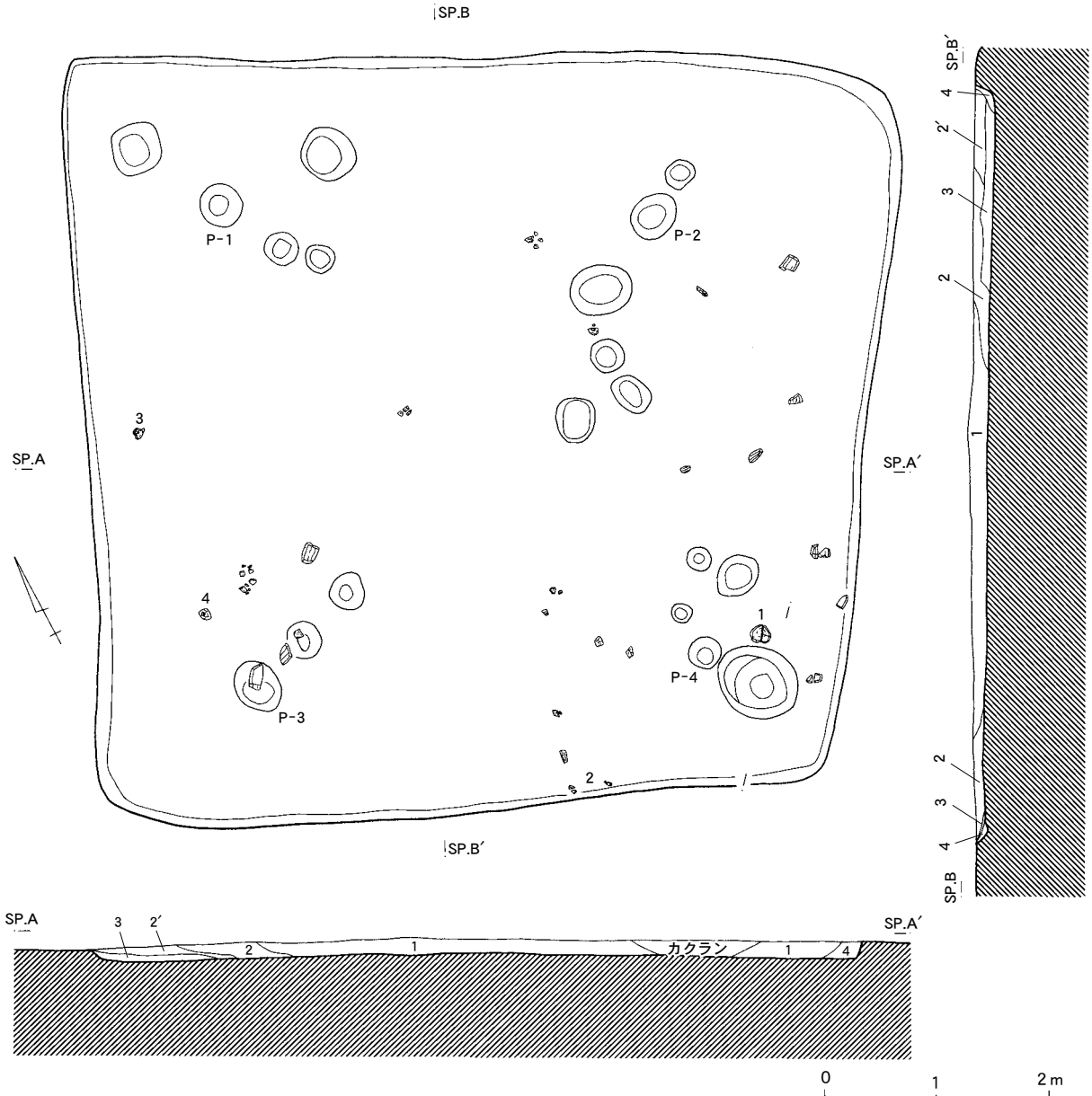
調査区中央部やや北東よりに位置し、第６号住居址・第11号土壙と重複関係にあり、これらに切られている。遺構の遺存状態は悪く、住居址は、確認面から最大で９㎝の深さが残存している。住居址の平面形は概ね正方形を呈しており、規模は一辺が６ｍを測り、本址の床面上からは、住居に付属すると思われる遺構は検出されていない。遺構の帰属年代は、覆土中の土器片・遺構の形態から和泉期に比定される。



第23図　第14号住居址

第15号住居址

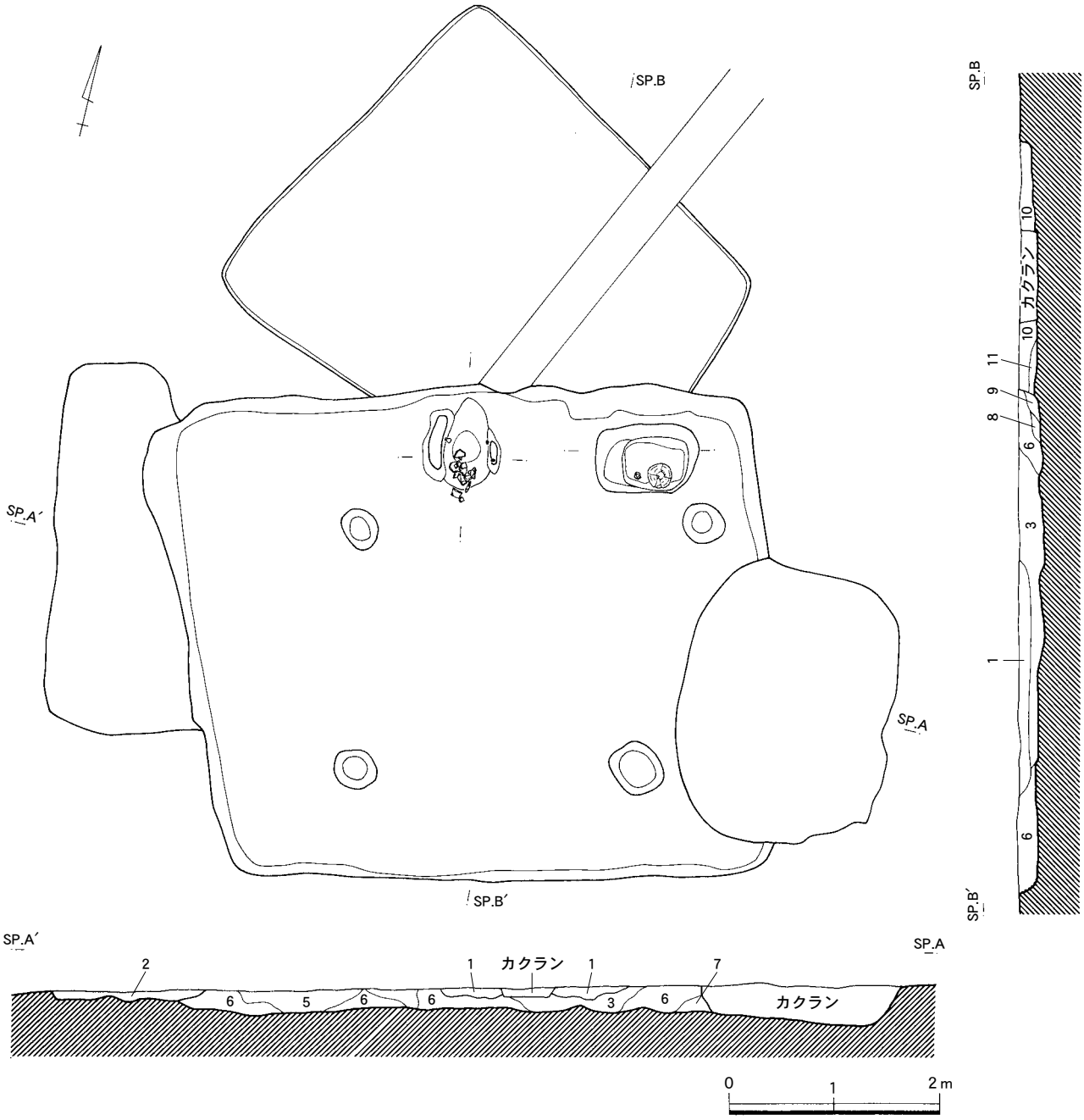
調査区中央部やや東寄りに位置し、重複関係にある住居址は見受けられない。遺構の遺存状態はやや良好で、住居址は、確認面から最大で19㎝の深さが残存している。住居址の平面形は概ね長方形を呈しており、規模は長辺が7.4m、短辺が6.8mを測り、主軸は北西方向をとる。住居址内からはピットが18基確認され、その内のＰ－１～Ｐ－４が、ほぼ住居址対角線上に集中している。また住居址南東隅から貯蔵穴が検出され、炉が住居址の床面ほぼ中央に位置している。遺構の帰属年代は、出土遺物から五領期に比定される。



第24図　第15号住居址

第15号住居址土層説明

第 1 層　黒褐色土　黒褐色土を主体とし、φ１㎝以下の小礫を中量、φ３㎝以下の黄褐色砂質土ブロックを斑状に少量含む。
第 2 層　黒褐色土　第１層に準じるが、小礫の混入が多い。
第 2′層　黒褐色土　第一層に準じるが、少量の焼土粒子の混入が認められる。
第 3 層　黒褐色土　第１層に準じるが黄褐色砂質土ブロックの混入がやや少なく、層礫を多量に含む。
第 4 層　暗褐色土　φ１㎝以下の小礫を少量含む。しまり・粘性ともに弱い。



第25図　第16・18号住居址

第16・18号住居址土層説明

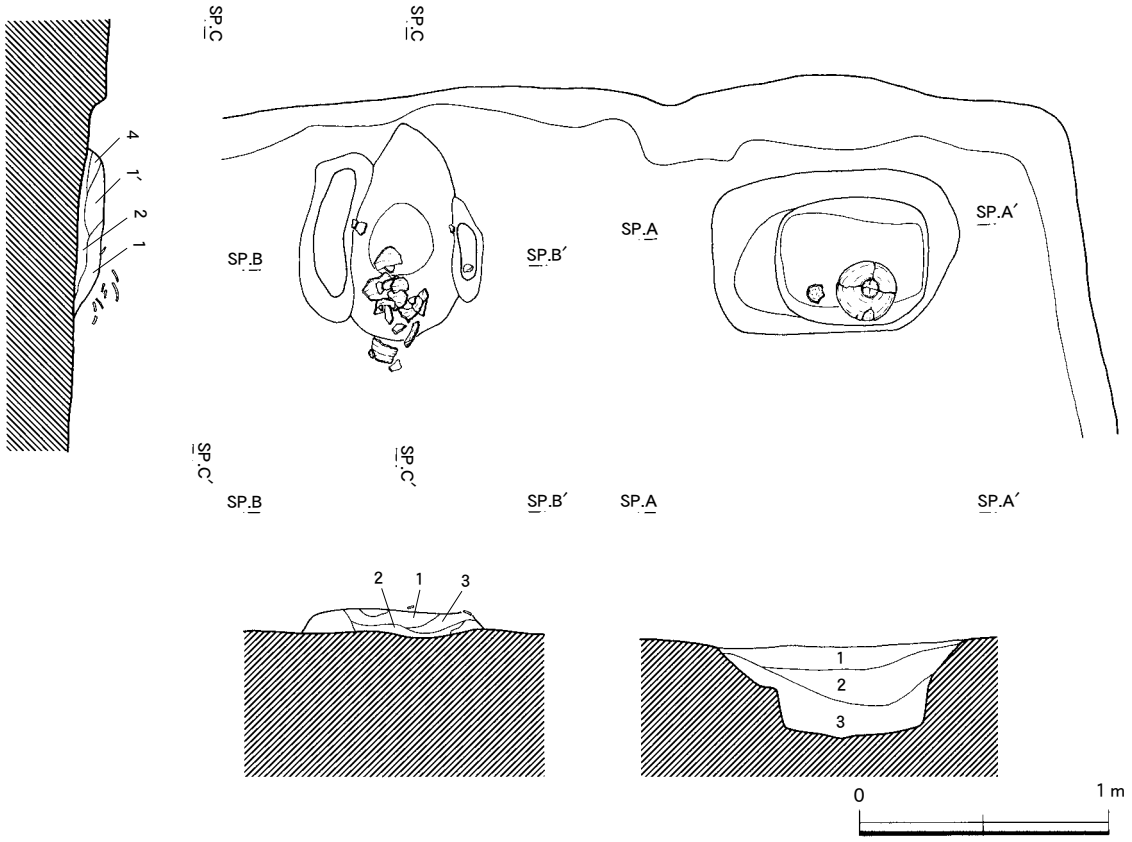
第１層　灰 褐 色 土　黄色土ブロックを疎らに含む。しまりは強く、粘性は弱い。
第２層　灰 褐 色 土　黄色土ブロックを疎らに含む。しまりは強く、粘性は弱い。
第３層　暗灰褐色土　φ３㎝程度の黄色土粒子・土器片を含む。しまりは強く、粘性は弱い。
第４層　暗 灰 色 土　φ１㎝程度の小礫を疎らに含む。しまりは強く、粘性は弱い。
第５層　暗 灰 色 土　φ５㎜程度の黄色土ブロック・φ１㎝程度の小礫しまりは強く、粘性は強い。
第６層　暗 褐 色 土　φ３～５㎝程度の礫・土器片を多量に含む。しまりは強く、粘性は強い。
第７層　茶 褐 色 土　φ５㎜程度の小礫を多量に含む。しまりは強く、粘性は強い。
第８層　暗 褐 色 土　黄色土ブロックを少量含む。しまりは強く、粘性は強い。
第９層　暗 褐 色 土　黄色土が全体的に混入する。しまりは強く、粘性は強い。
第10層　暗 灰 色 土　φ５㎜程度の小礫を均一に、黄色土を少量含む。しまりは強く、粘性は弱い。
第11層　黄　色　土　地山。しまりは強く、粘性は弱い。

第16号住居址

調査区中央部やや南よりに位置し、第18号住居址と重複関係にありこれを切っている。遺構は粘土採集による撹乱を受け、遺存状態が悪く確認面から最大で24cmの深さが残存している。住居址の平面形は正方形を呈していたと思われるが、撹乱を受け不正形にひずんだ状態で検出されて、規模は長辺が5.2m、短辺が4.5mを測る。住居址内からはピットが４基確認されており、その位置関係から本住居址の主柱穴であると考えられ、他に貯蔵穴が住居址南東隅から検出されている。なお、壁溝の存在は確認されなかった。覆土中からは、多量の礫・土器片が出土している。遺構の帰属年代は、出土遺物から鬼高Ⅱ期に比定される。

第16号住居址カマド

本カマドは東壁に設置されているが、撹乱によって損壊を受けており遺存状態は悪い。残存する規模は全長95cm、最大幅74cmを測り、燃焼部は最大高10cm程度掘り窪められ、袖は焚き口方向に向かってわずかに開いているが、撹乱により寸断されており壁面への設置の状態は不明である。



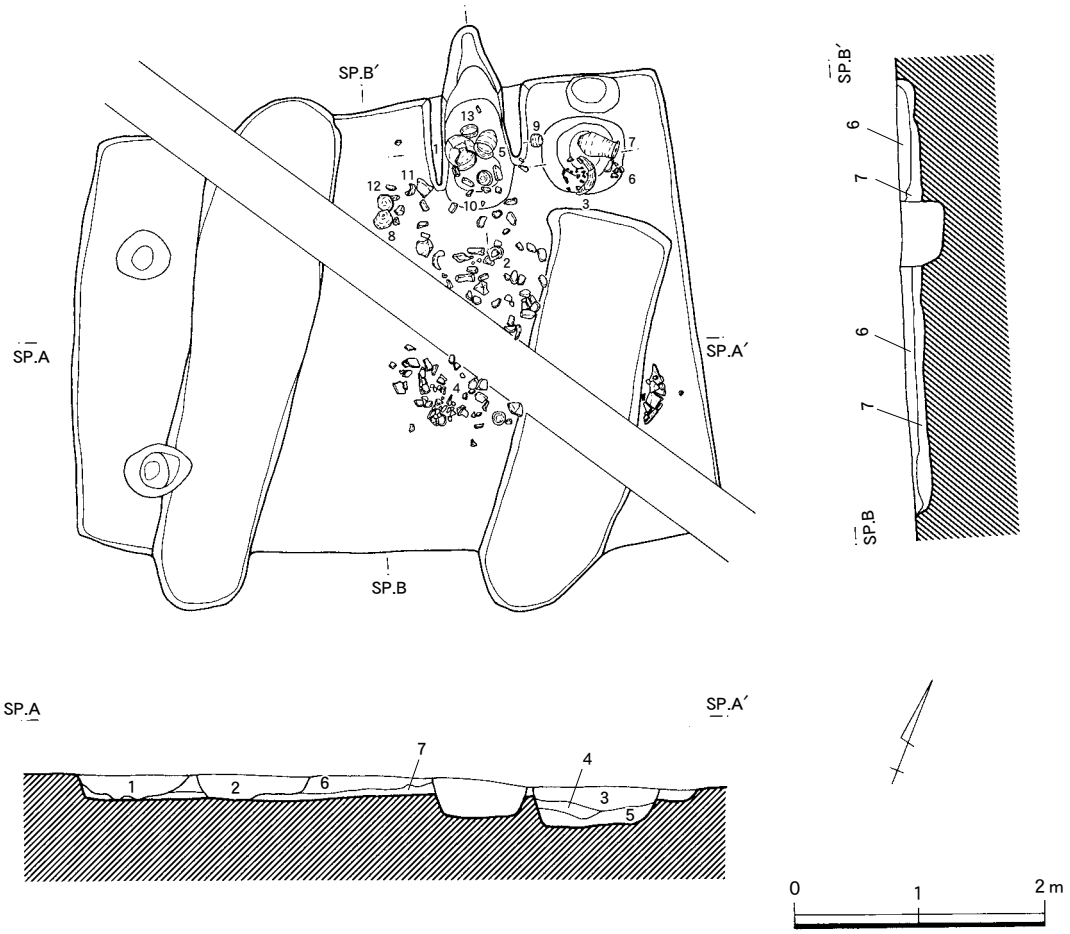
第26図　第16号住居址カマド

第16号住居址カマド土層説明

第 1 層　暗黄褐色土　φ２cm以下の焼土ブロック・φ２mm以下の焼土粒子を中量含む。しまりはやや弱く、粘性は無い。
第 1′層　暗黄褐色土　第１層に準じるが焼土ブロックがやや少ない。
第 2 層　暗灰褐色土　φ１mm以下の焼土粒子を中量含む。しまり・粘性ともに弱い。
第 3 層　暗灰褐色土　第２層に準ずるが焼土粒子を少量含む。
第 4 層　暗 褐 色 土　焼土粒子主体の層。

第17号住居址

調査区南壁付近東よりに位置し、第13・14・15号土壙と重複関係にありこれらの全てに切られた他に埋設された水道管が住居址内を斜行して切っている。このため遺跡の遺存状態は良好ではなく、壁高は確認面から最大で19㎝の深さで残存している。住居址の平面形状は長方形を呈しており長辺が5.1m、短辺が3.8mを測り、主軸は西南西方向をとる。本址の床面上からは３基のピットが確認されているが、住居址との帰属関係は不明でありその他に住居址北東隅から貯蔵穴が検出されている。遺構の帰属年代は、出土遺物から、鬼高Ⅱ期に比定される。



第27図　第17号住居址

第17号住居址土層説明

第１層　灰 褐 色 土　φ１㎜程度の焼土粒子・浅間山系Ａ軽石を均一に含む。しまり・粘性ともに強い。（ＳＫ－13）

第２層　灰 褐 色 土　φ２㎜程度の焼土粒子・φ２～３㎝程度のロームブロックを少量含む。しまり・粘性ともにやや強い。

第３層　灰 褐 色 土　φ１～２㎜程度の焼土粒子・φ２㎝程度のロームブロックを少量含む。しまり・粘性ともにやや強い。

第４層　暗灰褐色土　φ２㎝程度のロームブロックを少量含む。しまり・粘性ともにやや強い。（ＳＫ－15）

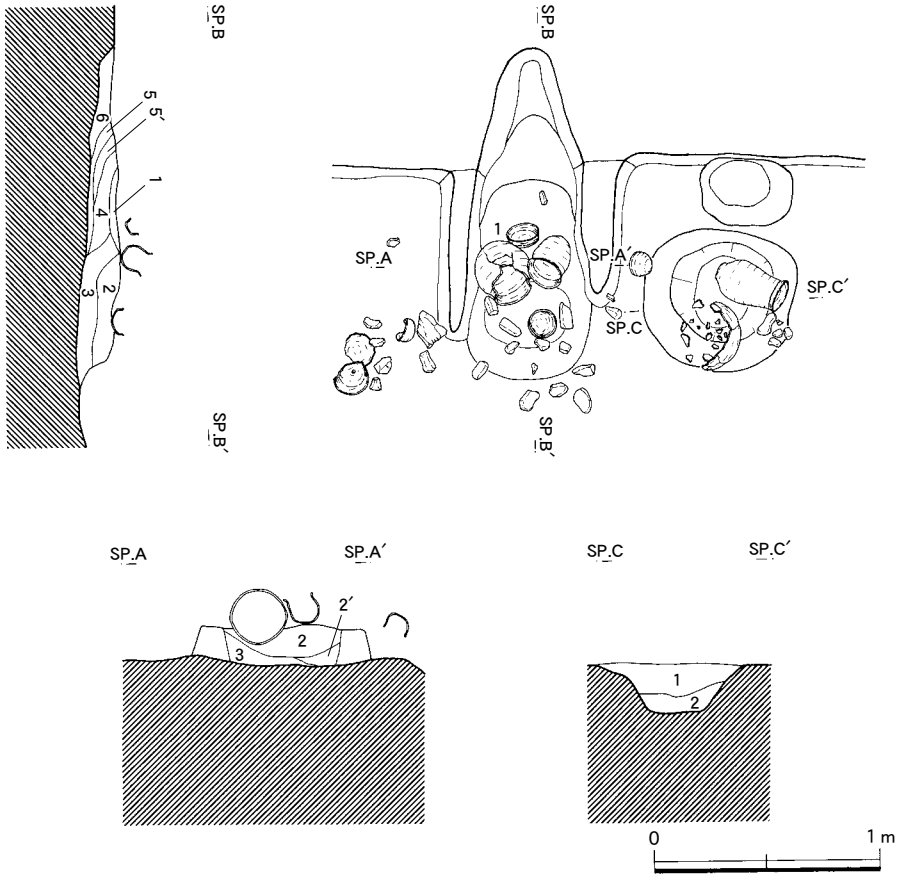
第５層　暗灰褐色土　ローム土を全体的に含む。しまり・粘性ともにやや強い。（ＳＫ－15）

第６層　褐　色　土　ローム土を少量含む。しまり・粘性ともにやや強い。（ＳＫ－15）

第７層　黄　色　土　ローム土と第７層土が混じった層。しまり・粘性ともにやや強い。

第17号住居址カマド

本カマドは住居址北壁中央よりやや右側にずれたところに、壁体が煙道部として掘り込まれた状態で設置されている。規模は全長148㎝、最大幅82㎝を測り、袖は真っ直ぐ付されており、壁の最大高は19㎝程で燃焼部は床面を若干掘り窪められた状態を呈している。カマドからは甕が二個体並列して掛けられた状態で出土している。



第28図　第17号住居址カマド

第17号住居址カマド土層説明

第 1 層　暗茶褐色土　φ２㎝程度の焼土ブロック・φ１㎜程度の黄褐色砂質土粒子を中量含む。しまりやや強く、粘性は強い。
第 2 層　暗茶褐色土　焼土粒子を多量、φ２㎝程度の焼土ブロック・φ５㎜程度の黄褐色砂質土ブロックを少量含む。しまり・粘性ともにやや強い。
第 3 層　暗黄褐色土　φ２㎝程度の黄褐色砂質土ブロック多量、φ１㎜程度の焼土粒子・炭化粒子を少量含む。しまりはやや弱く、粘性は強い。
第 4 層　暗黄褐色土　第３層に準ずるが、暗褐色土をやや多く混じる。
第 5 層　暗 褐 色 土　φ３㎝程度の黄褐色砂質土ブロックを斑状に含む。
第 5′層　暗 褐 色 土　第５層に準ずるが、φ１㎝程度の黄褐色砂質土ブロックをやや多量に斑状に含む。
第 6 層　暗黄褐色土　地山の風土土が主体を成し、φ１㎜程の炭化物粒子を少量含む。

第18号住居址

調査区中央部やや南寄りに位置し、第16号住居址と重複関係にありこれに切られ、住居址内を埋設された水道管が斜行して覆土を切断している。遺構の遺存状況は悪く、住居址は確認面から最大で５㎝程度が残存する。住居址の平面形状は正方形を呈するがやや不整形であり、規模は一辺が４ｍ前後を測り、主軸は南西方向をとる。住居址に付随する遺構は確認されておらず、遺構の帰属年代を判別し得る遺物の出土は確認されておらず構築時期は不明である。

土壙

第１号土壙

本址は、調査区やや北西よりに第13号住居址に隣接する場所から検出された。平面形はほぼ円形を呈し、規模は直径１m程度で、深さは確認面から24cmが残存している。底面は平坦で、壁は急激に立ち上がる。遺構の帰属年代については不明である。

第２号土壙

本址は、調査区北壁付近、やや西側よりから検出された。平面形は隅丸方形を呈し、規模は長辺が60cm、短辺は40cmを測り、深さは確認面から20cmが残存している。底面は概ね平坦で、壁も急激に立ち上がる。遺構の帰属年代については不明である。

第３号土壙

本址は、調査区北西隅から、第10号住居址と重複して検出されたが、その新旧関係は不明である。平面形はほぼ円形を呈し、規模は直径１m、深さは確認面から26cmが残存している。底面は平坦で、壁はやや急に立ち上がる。遺構の帰属年代については不明である。

第４号土壙

本址は、調査区北西より、第９号住居址に隣接する位置から検出された。平面形はほぼ円形を呈し、規模は直径80cm、深さは確認面から30cmが残存している。底面はわずかに丸く掘り窪まり、壁は急激に立ち上がる。遺構の帰属年代については不明である。

第５号土壙

本址は、調査区北西隅、第10号住居址に隣接するところから検出された。平面形はほぼ円形を呈し、規模は直径90cm、深さは確認面から10cmが残存している。底面は概ね平坦であるが、遺存状態が悪いため、壁の断面形態については不明である。遺構の帰属年代については不明である。

第６ａ・ｂ号土壙

本址は、二つの土壙が切り合ったものであり、調査区北西隅、第10号住居址と重複するが新旧関係については不明である。平面形はそれぞれが概ね円形を呈し、規模は第６ａ号土壙は直径80cm、第６ｂ号土壙も直径80cmを測る。深さはそれぞれ共に確認面から50cm程度が残存している。底面は両者ともに丸く掘り窪まり、壁は急激に立ち上がる。第６ａ号土壙の上層からは、高坏が一点出土している。

第７号土壙

本址は、調査区北西よりから、第13号住居址に隣接して検出されたものである。平面形は小判形を呈し、規模は長径が214cm、短径が114cmを測る。また深さは確認面から80cmが残存している。底面は不整形に掘り窪まり、壁はやや急に立ち上がる。なお、遺構の帰属年代については不明である。

第８ａ・ｂ号土壙

本址は、二つの土壙が重複関係にあり、調査区北西寄りから、第13号住居址に隣接して検出されたものである。第８ａ号土壙は不整形な隅丸方形を呈し、長辺が108㎝、短辺が76㎝を測り、深さは確認面から20㎝が残存している。底面は平坦で、遺存状態が悪いため、壁の断面形態については不明である。第８ｂ号土壙の平面形はほぼ円形を呈し、規模は直径50㎝を測り、深さは確認面から12㎝が残存している。底面は平坦であり、遺構の遺存状態が悪いため、壁の断面形態は不明である。また、両者の土壙の重複箇所にピットが存在し、その新旧関係は不明である。なお遺構の帰属年代は不明である。

第９ａ・ｂ号土壙

本址は、二つの土壙が重複関係にあり、第９a号土壙が第９b号土壙を切っていて調査区北壁付近西よりから検出されている。二つの土壙は共に円形を呈する平面形態を呈し、規模は第９ａ号土壙が直径65㎝を測り、深さは確認面から42㎝、第９ｂ号土壙が直径80㎝、深さ23㎝が残存している。二つの土壙は共に、底面が平坦をなし、壁の立ち上がりが急激である。なお覆土中からは、平安時代に比定されるロクロ土師器皿が一点出土している。

第10号土壙

本址は、調査区北東寄り、第14号住居址に隣接して検出された。平面形は、隅丸方形を呈し、規模は長辺が110㎝、短辺が94㎝を測り、深さは、最大で確認面から40㎝が残存している。底面は段差が付いており、壁は急激に立ち上がる。また、遺構の帰属年代については不明である。

第11号土壙

本址は、調査区北東寄りに検出され、第14号住居址と重複し、これを切っている。平面形は楕円形を呈し、規模は長辺124㎝、短辺110㎝を測り、深さは、確認面から38㎝が残存している。底面は平坦であり、壁はやや急に立ち上がる。遺構の帰属年代については不明である。

第12号土壙

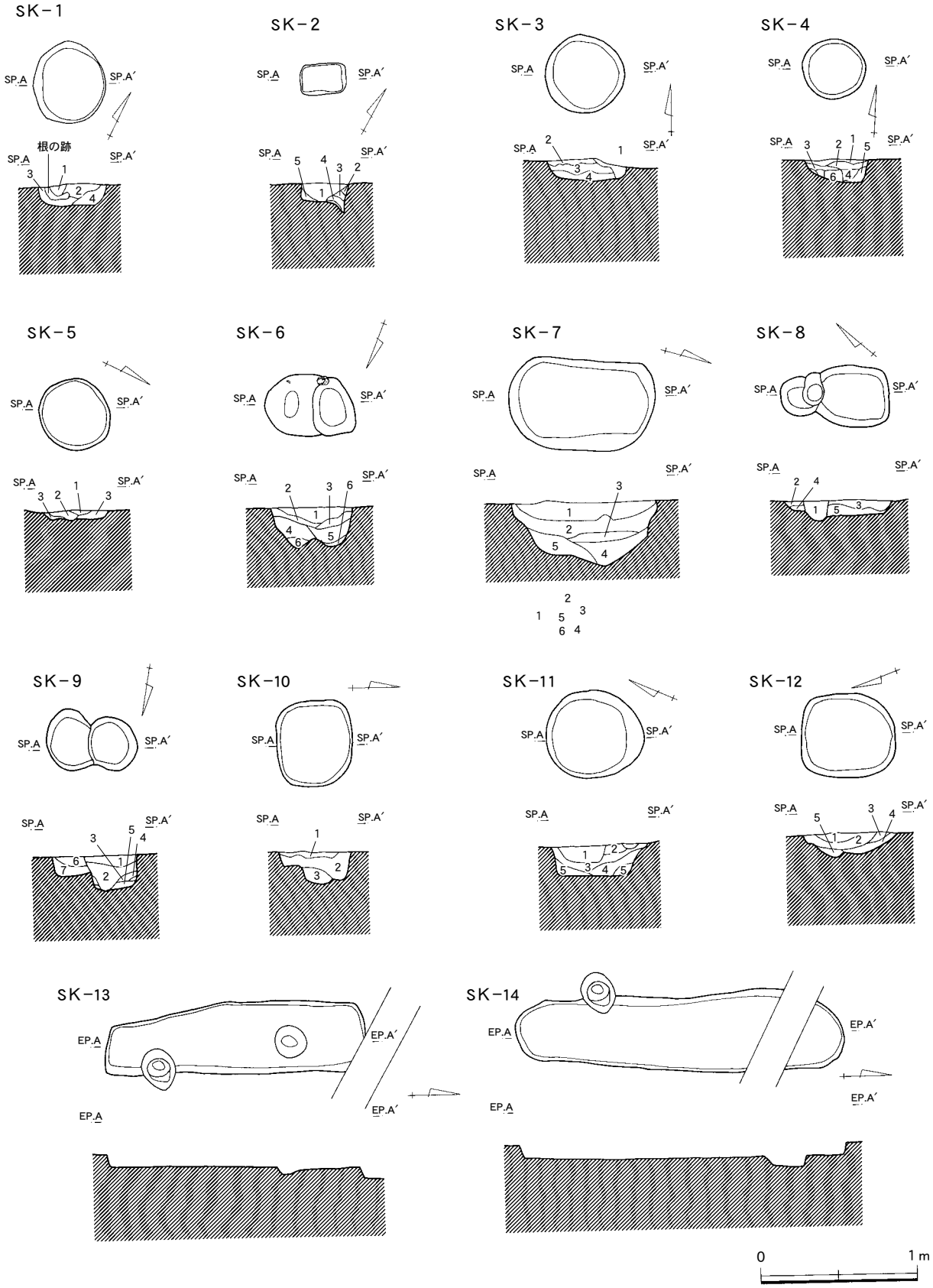
本址は、調査区北東より、第14号住居址に隣接するところから検出された。平面形は歪な方形を呈し、規模は長径120㎝、短径106㎝を測り、深さは確認面から28㎝が残存している。底面はやや丸く掘り窪まるが、遺存状態が悪いため、壁の断面形態は不明である。また、遺構の帰属年代は不明である。

第13号土壙

本址は、調査区南東よりから検出され、第17号住居址と重複関係にありこれを切っている。平面形は隅丸方形を呈し、規模は長径が330㎝、短径が90㎝を測る。深さは確認面から20㎝が残存している。底面は平坦で壁はやや急に立ち上がる。遺構の帰属年代は不明である。

第14号土壙

本址は、調査区南東よりから検出され、第17号住居址と重複関係にありこれを切っている。平面形は隅丸方形を呈し、規模は長径が420㎝、短径が100㎝を測る。深さは確認面から20㎝が残存している。底面は平坦で壁はやや急に立ち上がる。遺構の帰属年代は不明である。



第29図　土壙（ＳＫ１～ＳＫ14）

第１号土壙土層説明

第１層　明褐色土　　φ２㎜程度の焼土粒子を少量含む。しまりは強く、粘性は弱い。

第２層　褐 色 土　　φ５～10㎜程度の焼土粒子を少量含む。しまりは強く、粘性は弱い。

第３層　暗褐色土　　φ１㎜程度の焼土粒子・φ２～５㎝程度のロームブロックを少量含む。しまり・粘性ともに強い。

第４層　黒褐色土　　φ２～６㎝程度のロームブロックを均一に、φ１～３㎜程度の焼土粒子を少量含む。しまり・粘性ともに強い。

第５号土壙土層説明

第１層　暗茶褐色土　ローム粒子を多量に含む。しまり・粘性ともに強い。

第２層　明茶褐色土　ローム粒子を微量含む。しまりはやや強く、粘性は弱い。

第３層　暗茶褐色土　焼土粒子・φ１㎝ほどの小礫を微量含む。しまりはやや強く、粘性は弱い。

第６号土壙土層説明

第１層　暗茶褐色土　φ１㎜程の白色粒子を多量に含む。しまり・粘性ともに強い。

第２層　暗茶褐色土　一層に類似するが白色粒子を含まない。しまり・粘性ともに強い。

第３層　暗茶褐色土　ごく微量の焼土粒子を含む。しまり・粘性ともに強い。

第４層　暗茶褐色土　炭化物・焼土粒子を多量に含む。しまり・粘性ともに強い。

第５層　暗茶褐色土　焼土粒子・炭化物粒子を少量含む。しまり・粘性ともに強い。

第６層　明茶褐色土　しまり・粘性ともに強い。

第７号土壙土層説明

第１層　暗灰褐色土　φ１～３㎜程度の白色粒子を多量に含む。しまりは、やや強く、粘性はやや弱い。

第２層　明灰褐色土　φ１～３㎜程度のロームブロック・白色粒子を多量に含む。しまりはやや強く、粘性は弱い。

第３層　暗茶褐色土　φ５～10㎜程度のロームブロックを少量、15㎜程度の炭化物を微量含む。しまり・粘性ともにやや強い。

第４層　暗茶褐色土　φ１㎝程度のロームブロックを少量含む。しまりはやや弱く、粘性は強い。

第５層　明茶褐色土　φ１～２㎝程度のロームブロックを少量、φ５㎝程度のロームブロ　ックを微量含む。しまりは弱く、粘性は強い。

第８号土壙土層説明

第１層　暗茶褐色土　ローム粒子を少量、焼土粒子・φ６～８㎜の小礫を微量含む。しまり・粘性ともに強い。

第２層　明茶褐色土　白色粒子を微量含む。しまりは強く、粘性は弱い。

第３層　暗茶褐色土　焼土粒子・白色粒子・φ１～２㎜の小礫を微量含む。しまり・粘性ともに強い。

第４層　明茶褐色土　白色粒子をごく微量含む。しまり・粘性ともに強い。

第５層　暗茶褐色土　焼土粒子・φ１㎝程度の小礫を微量含む。しまり・粘性ともに強い。

第９号土壙土層説明

第１層　明灰褐色土　φ５㎜程度の炭化物・焼土粒子を少量含む。しまりは強く、粘性は弱い。

第２層　暗茶褐色土　φ１～２㎝程度の炭化物とφ２㎝以下の小礫を多量に含む。しまりは弱く、粘性は強い。

第３層　暗茶褐色土　φ１㎝以下の炭化物をごく少量含む。しまりは弱く、粘性は強い。第４層　明茶褐色土　φ１～２㎝のロームブロックを多量に含む。しまりは弱く、粘性は強い。

第５層　暗茶褐色土　φ５㎜ほどのロームブロックを少量含む。しまり・粘性ともに強い。

第６層　暗茶褐色土　φ３～５㎜程度の炭化物・焼土粒子を少量含む。しまりは強く、粘性は弱い。

第７層　暗茶褐色土　φ３～５㎝のロームブロックを少量含む。しまり・粘性ともにやや強い。

第10号土壙土層説明

第１層　明灰褐色土　浅間山系Ａ軽石を微量含む。しまりは強く、粘性は弱い。

第２層　暗黒褐色土　φ５㎝以下の小礫を微量含む。しまりはやや強く、粘性はやや弱い。

第３層　暗茶褐色土　ロームブロック・ローム粒子、φ１０㎝以下の礫を少量含む。しまり・粘性ともにやや弱い。

第11号土壙土層説明

第１層　明茶褐色土　φ８㎝以下の礫を少量、浅間山系Ａ軽石を微量含む。しまり・粘性ともに強い。

第２層　明茶褐色土　φ３㎝以下の小礫を少量含む。しまり・粘性ともに強い。

第３層　明茶褐色土　ローム粒子・φ１～２㎝の小礫を少量含む。しまりはやや弱く、粘性は強い。

第４層　明茶褐色土　ロームブロック・ローム粒子・φ３㎝以下の小礫を少量含む。しまりはやや強く、粘性は弱い。

第５層　明茶褐色土　ロームブロック・φ２～４㎝の礫を少量含む。しまりはやや強く、粘性は弱い。

第12号土壙土層説明

第１層　明灰褐色土　白色粒子を微量に含み、φ１～３㎝程度の小礫を少量含む。しまり・粘性ともにやや強い。

第２層　暗灰褐色土　白色粒子をごく微量、φ４～６㎜の小礫を含む。しまり・粘性ともにやや強い。

第３層　暗灰褐色土　φ３～５㎝の礫を含む。しまり・粘性ともにやや強い。

第４層　明茶褐色土　ローム粒子を多量に、φ２～３㎝の小礫を少量、白色粒子を極微量含む。しまり・粘性ともに強い。

第５層　暗灰褐色土　ロームブロック・φ５㎜程度の小礫を少量含む。しまり・粘性ともにやや強い。

第15号土壙

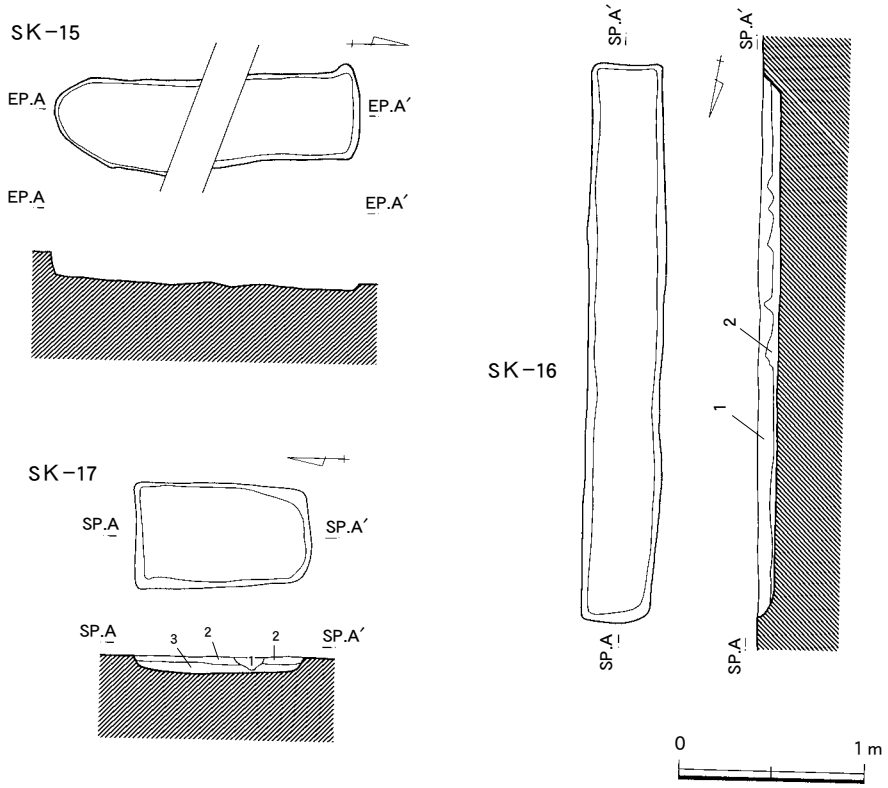
本址は、調査区南東よりから検出され、第17号住居址と重複関係にありこれを切っている。平面形は隅丸方形を呈し、規模は長径が330cm、短径が90cmを測る。深さは確認面から30cmが残存している。底面は平坦で壁はやや急に立ち上がる。遺構の帰属年代は不明である。

第16号土壙

本址は、調査区南東隅付近から検出されている。平面形は長い隅丸方形を呈し、規模は長辺が590cm、短辺が80cmを測る。深さは確認面から10cmが残存している。底面は平坦で、壁はやや急に立ち上がっている。遺構の帰属年代は不明である。

第17号土壙

本址は、調査区南東隅付近から検出されている。平面形は隅丸方形を呈し、規模は長辺が186cm、短辺が108cmを測る。深さは確認面から16cmが残存している。底面は平坦で、壁はやや急に立ち上がっている。遺構の帰属年代は不明である。



第30図　土壙（ＳＫ15～ＳＫ17）

第16号土壙土層説明

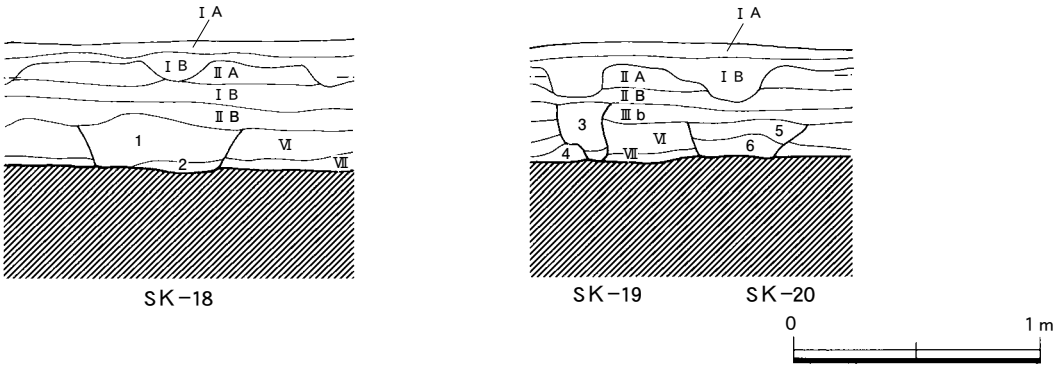
第１層　明茶褐色土　ローム粒子・φ５㎜程度の小礫を少量含む。しまりは強く、粘性は弱い。
第２層　黄 褐 色 土　茶褐色土を混入する。しまり・粘性ともにやや弱い。

第17号土壙土層説明

第１層　明茶褐色土　白色粒子・φ２～３㎝の小礫を微量含む。しまりは強く、粘性は弱い。
第２層　明茶褐色土　ローム粒子・φ５㎜程度の小礫を少量含む。しまりは強く、粘性は弱い。
第３層　黄 褐 色 土　茶褐色土を混入する。しまり・粘性ともにやや弱い。

第18・19・20号土壙

これらの土壙は何れも調査区西壁上第４号住居址付近に確認された遺構である。このため、遺構の平面形態や規模については不明であり、土層断面のみの所見を得た。これらの土壙の位置関係は、第18号土壙は、第４号住居址から北へ1.9m、第19号土壙は、第４号住居址から北へ約8.8m、第20号土壙は、第４号住居址から北へ9.8mの場所にそれぞれ位置している。また、具体的な遺構の帰属年代を示す遺物の出土に恵まれなかったが、第18号土壙は基本層第Ⅵ層、第19号土壙は基本層第Ⅲｂ層、第20号土壙は基本層第Ⅵ層から彫り込まれている。



第31図　土壙（ＳＫ18～ＳＫ20）土層断面

第18号土壙土層説明

第１層　暗黄褐色土　φ10㎜程度の焼土ブロックを微量含む。しまりは強く粘性は中程度。

第２層　黄茶褐色土　１層と地山の混合土。しまりは中程度で粘性はやや強い。

第19号土壙土層説明

第３層　暗茶褐色土　白色テフラを多量に、φ５㎜以下の焼土ブロックを少量含む。しまりは強く、粘性は弱い。

第４層　茶 褐 色 土　φ10㎜以下の焼土ブロック・φ15㎜以下の炭化物を含む。しまり・粘性共に中程度。

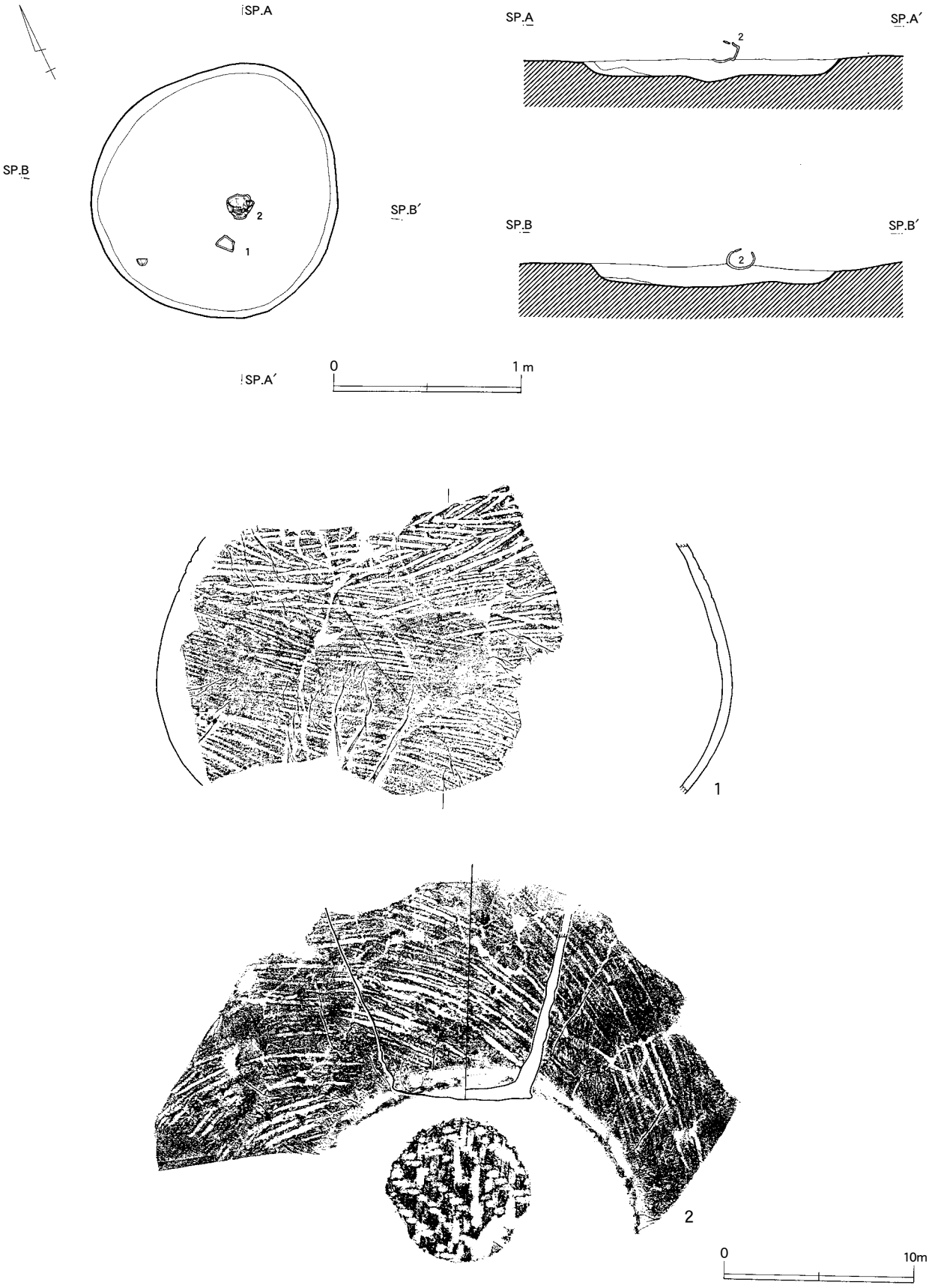
第20号土壙土層説明

第５層　茶 褐 色 土　φ10㎜以下の小礫が散在し、白色テフラを少量含む。しまりは強く、粘性は弱い。

第６層　暗茶褐色土　φ５㎜以下の焼土ブロックとφ３㎜以下の炭化物を中量、ローム土を少量含む。しまりは強く、粘性は中程度。

第21号土壙

本址は、調査区中央部西寄り第７号住居址の東南角から約30㎝程離れた場所に位置し、平面形状は歪な楕円形を呈しており規模は長辺が139㎝、短辺が117㎝を測る。深さは確認面から最深部で15㎝が残存しており、底面は浅いレンズ状で少々凹凸が見られ壁は緩やかに立ち上がる。本址覆土内からは初期弥生式の底部や比較的大きな土器破片が検出されており、遺構の帰属年代は検出された遺物から弥生時代中期初頭頃と考えることができる。本址は土壙としては比較的大形で、調査当初は再葬墓ではないかと推定して調査を行ったが再葬骨容器としての土器の出土状態を示しておらず、また覆土中から埋葬に直接関連する遺物が検出されていないところから土壙として捉えたものである。　（尾内俊彦）



第32図　土壙（ＳＫ21）および出土土器

３．出土遺物の概要

児玉清水遺跡Ａ地点の調査における住居址出土の遺物には、古墳時代前期・中期・後期及び平安時代のものがあり、古墳時代中期・後期にその主体がある。時期的には断続しており遺物の変遷も連綿と辿れるものではない。また、各時代、それぞれ欠落する器種もあり、普遍的な器種組成を示していない。このため本項では、各時代ごと遺物の特徴的な事項にふれながらその様相を説明し、周辺遺跡で提示されている編年案との若干の対応をはかるに留めておきたい。

ａ．古墳時代前期の遺物

所謂五領式に比定される時期である。第15号住居址では出土している小形坩［第46図４］の形態的特徴・器面調整上の特徴から概ねこの時期に該当するものであると思われる。所謂五領式でも新しい時期にあたると思われるが、小形坩のほか掲載しえた遺物は、鉢・高坏のみであり、器種組成の把握も難しく詳細は不明である。周辺遺跡では概ね後張遺跡Ⅱ期などに対応するであろうか。

ｂ．古墳時代中期の遺物

所謂和泉式に比定される時期であり、第６・９・10・11・13号住居址が該当する。この時期の住居址相互には重複関係が認められず、出土遺物からも新旧は明確にしづらい。器種には鉢、小形坩、大形坩、高坏、壺、甕、台付甕、小形甕、小形甑等が認められる。小形坩は前時期に比べて球形の度合が強くなっている。高坏は、有稜の坏部を持ち脚部が中空柱状で屈折脚のもの［第44図３］、中空柱状で屈折脚の脚部だが坏部が異形のもの［第43図12］、脚部が中空柱状だが短脚のもの［第43図13、第44図６・７］、脚部が中実柱状のもの［第42図８］の概ね4つに分類される。この様に高坏はバリエーションに富むが、それぞれが単発で生じた個体差ではなく、系統的に把握しうるものであると思われる。

壺・甕は共に頸部で「く」の字状に強く屈曲し、胴部は中位に最大径を持ち球形を呈する。また該期では、［第39図２、第42図１］のように台付甕も残存することが確認されたが、台上の器形は和泉式球胴甕の形態を呈し、所謂Ｓ字甕の形態的な要素が払拭されている。こうした折衷形ともいえる台付甕はこの時期ではしばしば見受けられるものでも有り、例えば該期に並行すると思われる後張遺跡Ⅲ期第139号住居址などでも事例が見られる。

ｃ．古墳時代後期の遺物

所謂鬼高式に比定され、第２・３・４・16・17号住居址が該当する。またこの遺跡の主要な時期にあたる。該期に相当する住居址相互では重複関係が認められないが、出土遺物の特徴から概ね３時期に細分できる。ここでは主要な器種の特徴や変化の傾向を中心に細別した各時期の様相を概観してゆきたい。

後期第１期

第２・３号住居址の時期が該当する。器種には坏・甕・大形甑等があげられる。遺物の出土量が少なく、該期の一般的な器種組成を示していない。坏は、須恵器坏蓋模倣の定型化した段階にあたり、深い丸底の底部、体部と口縁部の境界に工具をあてることによる段（稜）の創出、長く直立する口縁部と口端部に面を成す形状が特徴的である［第35図６・７、第36図２］。

甕には長胴甕・胴張甕・小形甕がある。長胴甕は頸部が「く」の字に屈曲し、胴部中位に最大径を有するのが特徴である［第34図１・２］。胴張甕としては［第34図４］が挙げられるが、胴部の輪積みを中途で止め、口縁部を積み足したような状態を示しており、一

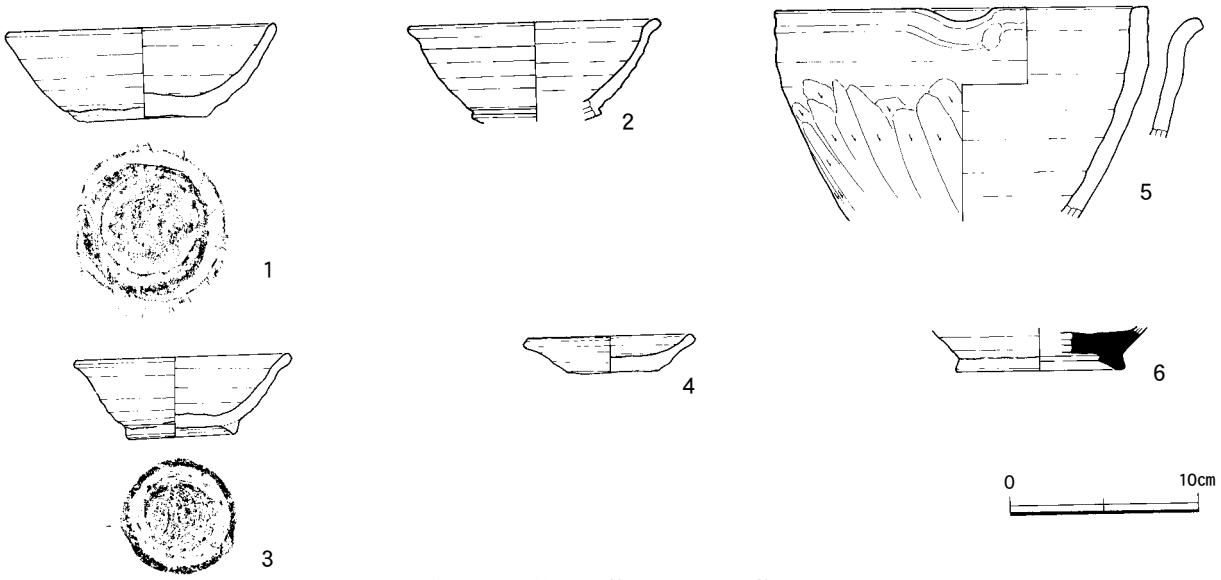
般的な形態を示すものとは思われない。小形甕は長胴甕と同様に頸部に「く」の字状の屈曲を残しており、体部は球形に近い［第35図５、第36図１］。大形甑は須恵器を模倣したもので第２号住で出土している。口縁部は外傾、頸部が緩やかに屈曲し、胴部上位がやや張る形状を呈している。該期は、周辺遺跡では概ね大久保遺跡Ｂ地点第Ⅰ期、後張遺跡Ⅵ期～Ⅶ期に並行すると思われる。

後期第２期　第16・17号住居址の時期に該当する。器種には坏・壺・甕・小形甑・鉢・椀などがある。坏は、前時期から比べて若干の形態的変遷を遂げている。口端部は面取りがされるものの口縁部は外傾・外反傾向にあり、体部が前時期に比して浅めになっている点が新しい要素として指摘できるであろう。壺には［第48図２、第49図３］が挙げられ、口縁部中位に段を有し、頸部で「く」の字に屈曲、胴部中位に最大径を有し球形を呈する。甕には長胴甕、胴張甕などがある。長胴甕は、頸部の屈曲が弱まり口縁部の外反が強くなり、胴部は中位に最大径を有するが、前時期より相対的に胴の張りが緩くなり、より長胴化が進む傾向にある［第47図１・２・３、第49図５］。また、17住［第49図６］の事例の様に器形が下方に向かって僅かに開き下膨れ状を呈するものもある。胴張甕には17住［第48図１］のものが挙げられる。胴部上半が立ち気味で、頸部が緩やかに屈曲し口縁部が外反する形態的特徴は、長胴甕の形態変化の傾向と製作技法上の類似が指摘される。該期は、周辺遺跡では概ね今井川越田遺跡Ⅱ期等に相当するものであると思われる。

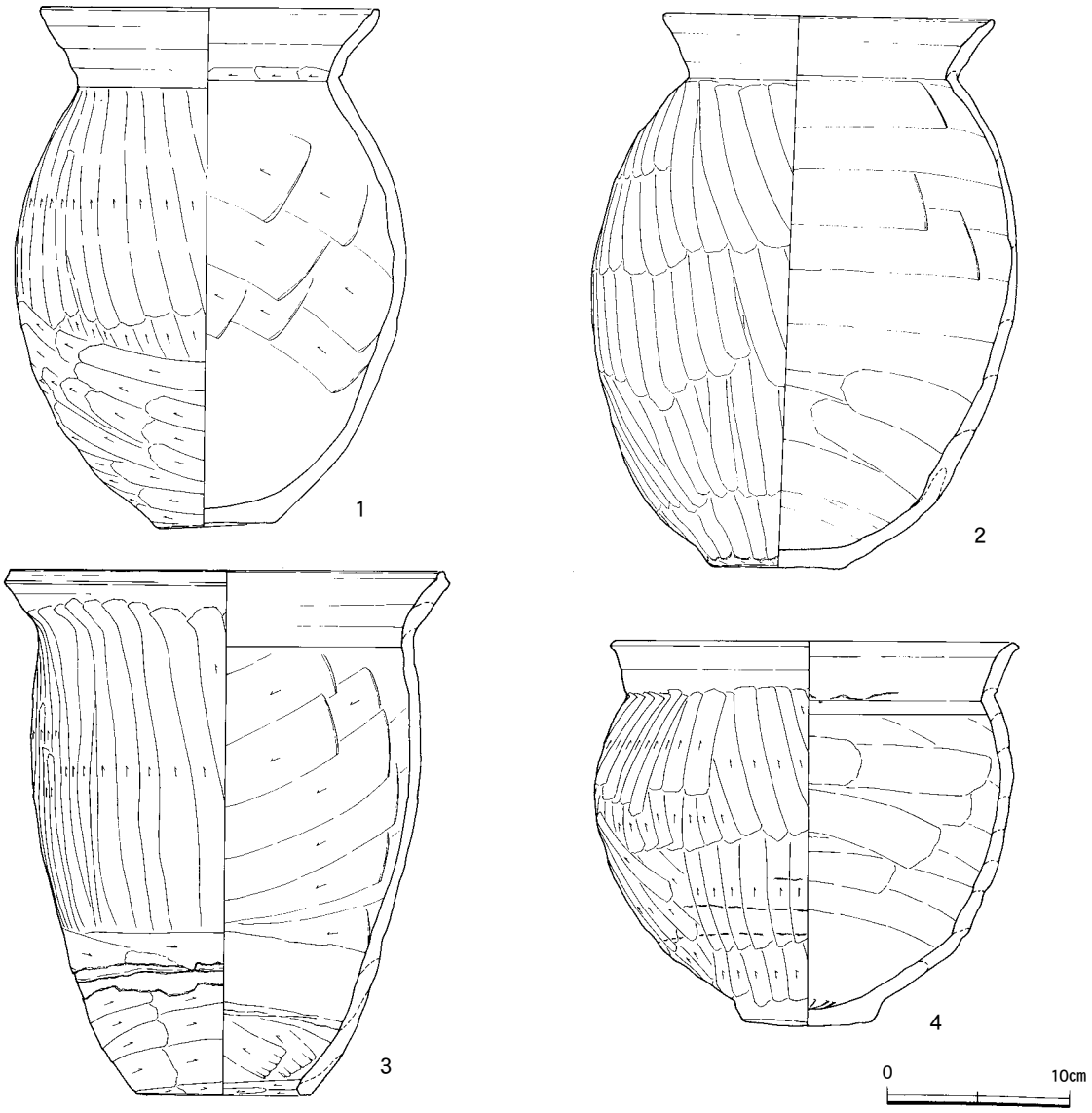
後期第３期　第４号住居址の時期が該当する。器種には坏・長胴甕・大形甑・大形鉢などがある。坏は、器制が緩み形態のバラエティに富むとともに、製作技法も粗雑化する時期にあたる。口縁部が短く外反または外傾し、口縁部と体部の境界の稜が緩くなる点、底部が前時期と比べてより扁平化している点が全体的な変化の傾向として指摘される。第４号住居址内においてもその形態は一様ではなく、個体差が認められる。なお、［第38図14］は所謂有段口縁坏である。長胴甕は、頸部は屈曲を失い口縁部は外反し、胴部が寸胴で、口縁部に最大径有する。これまで一般的であった底部の突出が、ヘラケズリにより失われている。大形甑は第２号住出土のものと同一の系統上にあり、大幅な形態的な変化は認められないが、胴部上半の張り及び頸部の屈曲が失せ、口縁部が外反する点が、新しい要素を示すものであると思われる。該期は、周辺遺跡では坏の口径・長胴甕の形態から今井川越田遺跡Ⅳ～Ⅴ期あたりに対比されると思われる。また、第４号住居址からは須恵器短頸壺、須恵器坏が出土しているが、該期において須恵器は在地的な変容を遂げていると思われ、また、古墳時代後期概ね6世紀にあたる在地窯の実態も不明な点も多くその年代や産地の同定には注意を払いたいところである。

ｄ．平安時代の遺物

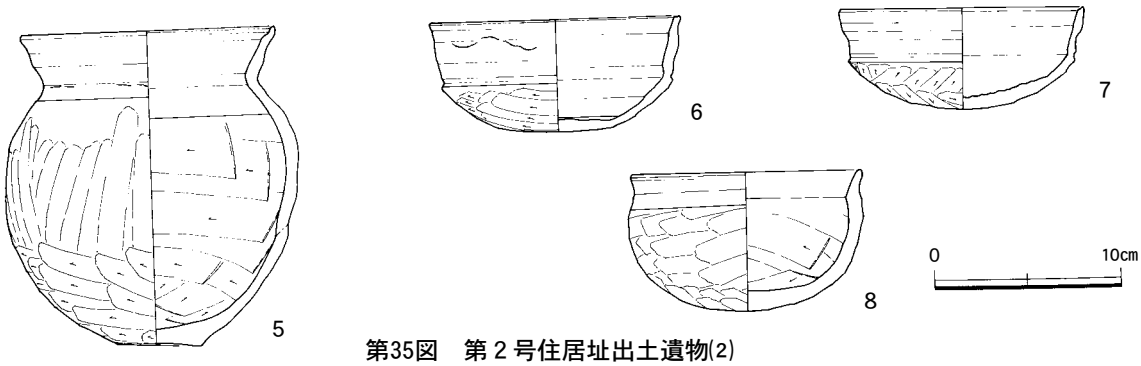
第１号住居址、第７ａ・ｂ号住居址出土の遺物が該当するであろう。器種には坏・高台坏・皿・羽釜などが挙げられ、注ぎ口の創出された鉢、小形の台付小鉢等の特徴的な器種も存在する。第7号住［第41図３・４］は羽釜と分類したが、その形態的特徴及び法量から下半を欠くものの甑である可能性が高い。概ね伝統的な土師器坏・甕が衰退してゆく時期にあたり、須恵器も酸化焔焼成で焼きあがったものが多い。１号住［第33図６］、第７ａ・ｂ号住［第41図７］は灰釉陶器である。出土遺物の様相から、概ね第１号住及び第７ａ・ｂ号住は10世紀中葉以降と思われる。（櫻井和哉）



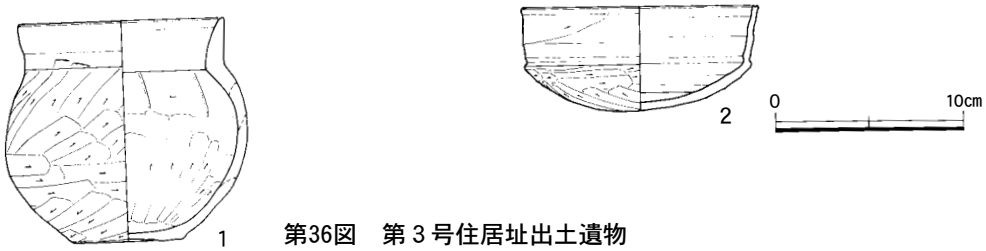
第33図　第１号住居址出土遺物



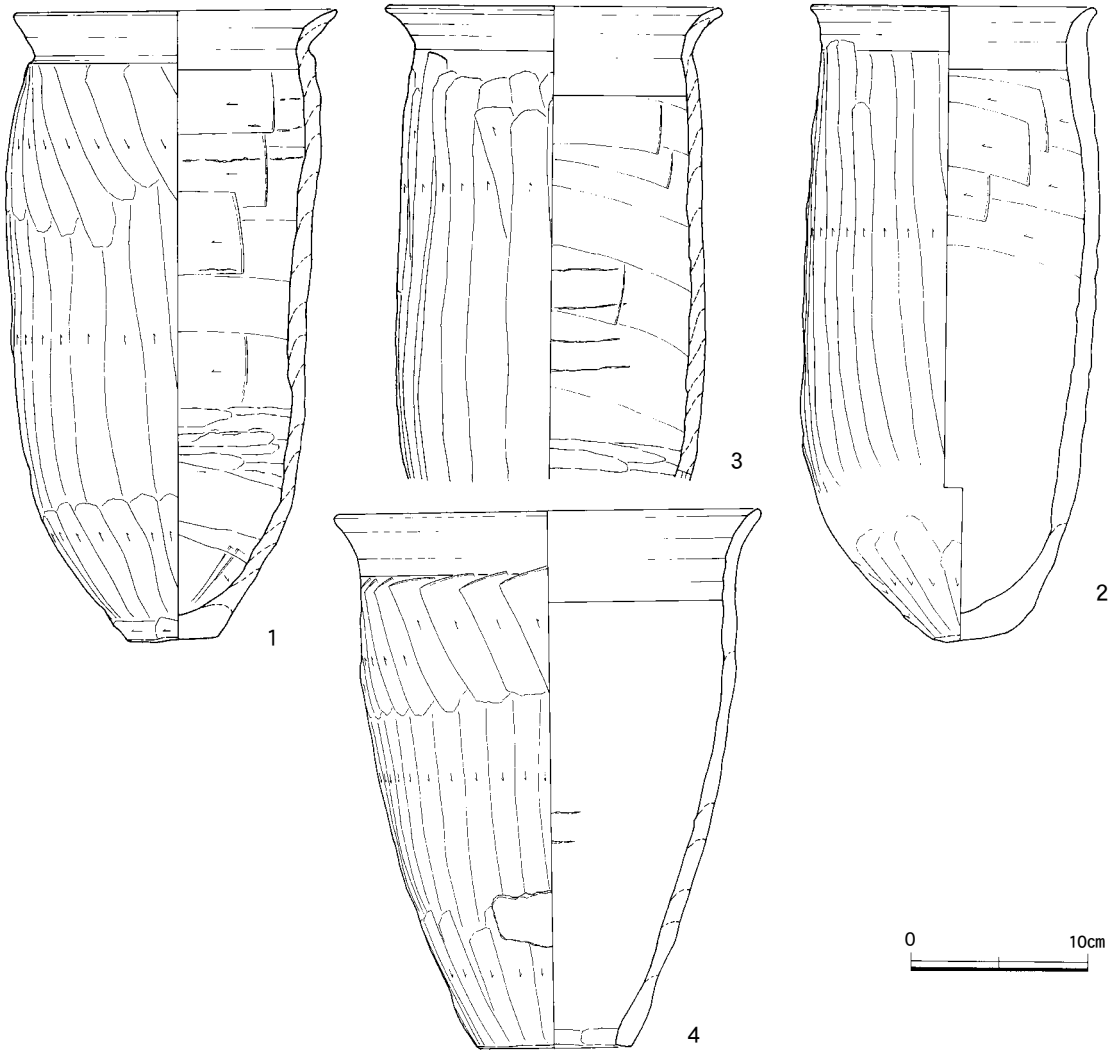
第34図　第２号住居址出土遺物(1)



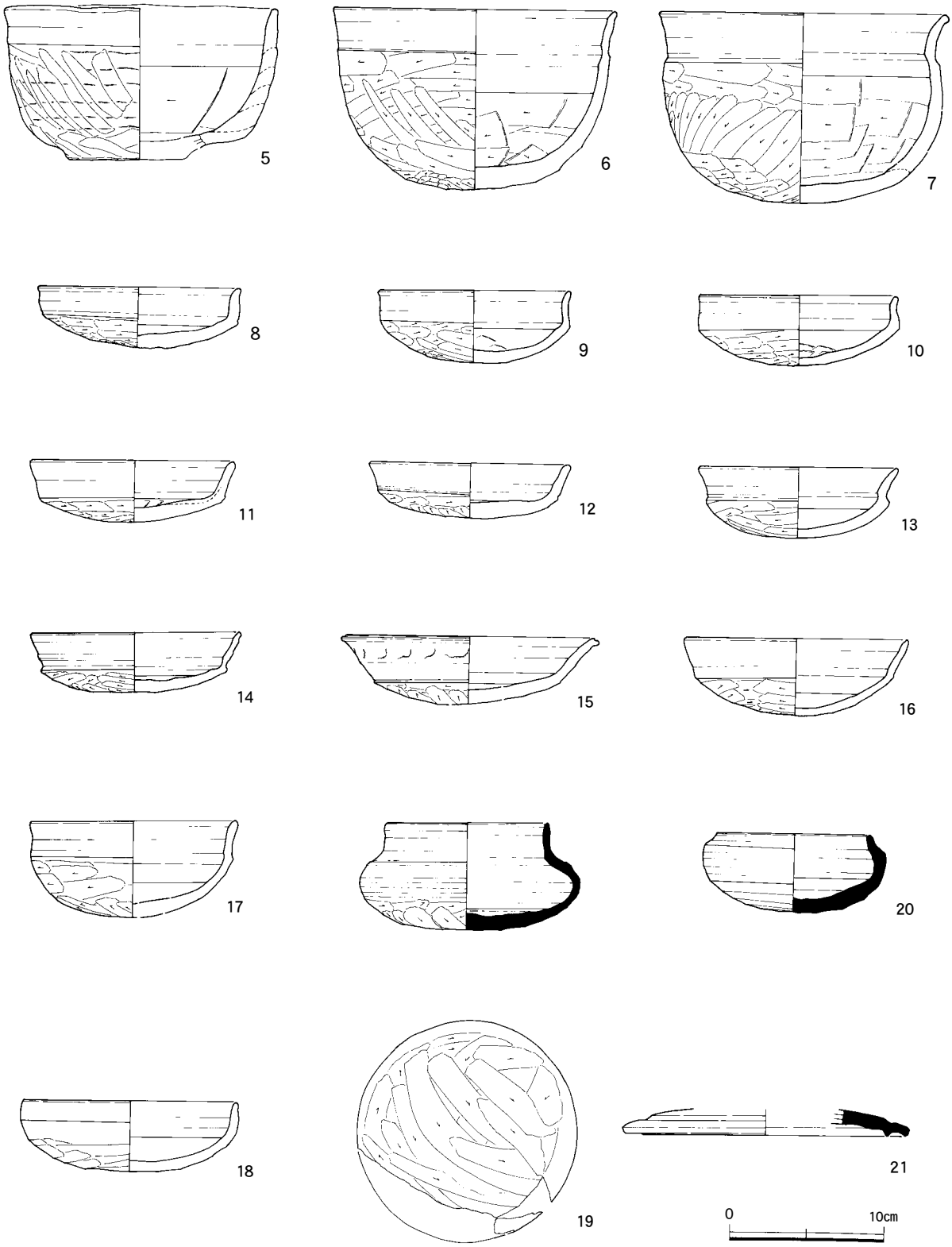
第35図　第２号住居址出土遺物(2)



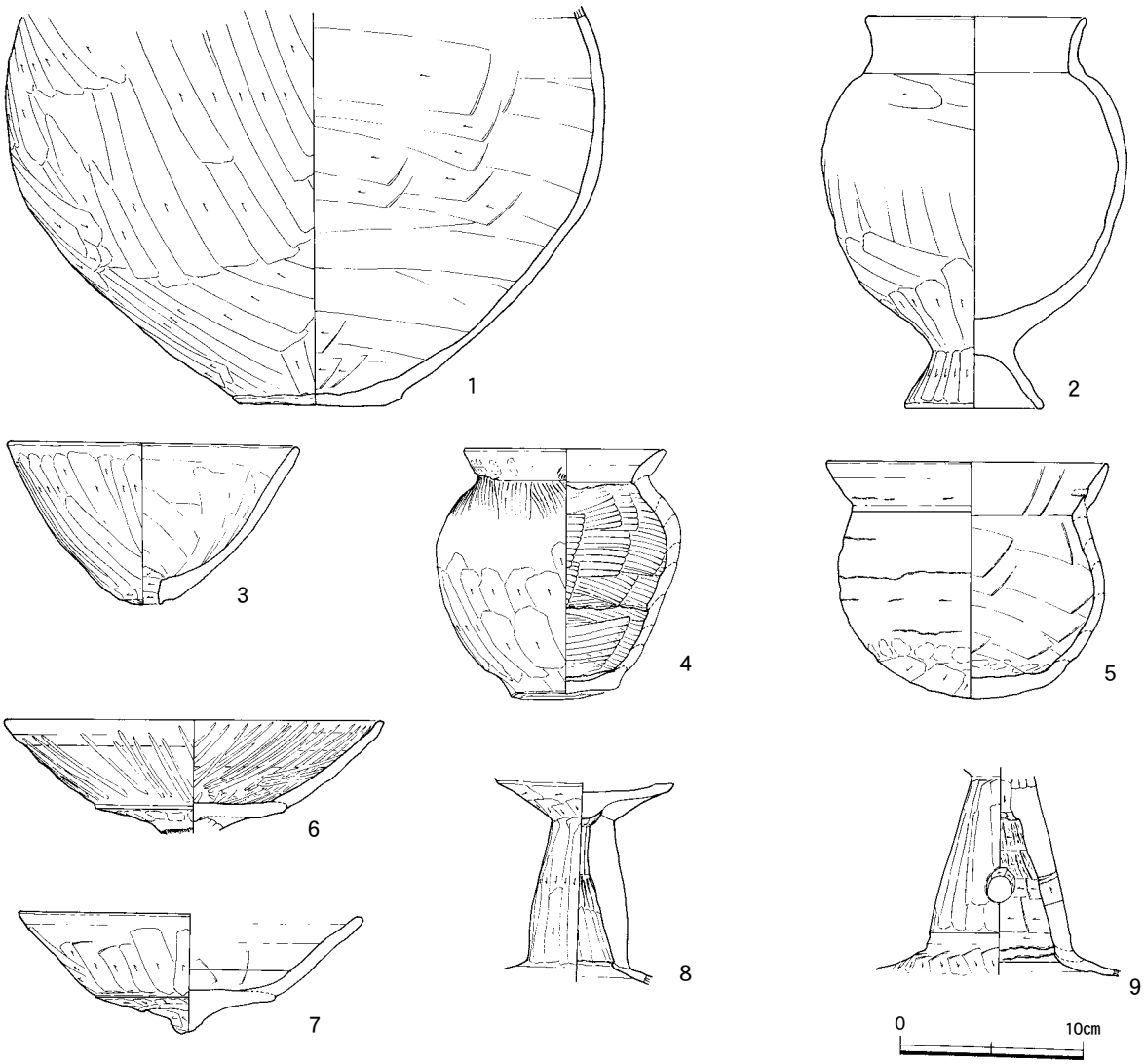
第36図　第３号住居址出土遺物



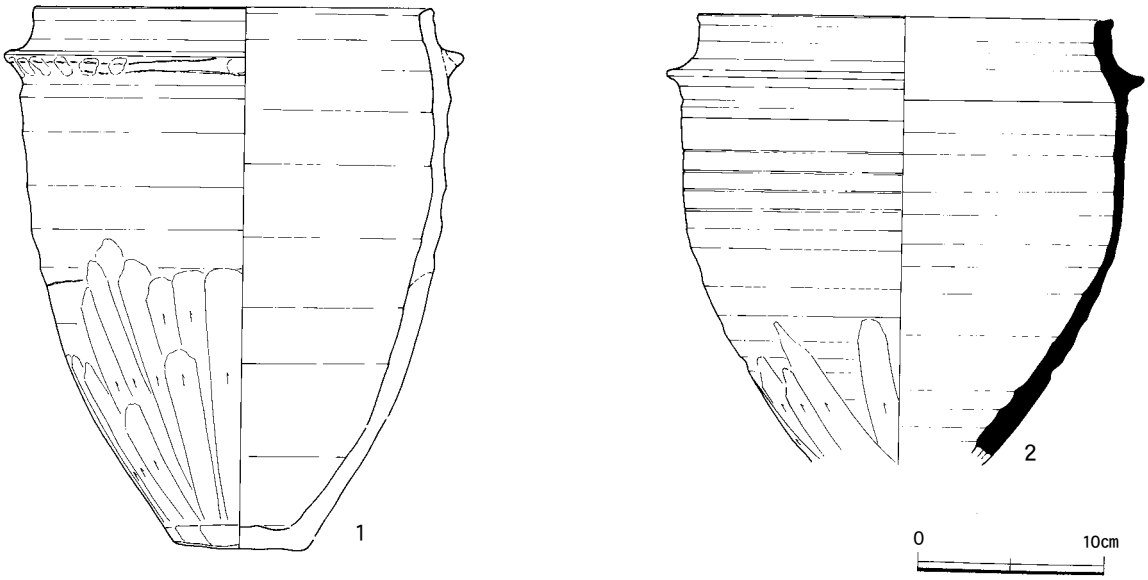
第37図　第４号住居址出土遺物(1)



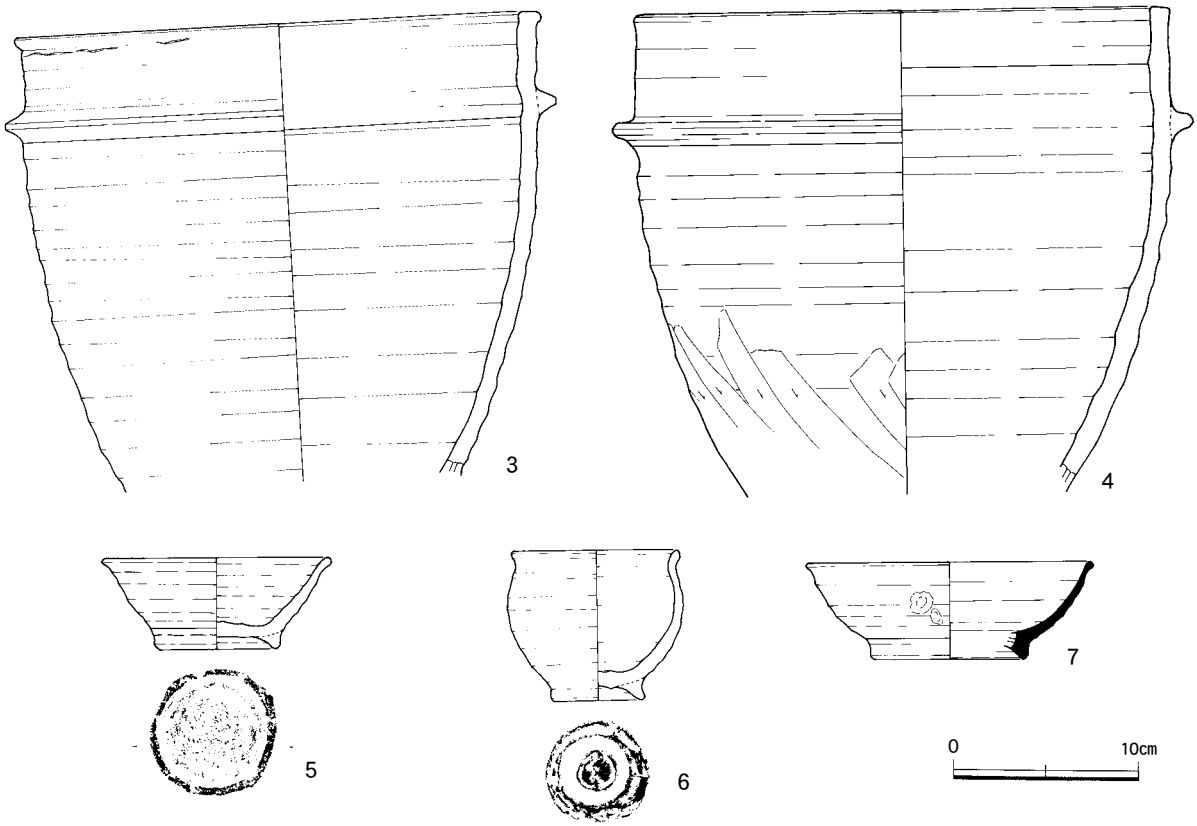
第38図　第４号住居址出土遺物(2)



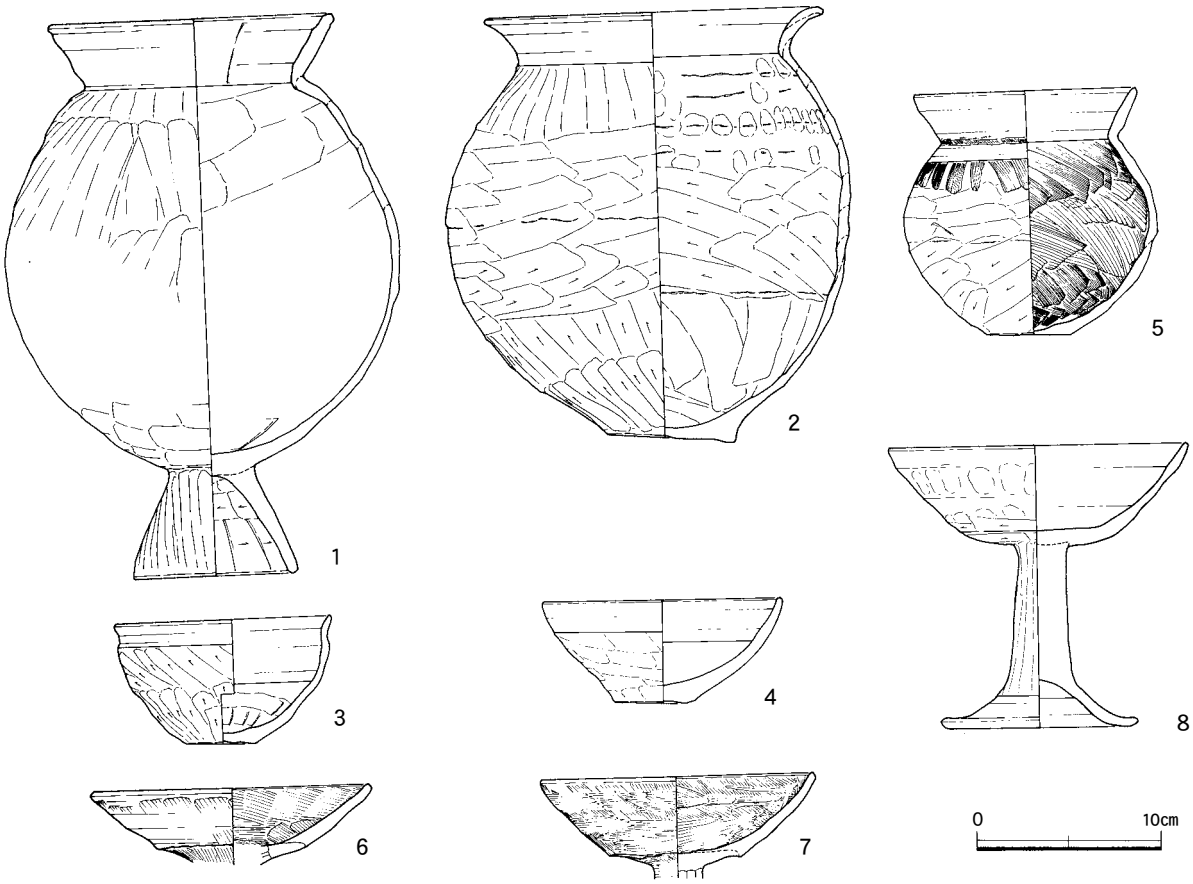
第39図　第６号住居址出土遺物



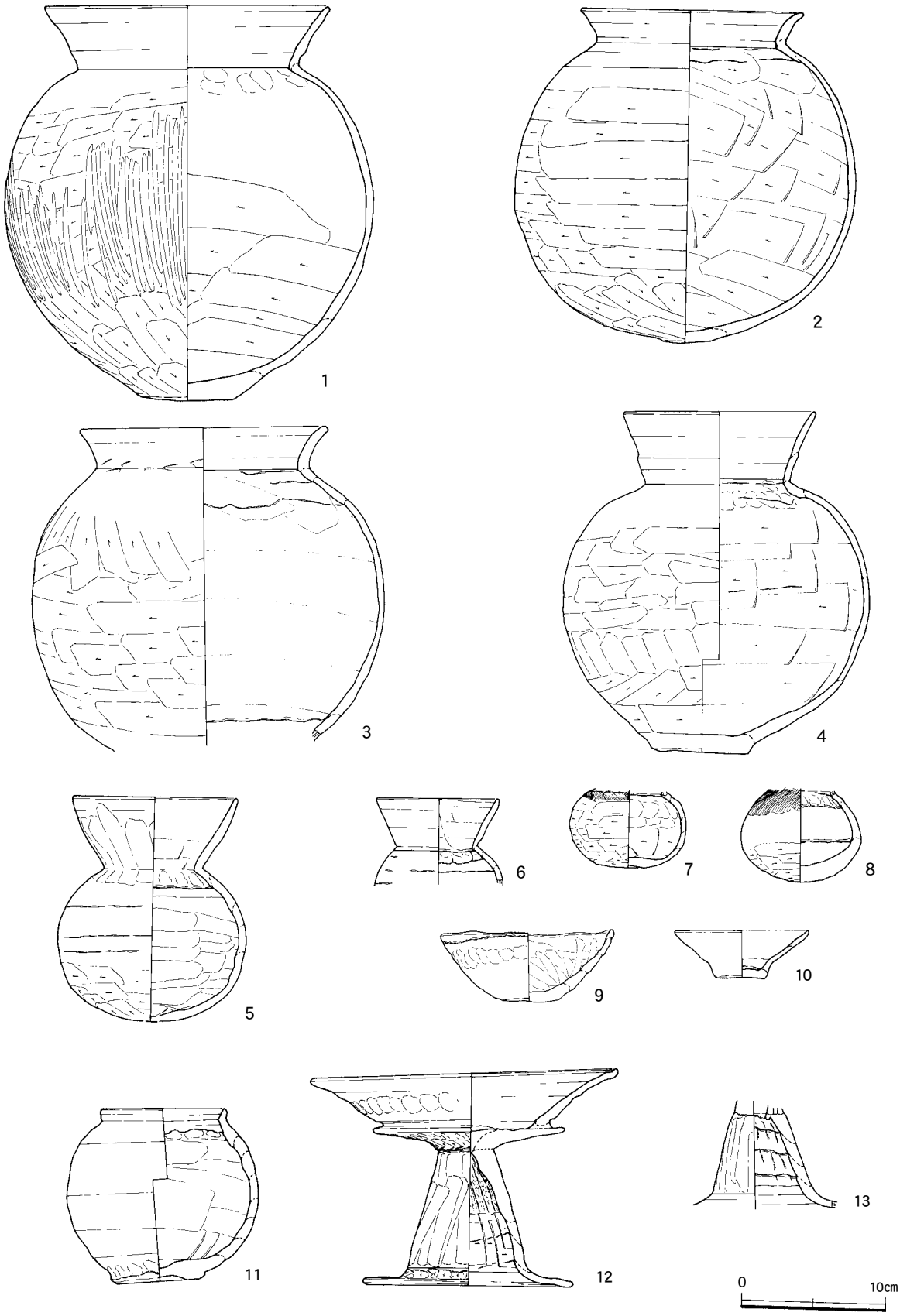
第40図　第７号住居址出土遺物(1)



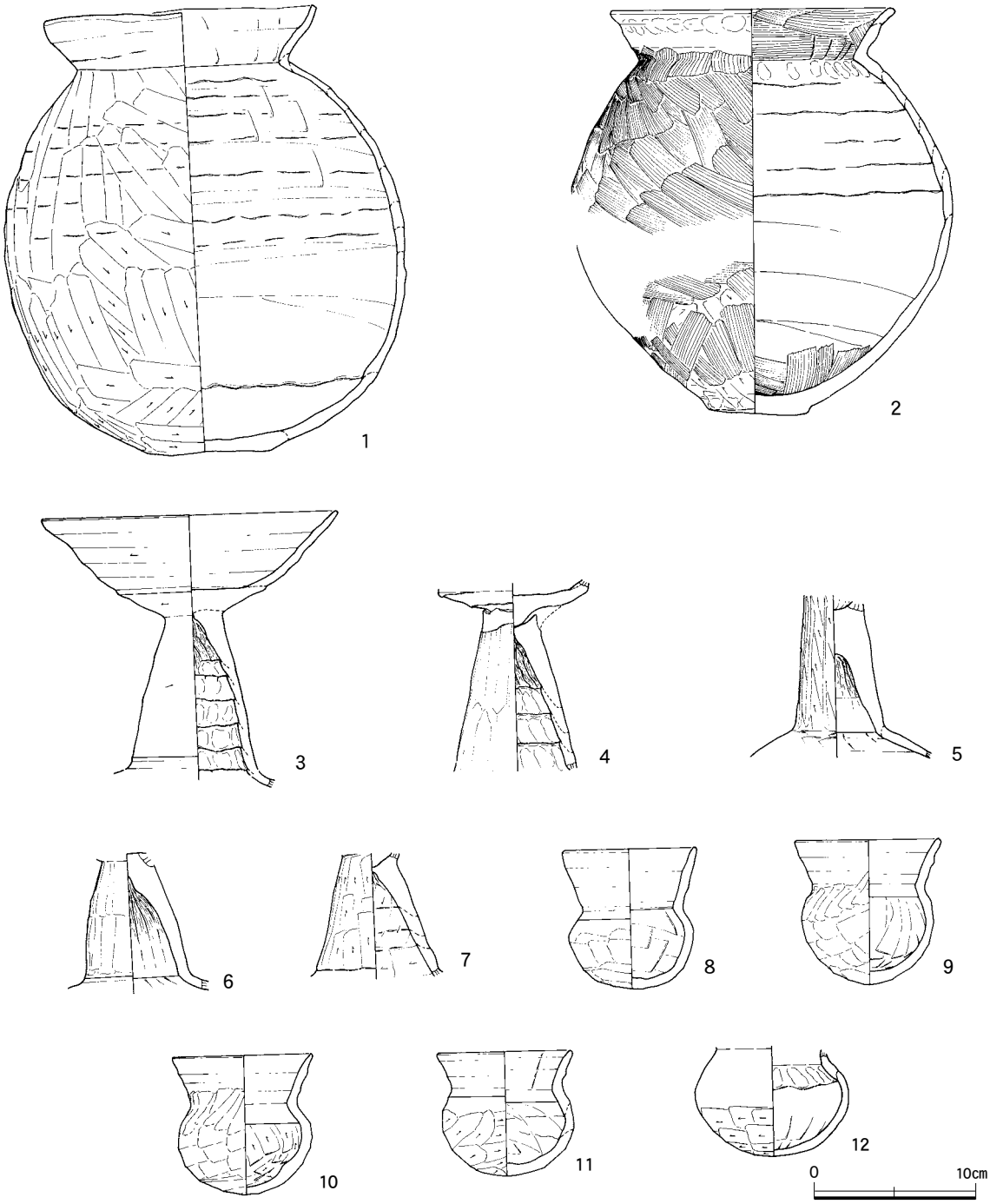
第41図　第７号住居址出土遺物(2)



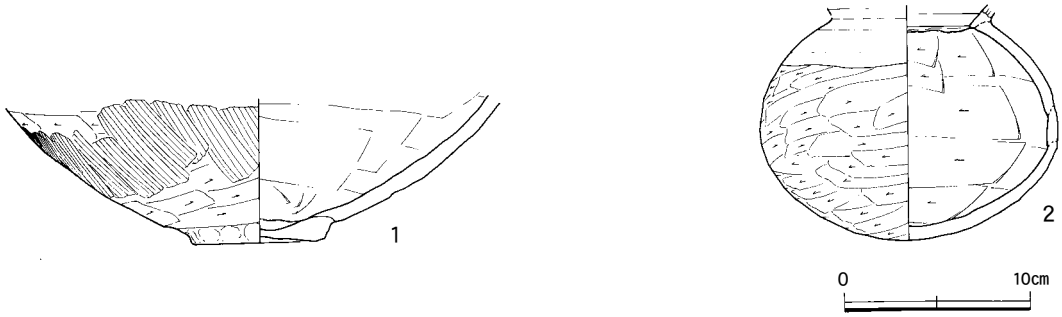
第42図　第９号住居址出土遺物



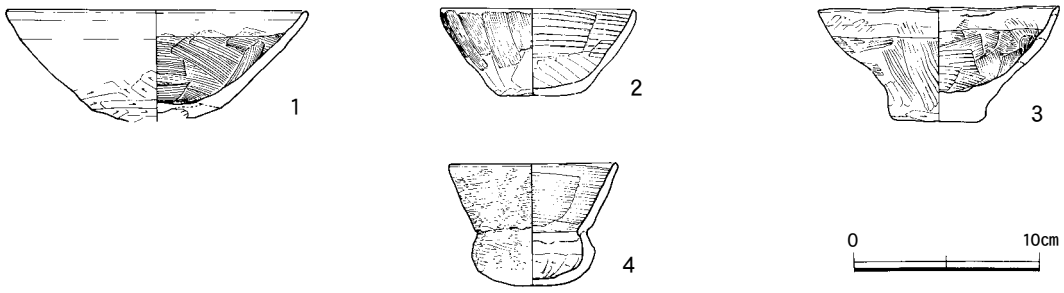
第43図　第10号住居址出土遺物



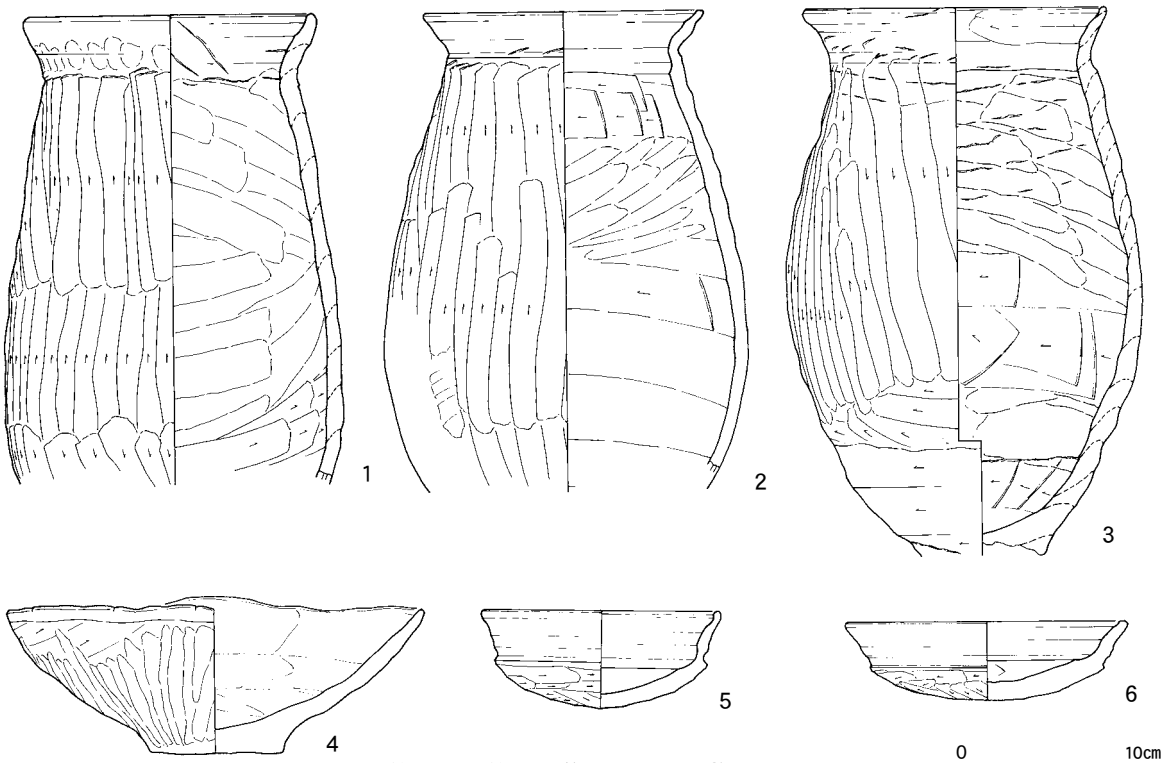
第44図　第11号住居址出土遺物



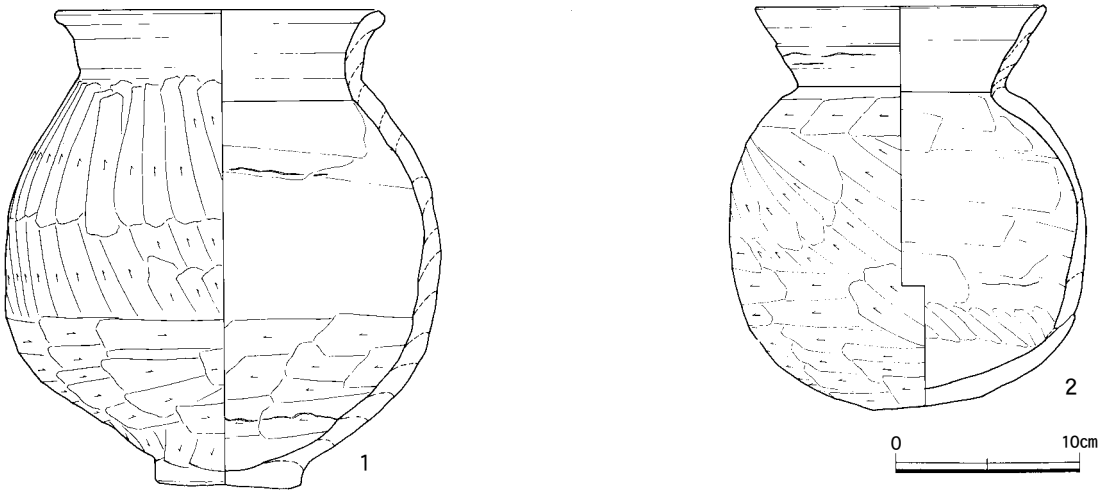
第45図　第13号住居址出土遺物



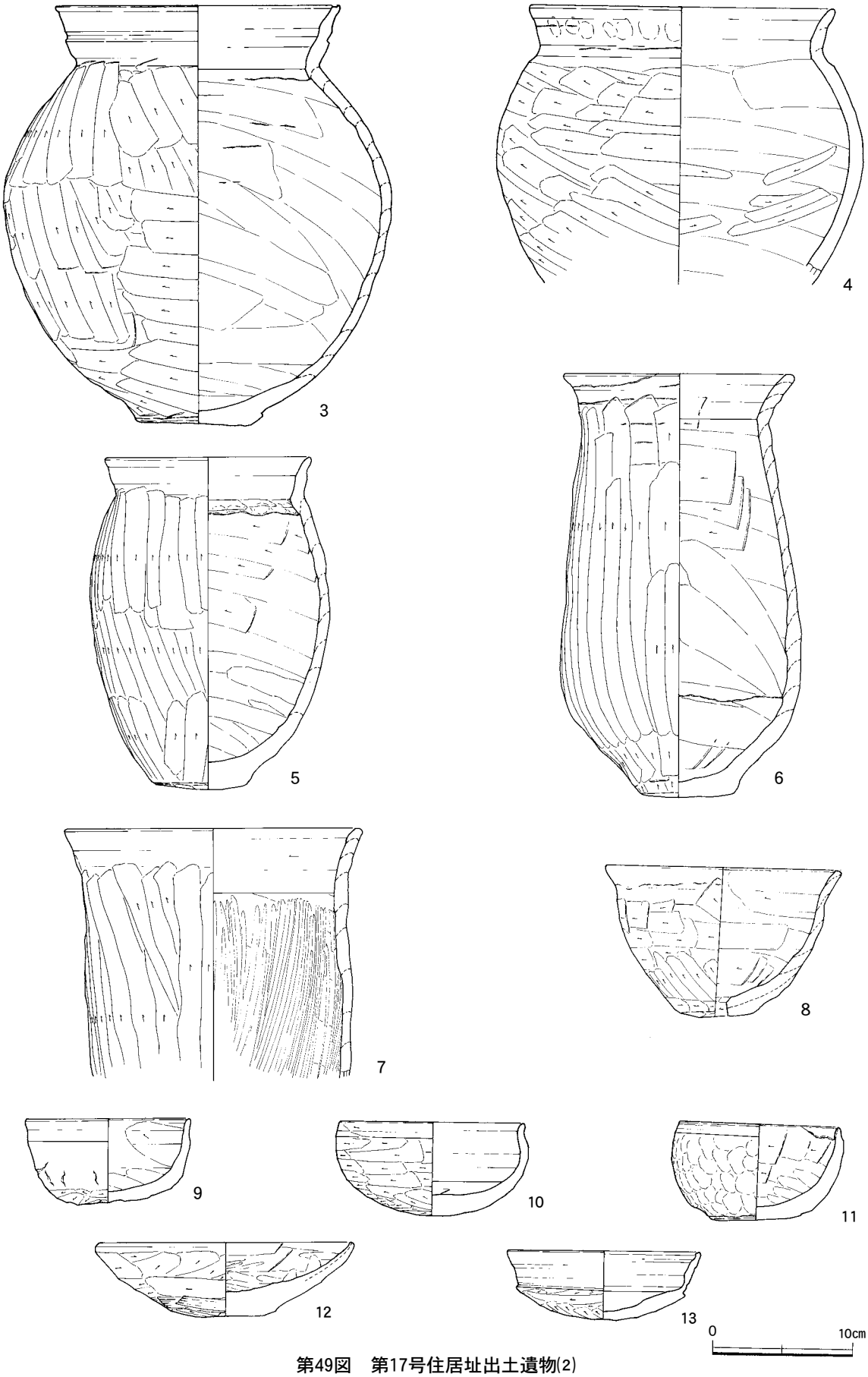
第46図　第15号住居址出土遺物



第47図　第16号住居址出土遺物



第48図　第17号住居址出土遺物(1)



第49図　第17号住居址出土遺物(2)

表－１　第１号住居址遺物観察

No.	器　種	法　量	色　調	焼　成	胎　土	備　考	残存率
1	ロクロ土師器 坏	口径 (13.6) 底径 － 高さ (5.2)	灰褐色	酸化焔 普通	白粒 多量 石英・黒粒 少量		30%
2	ロクロ土師器 高台坏	口径 (14.5) 底径 (6.8) 高さ (4.9)	暗橙褐色	酸化焔 普通	白粒・雲母 中量 黒粒・角閃石 少量 鉄粒 微量	高台部が接着面で剥離している。	80%
3	ロクロ土師器 高台坏	口径 (11.6) 底径 (4.3) 高さ (3.8)	暗橙褐色	酸化焔 普通	黒粒・白粒 少量		80%
4	ロクロ土師器 皿	口径 (9.1) 底径 4.9 高さ 1.8	淡暗褐色	酸化焔 良好	雲母 多量	胎土は非常にきめ細かい。	90%
5	ロクロ土師器 片口鉢	口径 (19.9) 底径 － 高さ (12.3)	淡橙褐色 ～ 暗褐色	酸化焔 普通	鉄粒・白粒 少量	注口は口縁部ヨコナデ後に曲げ成形によって作られている。	40%
6	灰釉陶器	口径 － 底径 (8.9) 高さ (1.7)	灰白色	普通	黒粒 中量 白粒・鉄粒 少量		10%

表－２　第２号住居址遺物観察

No.	器　種	法　量	色　調	焼　成	胎　土	備　考	残存率
1	土師器 甕	口径 18.5 底径 6.3 高さ 28.3	暗橙褐色	良好	雲母 多量 白粒・片岩 中量 石英・黒粒・角閃石 少量	煤の付着・被熱による変色が輪状に認められる。	80%
2	土師器 甕	口径 (18.1) 底径 7.0 高さ 30.1	淡橙褐色	普通	雲母・石英・片岩 中量 白粒・黒粒・角閃石 少量 鉄粒 微量	器面の摩滅が認められる。	70%
3	土師器 甑	口径 (24.3) 底径 (9.5) 高さ 27.1	淡橙褐色	良好	白粒 中量 黒粒・鉄粒 少量	器面の磨耗が認められる。	60%
4	土師器 甕	口径 (22.3) 底径 7.1 高さ 21.0	淡橙褐色 ～ 暗褐色	良好	白粒・石英・雲母 中量 チャート・黒粒・片岩 少量	煤・被熱粘土の付着及び被熱による変色が認められる。	70%
5	土師器 甕	口径 (13.5) 底径 4.6 高さ 16.7	暗橙褐色	良好	石英・片岩 多量 雲母 中量 鉄粒 少量	口縁部に吹きこぼれの痕跡、胴部に輪状に煤の付着が認められる。	90%
6	土師器 坏	口径 (13.3) 底径 － 高さ 5.9	淡橙褐色	良好	角閃石・鉄粒・片岩 少量 白粒・黒粒 微量	胎土はきめ細かい。	50%
7	土師器 坏	口径 (12.9) 底径 － 高さ 5.4	赤褐色	良好	片岩・石英 多量 白粒 少量	被熱による器面の剥落が著しい。	60%
8	土師器	口径 (12.3) 底径 － 高さ 7.4	淡橙褐色	良好	雲母 多量 白粒 中量	器内面に被熱粘土の付着が認められる。	80%

表－３　第３号住居址遺物観察

No.	器　種	法　量	色　調	焼　成	胎　土	備　考	残存率
1	土師器 甕	口径 (11.0) 底径 5.9 高さ 11.6	淡橙褐色 ～ 暗橙褐色	良好	片岩・白粒 多量 雲母 中量	被熱による器面の劣化が著しい。	60%
2	土師器 坏	口径 (12.7) 底径 － 高さ 5.5	橙褐色	良好	白粒・雲母 多量 鉄粒 中量		

表－４　第４号住居址遺物観察

No.	器　種	法　量	色　調	焼　成	胎　土	備　考	残存率
1	土師器 甕	口径 (18.2) 底径 5.2 高さ 35.1	橙褐色 ～ 赤褐色	良好	石英・白粒 中量 鉄粒・黒粒 少量	胴部下半に被熱による変色が認められる。	60%
2	土師器 甕	口径 16.0 底径 4.1 高さ 35.6	橙褐色 ～ 淡褐色	普通	片岩・石英・白粒 多量 雲母 中量 鉄粒・黒粒 少量	胎土が粗い。 胴部下半に被熱による変色が認められる。	60%
3	土師器 甕	口径 (19.1) 底径 － 高さ (26.5)	淡橙褐色	普通	鉄粒・石英・白粒 中量 黒粒・マンガン 少量	器面の摩滅が著しい。	40%
4	土師器 甑	口径 (23.9) 底径 (8.5) 高さ 29.9	淡橙褐色	良好	白粒・片岩・石英 中量 鉄粒 少量	胎土は細かい。	40%
5	土師器 鉢	口径 17.6 底径 － 高さ 9.9	橙褐色	普通	雲母・白粒 多量 鉄粒・黒粒 中量 角閃石 少量	被熱による器面の剥落が著しい。	70%
6	土師器 鉢	口径 18.2 底径 － 高さ 11.5	橙褐色	良好	片岩・白粒・黒粒 中量 鉄粒・角閃石 少量	胴部外面に煤が輪状に付着。底部が被熱により変色している。	完形
7	土師器 鉢	口径 18.6 底径 － 高さ 12.2	橙褐色 ～ 暗灰褐色	良好	白粒・黒粒 中量 鉄粒 少量 マンガン 微量		90%
8	土師器 坏	口径 13.0 底径 － 高さ 3.9	橙褐色	普通	雲母 多量 白粒・片岩 中量 片岩・鉄粒 少量	底部は被熱のため変色している。	完形
9	土師器 坏	口径 (12.4) 底径 － 高さ 3.7	橙褐色	普通	雲母 多量 片岩・石英・白粒 中量 黒粒・鉄粒・角閃石 少量		完形
10	土師器 坏	口径 12.8 底径 － 高さ 4.5	橙褐色	良好	雲母 多量 黒粒・白粒 中量 鉄粒・石英・片岩 少量		90%
11	土師器 坏	口径 13.1 底径 － 高さ 3.9	橙褐色	普通	鉄粒・白粒・黒粒 中量 雲母・石英・角閃石 少量		完形
12	土師器 坏	口径 (12.9) 底径 － 高さ 3.5	橙褐色	良好	鉄粒 多量 黒粒・白粒・雲母 少量		80%
13	土師器 坏	口径 (12.8) 底径 － 高さ 4.4	淡橙褐色	普通	雲母・白粒 多量 鉄粒・黒粒 少量		60%
14	土師器 坏	口径 13.4 底径 － 高さ 3.8	暗橙褐色 ～ 黒灰色	良好	雲母・黒粒 多量 白粒 中量 石英・片岩 少量		完形
15	土師器 坏	口径 16.7 底径 － 高さ 4.4	橙褐色	良好	雲母・片岩 多量 白粒・黒粒 中量 角閃石 少量		90%
16	土師器 坏	口径 14.4 底径 － 高さ 5.0	淡橙褐色	良好	鉄粒 多量 黒粒 中量 雲母・角閃石 少量		完形
17	土師器 坏	口径 (13.3) 底径 － 高さ 6.2	橙褐色 ～ 暗橙褐色	良好	雲母 多量 鉄粒・黒粒 少量		60%
18	土師器 坏	口径 (13.9) 底径 高さ 4.4	橙褐色 ～ 暗橙褐色	良好	黒粒 多量 鉄粒 中量 白粒 少量	混入。	50%
19	須恵器 短頸壺	口径 (10.6) 底径 － 高さ 6.8	灰色	良好	白粒 少量	胎土は細かい。	60%

No.	器　種	法　量	色　調	焼　成	胎　土	備　考	残存率
20	須恵器	口径 (9.9) 底径 － 高さ 5.0	暗灰色 ～ 灰色	普通	白粒・黒粒・角閃石　少量		60%
21	須恵器 坏蓋	口径 (18.5) 底径 － 高さ (1.7)	灰褐色	普通	雲母・白粒　微量	混入。	20%

表－５　第６号住居址遺物観察

No.	器　種	法　量	色　調	焼　成	胎　土	備　考	残存率
1	土師器 壷	口径 － 底径 9.2 高さ (21.2)	淡橙褐色	普通	鉄粒・白粒　中量		50%
2	土師器 台付甕	口径 (12.2) 底径 7.6 高さ 21.4	淡橙褐色 ～ 暗橙褐色	普通	白粒・石英　多量 鉄粒・黒粒　微量	被熱による器面の剥落が著しい。	50%
3	土師器 甑	口径 (16.0) 底径 3.0 高さ 8.8	淡橙褐色	良好	片岩・石英・鉄粒　中量		40%
4	土師器 甕	口径 (11.1) 底径 6.0 高さ 13.7	橙褐色 ～ 赤褐色	良好	白粒・石英　多量 黒粒・角閃石・鉄粒　少量	胴部上半に煤の付着が著しい。被熱により器面の剥落が顕著である。	90%
5	土師器 甕	口径 (15.4) 底径 － 高さ 12.9	淡橙褐色 ～ 淡暗褐色	普通	白粒・石英　中量 鉄粒・黒粒・赤チャート　少量	器面の摩滅が著しい。被熱による変色が認められる。	80%
6	土師器 高坏	口径 20.8 底径 － 高さ (6.2)	淡橙褐色 ～ 暗橙褐色	良好	白粒　多量 片岩・石英　中量 鉄粒・角閃石　少量		40%
7	土師器 高坏	口径 (18.9) 底径 － 高さ (6.7)	橙褐色	良好	白粒・雲母　中量 片岩・石英・鉄粒・角閃石　少量		30%
8	土師器 高坏	口径 － 底径 － 高さ (10.9)	橙褐色	良好	鉄粒・石英　中量 白粒・黒粒　少量	胴部は上端から穿孔されるが、ホゾとの接合とは無関係である。	50%
9	土師器 器台形土器	口径 － 底径 － 高さ (11.6)	橙褐色	普通	白粒　多量 石英・黒粒・片岩・鉄粒　少量	脚接合部は上端から、脚体部は外側からの穿孔がなされる。	40%

表－６　第７ａ・７ｂ号住居址出土遺物

No.	器　種	法　量	色　調	焼　成	胎　土	備　考	残存率
1	羽釜	口径 (21.3) 底径 7.0 高さ 28.7	淡暗褐色 ～ 淡橙褐色	酸化焔 普通	黒粒　多量 鉄粒・白粒・角閃石　少量	鍔部に巻き上げ痕を残す。器面の摩滅が著しい。	60%
2	羽釜	口径 (22.0) 底径 － 高さ (23.8)	灰色	還元焔 良好	白粒・黒粒・角閃石　少量		40%
3	羽釜	口径 (27.0) 底径 － 高さ (25.7)	淡褐色 ～ 橙褐色	酸化焔 普通	角閃石・白粒　中量 鉄粒　少量	底部を欠くが形態から甑の可能性が指摘される。	40%
4	羽釜	口径 (28.1) 底径 － 高さ (24.3)	淡橙褐色	酸化焔 普通	雲母　多量 鉄粒　中量 黒粒　少量	底部を欠くが形態から甑の可能性が示唆される。輪状の黒色帯有り。	40%
5	ロクロ土師器 坏	口径 (12.2) 底径 6.4 高さ 4.9	橙褐色	酸化焔 良好	黒粒・鉄粒　中量 白粒　少量		80%
6	ロクロ土師器	口径 (9.0) 底径 － 高さ 8.0	暗橙褐色 ～ 暗赤褐色	酸化焔 普通	白粒　中量 鉄粒・黒色粒　少量	口縁部にコゲ状の汚れが付着している。	80%
7	灰釉陶器	口径 － 底径 (8.3) 高さ 5.2	灰白色	良好 堅緻	白粒　多量 黒粒　少量	無職～淡緑色の自然釉	30%

表－７　第９号住居址遺物観察

No.	器　種	法　量	色　調	焼　成	胎　土	備　考	残存率
1	土師器 甕	口径　18.1 底径　7.0 高さ　22.6	橙褐色 ～ 暗橙褐色	良好	片岩・石英　中量 鉄粒・黒粒　少量	器面はやや摩滅している。	70%
2	土師器 台付甕	口径　(15.3) 底径　8.8 高さ　29.6	暗赤褐色	普通	鉄粒　中量 白粒・黒粒・片岩　少量	器面の剥落が顕著である。	50%
3	土師器 甕	口径　11.9 底径　4.6 高さ　12.9	淡橙褐色	良好	黒色粒・鉄粒　少量 白粒　微量	胎土はきめ細かい。	完形
4	土師器 鉢	口径　(11.4) 底径　3.7 高さ　5.6	暗茶褐色 ～ 黄褐色	普通	白粒・鉄粒　中量 赤チャート　微量	被熱による器面の剥落が認められる。	60%
5	土師器 鉢	口径　(13.0) 底径　3.9 高さ　5.4	橙褐色	良好	黒粒・鉄粒　中量 チャート　少量		40%
6	土師器 高坏	口径　(14.8) 底径　－ 高さ　(5.4)	橙褐色	良好	雲母　多量 白粒・黒粒・片岩・鉄粒　少量		40%
7	土師器 高坏	口径　(15.0) 底径　－ 高さ　(4.1)	赤褐色	良好	白粒・雲母　多量 鉄粒・黒粒　中量 角閃石　少量		30%
8	土師器 高坏	口径　(15.9) 底径　10.4 高さ　15.0	淡橙褐色	良好	片岩・白粒・雲母・鉄粒　中量 マンガン　少量		50%

表－８　第10号住居址遺物観察

No.	器　種	法　量	色　調	焼　成	胎　土	備　考	残存率
1	土師器 甕	口径　19.4 底径　6.2 高さ　27.2	橙褐色 ～ 暗橙褐色	良好	白粒　多量 黒粒・鉄粒　少量	口縁部外面に部分的にミガキが施される。頚部に輪状の煤が付着している。	90%
2	土師器 甕	口径　15.3 底径　3.5 高さ　22.3	赤褐色 ～ 暗褐色	良好	白粒・石英・黒粒　中量 鉄粒・角閃石　少量		80%
3	土師器 甕	口径　(17.1) 底径　－ 高さ　(21.6)	暗橙褐色 ～ 橙褐色	良好	白粒・雲母　多量 鉄粒・角閃石　少量	胴部中位に輪状に煤が付着している。	70%
4	土師器 壷	口径　13.2 底径　6.7 高さ　23.3	暗橙褐色 ～ 橙褐色	良好	白粒・黒粒・鉄粒　中量		60%
5	土師器	口径　(8.7) 底径　6.9 高さ　11.9	暗灰色 ～ 淡橙褐色	普通	白粒　多量 雲母　中量 鉄粒・片岩・石英・黒粒　少量		80%
6	土師器 坩	口径　(11.4) 底径　－ 高さ　15.4	黄褐色 ～ 暗橙褐色	良好	鉄粒　多量 白粒・黒粒　中量		60%
7	土師器 坩	口径　8.5 底径　－ 高さ　(6.0)	橙褐色	良好	雲母　多量 黒粒・白粒　中量 鉄粒　少量		40%
8	土師器 坩	口径　－ 底径　－ 高さ　5.3	暗橙褐色 ～ 灰褐色	良好	石英・白粒・鉄粒　中量		50%
9	土師器 坩	口径　－ 底径　－ 高さ　6.5	暗橙褐色 ～ 赤褐色	良好	チャート・白粒・鉄粒　少量		60%
10	土師器 高坏	口径　－ 底径　－ 高さ　(7.5)	淡暗褐色 ～ 暗橙褐色	良好	雲母　多量 黒粒　中量 白粒　微量		40%

No.	器　種	法　量	色　調	焼　成	胎　土	備　考	残存率
11	土師器 高坏	口径　21.3 底径　(14.5) 高さ　14.7	橙褐色	普通	白粒　多量 石英・鉄粒・黒粒　少量 白針？　ごく微量		80%
12	土師器 鉢	口径　11.9 底径　3.6 高さ　4.7	赤褐色	良好	白粒　多量 片岩・黒粒　少量		90%
13	土師器 鉢	口径　(9.2) 底径　3.4 高さ　3.2	赤褐色	良好	白粒・黒粒・鉄粒　少量 白色光沢粒　少量		40%

表－9　第11号住居址遺物観察

No.	器　種	法　量	色　調	焼　成	胎　土	備　考	残存率
1	土師器 甕	口径　16.8 底径　7.7 高さ　27.2	暗橙褐色 ～ 橙褐色	良好	片岩・石英　中量 鉄粒・白粒　少量		80%
2	土師器 甕	口径　17.5 底径　6.1 高さ　24.7	橙褐色 ～ 暗赤橙褐色	良好	白粒・片岩　中量 鉄粒・石英　少量 黒粒　微量		40%
3	土師器 高坏	口径　－ 底径　－ 高さ　(16.2)	暗褐色 ～ 暗橙褐色	良好	白粒・雲母　多量 鉄粒・黒粒　少量		60%
4	土師器 高坏	口径　－ 底径　－ 高さ　(11.6)	暗橙褐色	良好	白粒　多量 鉄粒・黒粒　少量		50%
5	土師器 高坏	口径　－ 底径　－ 高さ　(10.0)	暗橙褐色	良好	雲母　多量 角閃石・片岩・白粒　少量		40%
6	土師器 高坏	口径　－ 底径　－ 高さ　(8.6)	暗橙褐色 ～ 橙褐色	良好	白粒　多量 片岩・鉄粒　中量 黒粒　少量		40%
7	土師器 高坏	口径　－ 底径　－ 高さ　(7.8)	淡褐色 ～ 橙褐色	良好	片岩・雲母　多量 鉄粒・白粒・黒粒　少量		40%
8	土師器 坩	口径　(8.3) 底径　－ 高さ　3.6	橙褐色	良好	片岩・石英・鉄粒・白粒 中量		70%
9	土師器 坩	口径　(9.0) 底径　－ 高さ　3.8	赤褐色 ～ 橙褐色	良好	白粒・鉄粒　中量 黒粒　少量		70%
10	土師器 坩	口径　(8.7) 底径　－ 高さ　3.5	淡橙褐色 ～ 淡褐色	良好	片岩・黒粒　中量 石英・鉄粒　少量		90%
11	土師器 坩	口径　(8.3) 底径　－ 高さ　7.6	暗赤褐色 ～ 赤褐色	良好	白粒　多量 鉄粒・光沢粒・黒粒　少量		80%
12	土師器 坩	口径　－ 底径　－ 高さ　(6.7)	淡暗褐色 ～ 淡暗橙褐色	良好	片岩・白粒　多量 鉄粒　少量	器面の風化が著しい。	60%

表－10　第13号住居址遺物観察

No.	器　種	法　量	色　調	焼　成	胎　土	備　考	残存率
1	土師器 甕	口径　－ 底径　7.1 高さ　(7.6)	暗褐色 ～ 淡褐色	普通	石英・白粒　中量 片岩・雲母・鉄粒　少量		20%
2	土師器 坩	口径　－ 底径　－ 高さ　(12.4)	橙褐色	良好	雲母　中量 角閃石・石英・鉄粒　少量		70%

表－11　第15号住居址遺物観察

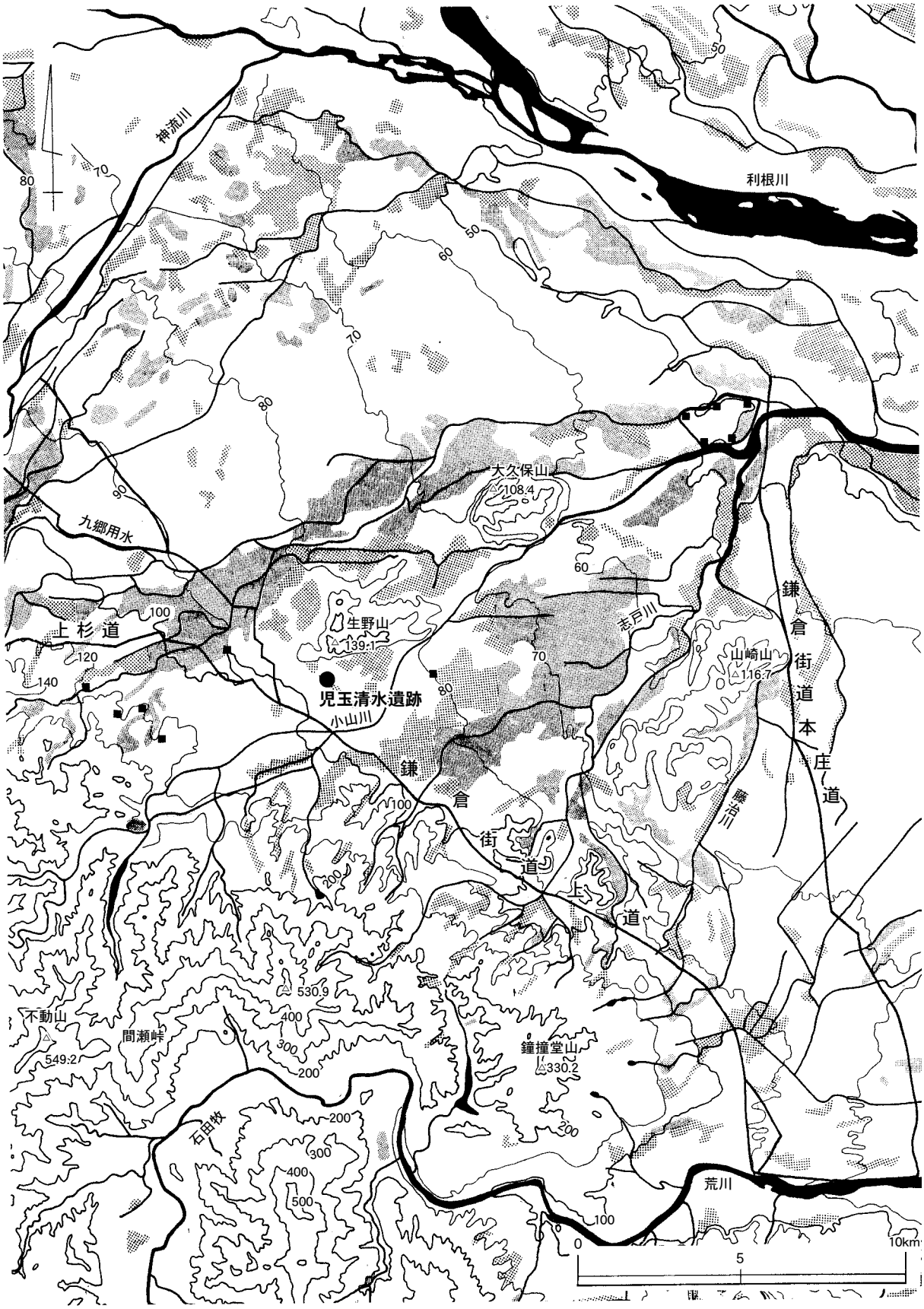
No.	器　種	法　量	色　調	焼　成	胎　土	備　考	残存率
1	土師器 坩	口径　9.0 底径　－ 高さ　6.5	淡橙褐色	普通	雲母・白粒・黒粒　中量 鉄粒　少量	胎土がきめ細かい。	完形
2	土師器 鉢	口径　－ 底径　(4.7) 高さ　4.5	黒灰色 ～ 淡褐色	普通	白粒　少量		50%
3	土師器 鉢	口径　(12.9) 底径　5.0 高さ　6.0	淡黄褐色 ～ 暗赤褐色	良好	雲母　多量 鉄粒・黒粒・角閃石　微量		60%
4	土師器 高坏	口径　16.1 底径　－ 高さ　5.8	暗褐色 ～ 橙褐色	良好	片岩　多量 石英・白粒　中量 角閃石　少量		40%

表－12　第16号住居址遺物観察

No.	器　種	法　量	色　調	焼　成	胎　土	備　考	残存率
1	土師器 甕	口径　15.7 底径　－ 高さ　(24.9)	淡橙褐色 ～ 橙褐色	普通	白粒　多量 黒粒・鉄粒　少量	胴部中位に被熱粘土の付着が認められる。	40%
2	土師器 甕	口径　(15.0) 底径　－ 高さ　(25.6)	暗橙褐色 ～ 橙褐色	良好	片岩・白粒　多量 黒粒・鉄粒　少量		40%
3	土師器 甕	口径　(16.2) 底径　－ 高さ　(28.1)	淡褐色 ～ 淡橙褐色	良好	雲母　多量 白粒　中量 石英・角閃石・鉄粒　少量	胴部外面に被熱粘土の付着が認められる。	70%
4	土師器	口径　(22.2) 底径　7.0 高さ　8.4	黒灰色	不良	白粒　少量		90%
5	土師器 坏	口径　(12.8) 底径　－ 高さ　5.2	淡褐色	良好	雲母　多量 黒粒　少量		40%
6	土師器 坏	口径　(15.0) 底径　－ 高さ　4.2	淡橙褐色 ～ 淡褐色	良好	鉄粒・雲母・角閃石・白粒　中量		80%

表－13　第17号住居址遺物観察

No.	器　種	法　量	色　調	焼　成	胎　土	備　考	残存率
1	土師器 甕	口径 (17.6) 底径 7.7 高さ 25.2	暗橙褐色 ～ 橙褐色	良好	鉄粒・白粒・黒粒・角閃石 中量		80%
2	土師器 甕・壷	口径 (15.5) 底径 6.9 高さ 21.2	赤褐色	良好	白粒・鉄粒　中量		50%
3	土師器 甕	口径 － 底径 8.8 高さ 29.2	暗橙褐色 ～ 淡褐色	良好	白粒・石英　中量	胎土が粗い。	60%
4	土師器 甕	口径 (21.4) 底径 高さ (19.4)	淡褐色 ～ 淡橙褐色	普通	雲母　多量 鉄粒・黒粒　中量 白粒・角閃石　少量		30%
5	土師器 甕	口径 14.6 底径 23.4 高さ 6.7	赤褐色 ～ 暗褐色	良好	片岩・白粒　多量 石英・鉄粒・黒粒　少量	胴部下半に被熱粘土の付着が認められる。胎土が粗い。	90%
6	土師器 甕	口径 16.2 底径 6.5 高さ 29.6	橙褐色 ～ 暗橙褐色	良好	雲母　多量 白粒・黒粒　少量 鉄粒　微量	胴部外面被熱粘土の付着、及び胴部下半が被熱による変色が認められる。	完形
7	土師器 甑	口径 (16.5) 底径 10.4 高さ 5.0	赤褐色 ～ 橙褐色	良好	白粒・片岩・石英　少量 鉄粒　微量	内面に輪状のヨゴレが認められる。	70%
8	土師器 甑？	口径 (29.9) 底径 (17.6) 高さ －	赤褐色 ～ 橙褐色	良好	雲母　多量 黒粒・鉄粒　少量		40%
9	土師器	口径 (11.6) 底径 高さ 5.9	暗茶褐色 ～ 暗橙褐色	良好	白粒　多量 石英　少量		60%
10	土師器	口径 13.1 底径 高さ 6.6	淡橙褐色 ～ 淡褐色	良好	雲母　多量 鉄粒・白粒　中量 マンガン　少量		完形
11	土師器	口径 11.3 底径 6.7 高さ 6.6	暗橙褐色	良好	白粒　多量 鉄粒・石英　中量		90%
12	土師器	口径 18.2 底径 5.2 高さ 7.3	淡褐色 ～ 淡橙褐色	良好	雲母　多量 鉄粒・黒粒　少量 白粒　微量	胎土はきめ細かい。	完形
13	土師器 坏	口径 13.6 底径 高さ 4.9	淡橙褐色	良好	雲母　多量 鉄粒・角閃石・黒粒　少量		完形
14	土師器 甕	口径 － 底径 － 高さ (47.8)	暗橙褐色 ～ 暗灰褐色	良好	雲母・白粒　多量 黒粒・片岩・角閃石　少量	口縁部と胴部は接合しない。器面は剥落が顕著である。	20%



第50図　児玉郡周辺の地形と鎌倉街道

第Ⅴ章　児玉の交通路と町並みの形成

－ 小山川水系と鎌倉街道の周辺 －

は じ め に

伝統的な集落は、先史文化以来、決して孤立して存立しているわけではなく、多様な交通形態の結節点として位置づけるべき存在であることが、近年の調査や分析によって次々と明らかにされてきている。これまで、この地域の開発史を中心に伝統的な地域社会の形成過程とその推移について考えてきたところであるが、これらの地域社会はもちろん共同性に基づく相対的な自律性を帯びており、それぞれに固有の問題をもっている。しかし、それぞれの「村落」は、もとより独立的に存在しているわけではなく、様々な交通に基づく多重の関係性をもっていることもまた事実である。

河川の利用形態のうちでも灌漑にかかる水路網による地域の共同性については、すでに幾つかの旧稿（鈴木、1998ほか）で分析を行ってきたところである。しかし、河川の利用やその流路の問題は、水田の灌漑と生産基盤の問題はもとより、河川に関わる多様な用益権の問題、あるいは交通路としての問題等を含んでおり、また土地の境界の問題にも関わる部分がある。

本章の課題

本章では、河川の利用について一般性の中で位置づけるとともに、その利用形態のうちでも主として交通に関わる水運について考えてみたい。また、「鎌倉街道」をはじめとする古道の推移と、児玉町八幡山を含む児玉の町並みの形成過程についても併せて検討を試みるものである。その過程で、この地域の伝統的な地域社会の形成過程に果たす本庄市児玉区域の地位を考えながら、遠近の地域相互の関係性を帯びている交通の結節としての、中世のひとつの小地方都市の盛衰の過程を分析するための条件整備を図ろうとするものである。

１．古代における河川の利用

ａ．河川の利用と灌漑の形態

児玉清水遺跡の遺跡名のもととなった小字名の「清水」とは、清水の湧出にかかる地名であり、付近には湧水を貯水した「清水池」がある。また、隣接する字「思池」、字「大池」には同名の池が存在したところから、その湧水が貯水された姿を示す地名である［第52・53図］。この湧水に源を発する細流は、生野山丘陵に沿って小さな開析谷を形成しつつ流下し、利根川水系の小山川（旧身馴川）に合流している。

先史文化と河川

縄紋後・晩期においては、小山川流域等においてもその遺跡分布状態からある種の流域集団を形成していたことが推定されるが、これは用益地としての河川およびその低地等に依存した占地形態であると見做すことができる（鈴木、1986・1997）。また、この地域の弥生時代の初期においても河川に沿った遺跡分布が確認されるところから、その利用が活発であったと推定される。このような遺跡の分布状況から、河川の上・下流を往還するような居住形態を推定することが可能であり、中期後半期にはその往還システムの一方の極である低地域の集落が肥大化するようである。本遺跡で検出された縄紋後・晩期や弥生文化の活動痕跡は、このような過程の中で位置づけることができるであろう（註１）。

古墳時代における児玉町域周辺の灌漑方式については、河川灌漑と湧水灌漑という二つ

の灌漑の形態をもっており、それぞれに灌漑方式の差異はあるものの、埋没河道や谷状の低地帯の再掘削を伴う帯状の低地地形に依存する共通した灌漑用水の確保の方式を採用していると見做すことができる（鈴木、2003)。これらの灌漑方式は、近年の発掘調査の事例によって、古墳時代の中期以前を中心に実施され、古墳時代後期に至るまで積極的に利用されている状況が確認されている（鈴木、1995・1996他)。おそらく、児玉清水遺跡においても古墳時代における集落設営の前提として、北側および南側の湧水域を積極的に掘削することによって溜井状の水源を確保したことが想起されるものであり、これが後の「大池」や「思池」の母胎となったのであろう。

加美郡の河川利用

このような旧「児玉郡」の状況に対して、旧「加美郡」に相当する上里町域の河道について検討されている外尾常人氏の分析を参考に考えるならば、埋没河道にかかる灌漑方式は、古墳時代後期において推進されている可能性が認められるであろう。外尾氏の分析によれば、氏の検討された「神流川旧河道跡」に沿って、これを挟むように古墳時代後期の集落跡が位置しており、５世紀終末頃よりこのような状況が窺えるようである（外尾、2003)。上里町周辺区域においては、古墳時代前期の集落跡は稀薄であり、古墳時代後期初頭頃より集落が急速に設営されていることが指摘されている。このような、「神流川旧河道跡」周辺のと集落遺跡の分布状況は、時期は若干異なるものの人為的な改変を伴う“蛭川埋没河川跡”（鈴木、1995）等の流域に見られるような本庄市域の状況と類似していることに注意されなければならないであろう。あるいは、この「神流川旧河道跡」においても、再掘削等の何らかの人為的改変の行われている可能性を積極的に検討する必要があるものと思われる。

旧河道の利用開発

しかし、これらの旧「加美郡」の区域においては、古墳時代前期や中期の集落遺跡の分布が稀薄であることから、これらの旧河道の利用は古墳時代後期に行われた可能性が高いといってよいであろう。翻って、この旧河道周辺の利用形態が低地帯の開墾という形態で進行した場合は、古墳時代後期に集落設営が開始された意義が捉え難く、むしろこの河道の人為的な掘削等の利用を前提に集落が設営されたと考えることが合理的であるように思われる。

ともあれ、これらの河道跡は、「古九郷用水」（鈴木、1989他）に関わるような、この地域における大規模な河川である神流川からの引水に先行するような灌漑形態に関連するものとして注目しておくべきである。このことは、先の「神流川旧河道跡」が、何らかの形で神流川からの引水を図っていたものであった場合、神流川からの大規模な引水を前提とする「古九郷用水」の開鑿においては、用水利用の地域間の確執が生じる可能性を示唆しており、その相互の調整が必要であったことを予想しておく必要がある。おそらく、神流川右岸のみならず上毛野国に相当する左岸との用水利用関係の調整を想定するならば、より上位の権力との関係と計画的な分水を想起すべきであろう。言い換えると、この地域においては古墳時代には自然河川の流域を超える用水関係の利害の確執や調整は認められず、より上位の政治的な関係は水利関係には顕在化していないと見做し得るわけである。したがって、古墳時代における「神流川旧河道跡」の利用形態の検討は、このような極めて多様で重要な問題を含んでいるといってよいであろう。

ともあれ、生野山丘陵以南の児玉清水遺跡の周辺においては、近世においても河川灌漑が認められていないところから、この地域における古墳時代の一般的な灌漑形態である溜

井による湧水利用が、古墳時代後期においても積極的に行われていたことを想起すべきであろう。

ｂ．小山川と児玉地区の古代集落

児玉清水遺跡の東方約１kmに位置する小山川（旧身馴川）は、山間部から平野部に至る本庄市児玉町長沖付近で伏流し、児玉大久保遺跡（恋河内、2003・桜井、2004）よりやや北で再び表流水が出現し、児玉清水遺跡付近の複数の湧水点から流下する小河川と合流して利根川方面へと流下している。この水源に近いふたつの地点に集落遺跡が存在していることも偶然ではないであろう。この小山川は、古くから「身馴川」と呼ばれた河川であり、正安三年（1301年）に編集された『宴曲抄』［児中資］においても「見馴川」と記されている(註２)。本来は、水源地から元小山川と合流するまでの範囲を身馴川、その下流域は小山川と呼称されていたものである。この小山川は、深谷市域で志戸川と合流し、利根川へと流れ込んでいる。

小山川左岸の灌漑

小山川の段丘上に位置する児玉大久保遺跡のやや上流部にあたる伏流水域の対岸には、広木大町古墳群（小渕他、1980・長滝他、2004）あるいは後山王遺跡（長滝、1992）等が位置しているが、この区域においては集落遺跡も小規模なものしか確認されていない。したがって、古墳時代後期においてもこの間に小山川が位置していたと推定されるところから小山川左岸に大規模な水田を想定することは困難である。児玉清水遺跡の周辺は、思池周辺からの細流による開析によって形成された低地を中心に水田が営まれていたが、この小山川左岸の区域では小山川の水は基本的に灌漑に用いられておらず、近世においても水田経営は大規模なものではなかった（註３）。ちなみに、小山川の用水利用は、那賀郡の灌漑にかかる河川敷の掘削を伴う水利慣行があり、表流水域においてもその流量は多くなく、取水にかかる共同作業が必要であった点については、かつて注目したところである（鈴木、1987）。

児玉清水遺跡の周辺

児玉清水遺跡の南東に位置する児玉大久保遺跡は、東側が崖線となりその直下が河川敷となっており、付近の数地点におよぶ試掘調査の結果においても水田の形成を認めることが困難であるが、そのＢ地点（恋河内、2003）では、古墳時代後期から奈良時代中期までと奈良時代後半以降では遺構確認面が異なっており、奈良時代のうちに畠地としての耕作等にかかる人為層の形成が認められるようである。言い換えると、児玉清水遺跡や児玉大久保遺跡の集落は、「清水池」や「思池」あるいは「大池」に相当するような湧水で灌漑される小規模な水田以外は畑作に依存する集落であると考えることができよう。

この児玉清水遺跡および児玉大久保遺跡の、出土土器に見る器種の編制は、ともに低地内の水田地帯を臨む集落との差異を認めることができない。したがって、出土遺物から判断するならば、これらの集落と類似した消費生活をおくっていたものと考えてよい。むしろ、大形甑を組成中に含んでいることを積極的に評価するならば一定の米穀の消費を見込む必要があろう。したがって、これらの集落もまた、自律的・孤立的・自給的ではなく地域社会の内部で相互連関をもった集落群を構成していたものと捉えることができるものである。

また、児玉郡域はもとより、小山川下流域に位置する旧「幡羅郡」に相当する深谷市域においても、結晶片岩粒と海綿骨針とを胎土中に含む埴輪が検出されていることに注目す

るならば、これらの何らかの運搬手段が考えられなくてはならないであろう（註４）。もちろん、この埴輪の運搬については、陸路での運搬という想定が不可能ではないとはいえ、陸路馬匹による運搬以外にも、その分布域から小山川による水運についても積極的に想定しておくべきである（註５）。

２．古代・中世の河川と交通路

ａ．河川の旧流路と水系

利根川の流路が、広瀬川流路から現在の位置へと変化したのが16世紀前半、天文年間の洪水以降であることは夙に知られている。また、「杉山、新井、都島、山王堂、沼和田、仁手」等の村々は、17世紀前半寛永年中の洪水で川瀬が変わり上野国那波郡から武蔵国へ編入されたことが知られている。ちなみに、玉村五料より下流の利根川は「烏利根」とも呼称されていたようである。また、利根川が、12世紀以前においては現在の桃ノ木川流路を流下していたと推定されており、現在より下流部で烏川と合流したことが知られている（澤口、2000他）。したがって、水運の問題等を考える上ではこれらの旧流路の問題には注意しておくべきであろう。

烏川の旧流路

外尾常人氏は、このような現在の「利根川」以前の烏川の旧流路について、現状の地形や近世以降の史料等について丹念に検討され、現本庄市小島から若泉の崖線に接するような流路を推定されている（外尾、2003）。しかし、これらの流路は、近世以降においてもしばしば変化が認められるところから、古墳時代にまで遡るかどうかについては再検討が必要であるように思われる。むしろ、この崖線上に連鎖的に位置する古墳群や集落遺跡等の分布から考えるとき、その生産基盤や生活域をこの低地帯に求める立場をとるならば、より北側の流路を想定することも必要であろう。しかし、古代におけるこの烏川流路については、もとより近世以前の史料が残されておらず、今日この低地部の考古学的な調査が充分ではないところから、この具体的な流路と遺跡群との関係については、今後に残された課題であると考えてよいであろう。ともあれ、これらの利根川や烏川等の河川の流路の問題は、上武国境の問題や古墳造営の生産基盤の問題あるいは河川に関わる用益権の問題、また交通路としての河川の問題等を含んでおり、極めて重要な問題として今後も注意しておくべきである。

小山川の舟運

小山川は、下流において那賀郡や榛沢郡を流下した志戸川・藤治川とも合流しており、相互の水路網としての連絡をもっていることにも注意しておきたい。また、小山川は運河的な機能を想定されている岡部町中宿遺跡で検出された榛澤郡家正倉跡群下の「滝下河川跡」（宮本、1997）へと連絡していた可能性も検討しておくべきであろう。この「滝下河川跡」は、幡羅郡家と推定される幡羅遺跡の近傍の河川跡とも連絡していた可能性があると推定されるものである（註６）。小山川流域の河川や水路の持っている運河的水運機能については、陸路と併せて今後の更なる検討が必要である。ちなみに、この時期の小山川は、烏川によって形成された低地帯から妻沼低地へと流れていることに注意しておくべきであろう。

なお、児玉窯跡群の飯倉窯址や美里町木部窯址で生産された、武蔵国分寺献納瓦の貢進の過程やその経路についても明らかではない。鎌倉街道の前身をこの貢進経路と推定する場合もある（福島、1983）。もちろん律令期においては、調庸物等の現物貢納経済に伴う「郡

家交易圏」の存在と交通関係を予想しえるものであるが、今日まで具体的な考古学的な確認はとれていない。ともあれ、鎌倉時代において北武蔵屈指の宿と市があったとされる児玉の市のもつ経済圏についても、これらを前提とする形成の前史をもっていると見做すことができるであろう。

b．中世の交通路と水運

中世の交通路については、「鎌倉街道」が著名であるが、もとよりこの幹道以外の交通路もまた多数存在していたと考えてよい。前稿（鈴木、2005）において、享徳の乱以降、雉岡城と五十子陣との関係を踏まえて、児玉の市を、「鎌倉街道」の「上道」と「上杉道」の分岐点付近に相当する小山川（身馴川）に沿った区域に位置することに注目し、この小山川の下流に位置する「鎌倉街道本庄道」の要衝付近に設営された五十子陣との相互の関係を考えるべき必要について提起したところである。そこでは、鎌倉時代以降、この周辺地域の内でも特筆すべき市の立つ「児玉」の地をひかえた雉岡城は、五十子陣の重要な兵站の確保のための拠点としての地位を占めていたものと推定した。

児玉の舟運

なお、五十子陣と児玉の市の相互の交通を考える上では、小山川の水運の問題を考えておくべきであるが、児玉の市に推定される区域の近傍は、小山川の伏流している区域に相当している。小山川の表流水量が増加する地点は、市庭の推定される区域の下流域に相当する、児玉大久保遺跡の北側に位置する美里町大字南十条付近である。なお、沼上には小山川伏流水が湧出する湧水点が多く認められることにも注意すべきであろう。ともあれ、小山川の水運の問題を考える上では、この表流水量の増加する地点付近から、「鎌倉街道」の「上道」と「上杉道」の分岐点付近を結ぶ古道が存在していることに注目しておく必要がある。

この古道は今日、児玉の区間においては県道深谷・児玉線に相当しているが、この道路を挟んで「大道南」と「大道北」という小字名［第52・53図］があり、古くから「大道」と呼称されてていたと考えてよいであろう（註７）。この「大道」の存在は、近世以前に遡る「鎌倉街道上道」と「鎌倉街道本庄道」方面を結ぶとともに、利根川水系を結ぶ経路として、「五十子」の近傍を経て岡部方面への経路の存在を想起させるものであり、児玉の市の交通を支えたひとつの幹線であったと考えることができよう。

この小山川の水運の問題を考える上では、鎌倉二階堂の永福寺と同笵の軒平瓦・軒丸瓦が生産された国指定史跡である水殿瓦窯跡（丸山、1990）の位置もまた、この小山川の表流水の限界域である児玉大久保遺跡の対岸にあたる美里町大字沼上に位置していることも偶然ではないであろう。もちろん、鎌倉街道の存在も無視し得ないとはいえ、このような瓦窯跡の位置から見るならば、おそらく鎌倉時代においても、すでに一定の舟運の存在を想起しておくことは必要であろう。

五十子と児玉

ともあれ、「児玉」の地は、児玉郡の主体的な水田地帯を構成していた条里施工区域である「九郷用水」灌漑区域の外部に位置しているが、今日より更に水田の可耕地の少ない区域であったと見做すことができる。しかし、児玉党系在地領主のひとつ「児玉氏」の本貫地として古くから拓け、後代に至るまで賑わいを見せた前提には、このような交通の結節点としての地位をもっていたためであると推定される。また、15世紀後半以前においても、正和三年（1314年）の「関東下知状」［児中資］に見られる「生子屋敷」の「生子」

が、児玉党本庄氏の本貫地のひとつと考えられる「五十子」と捉えられることや（鈴木、2000)、東本庄遺跡（松本他、2004）において15世紀後半の遺物群のほか、13世紀代に中心をもつ遺物群が検出されていることなどに注目するならば、享徳の乱以前においても児玉から五十子方面への経路が存在していたと見做すことは無理な推定とは言えないであろう(註８)。また、この地域の東五十子遺跡（太田、2002）を含む、山内上杉氏に関連する遺跡における「かわらけ」の分布のまとまりが指摘されている点にも注目しておくべきである（田中、2005・太田、2005他)。これらは、該期の手工業生産物の生産地と供給の機構の問題として、今後の重要な検討課題であるといってよいであろう。

小山川の利用形態

ちなみに、小山川は表流水域においてもその流量は多くなく、先に見たように那賀郡の水田の灌漑にかかる用水の確保のために、河川敷の掘削を伴う水利慣行が認められた。これらの点を前提に考えるならば、この時期の水運にかかる荷船も、比較的小規模なものを想定しておくべきであり、ある種の丸木舟のような形態を想定し得るであろう。また、児玉清水遺跡付近に源流をもつ小河川と小山川表流水域が合流する区域に相当すると考えられる位置に、沼沢地があったとする多くの伝承が存在していたこともまた、これら水運等の問題を考える上では積極的に検討しておくべきかも知れない（註９)。このような小規模な形態の荷船を想定した場合、積み荷を積み替え、中・遠距離の運搬にかかる交通の結節点としての河岸の存在についても考えておく必要があろう。また、水上交通を考える上では、この時期の利根川が、中川低地から東京湾に注いでいたことにも注意しておくべきである。ともあれ､児玉の市庭での経済活動は､この水運に関わる人々や陸運に関わる人々との相互の関連についても考えておく必要があろう。

利根川の水運

なお、近世の水運については、現在の本庄市山王堂にあった大型船が発着する「山王堂河岸」が賑わっており、秩父地域の石灰や薪炭等も児玉を経由し、この山王堂河岸から積み出されたことが知られている。また、この河岸ではより上流部への水運のために小型船への積み替えも行われたようである［児近資］。しかし、古代～中世の水運については不明な部分が大きい。ともあれ、沿岸部や大規模河川の中・下流域における水運の地位を想起するならば、利根川や烏川等の大規模な河川を中心とする水運は古代～中世においても想定しておくべきであろう。

３．交通路と児玉町場の形成

ａ．鎌倉街道と地方幹道

北武蔵最大の宿と目されている児玉宿や市の問題については、かつて旧稿（鈴木、2000）で触れたところである。「鎌倉街道上道」の小山川の渡河地点に推定される幾つかの経路は、いずれもこの伏流水域に位置しているところから、小山川は荒川等の大規模な河川と比較するならば、交通の障壁にはなっておらず、幾つかの中州をもつ比較的広い河川敷をもっていたと推定される。

児玉の市庭

ちなみに戦国期においては、金鑽御嶽城の落城に伴って利根川の河中の小島に避難したことが知られている［児中資］。なお、この時期の利根川は、広瀬川流路の時期であり、この小島は現在の伊勢崎市付近と考えられる。また、賀美郡においても神流川の安保、長浜付近に「島津小屋」があり「願成就院」が建てられており、上武国境の河川域は両国からの駆け込みの場であったことに注目されている（海津、1996)。このように、この地域

においても河川敷わけても中州等の境界域は、中立性を帯びた土地として位置づけられていたことを窺い知ることができる。ちなみに「鎌倉街道上道」の小山川の渡河推定地点の段丘上［第51図ａ］には、かつて八幡社が存在しており、近世の絵図にも記載され、今日においても「下八幡」という小字が残っている［第52・53図］。この「下八幡社」は、今日、児玉本町の八幡神社（東石清水八幡神社）［第51図ｂ］に合祀されている（註10）。あるいは、児玉の市については、『宴曲抄』の記載から「見馴川」渡河地点に程近い位置と見做し得るならば、この「下八幡」付近およびこれに接する境界域としての土地であった段丘崖下の位置に想定することが可能かも知れない。

鎌倉街道の周辺

児玉宿は、この「下八幡」に西側に位置する「鎌倉街道」の「上道」と「上杉道」の分岐点［第51図Ｃ］付近、したがって「鎌倉街道」の東側に延びる「大道」との分岐点にも近い位置に想定することも可能であろう。ちなみに、児玉本町（もとまち）の「鎌倉街道」に接し、八幡神社に隣接する位置に玉蓮寺［第51図ｃ］があるが、この寺院は、文永８年（1271）日蓮が佐渡へ配流された際に、「児玉六郎時国」の館に宿泊し、それを契機に館の一部に堂宇を設け、後に寺院となったという伝承をもっていることにも注目しておくべきであろう。ともあれ、児玉の宿と市庭は、ともに小山川渡河地点から今日の児玉本町の範囲とその隣接地のいずれかに存在していたと見做すことができる。

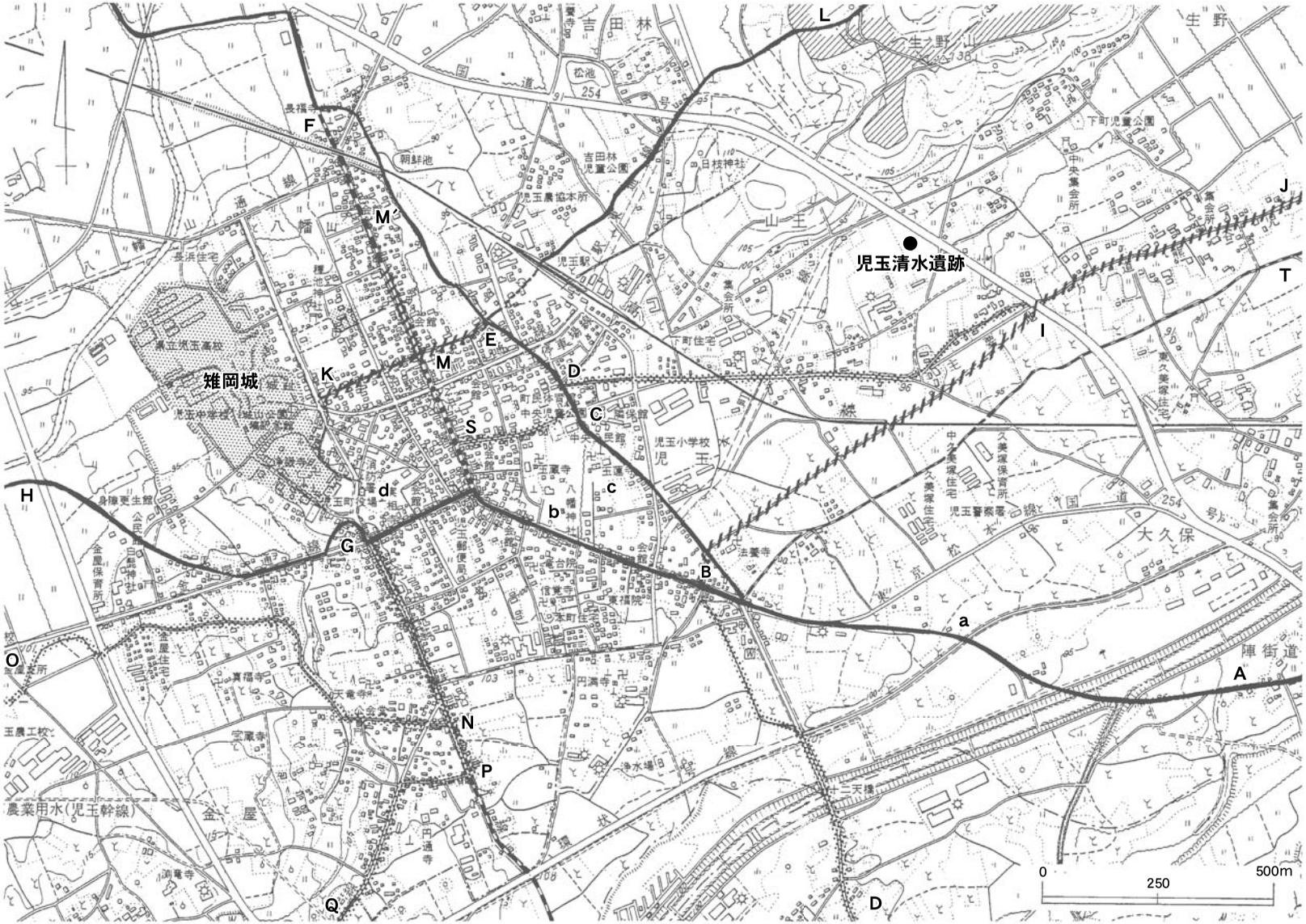
なお、寛永21年（1644）の「児玉村かわらひらき帳」によると、身馴川「中嶋」をはじめとする大規模な「かわらひらき」が行われた［児近資］。また、「かわら」、「かけの下」、「なまのかわらはた」等も同じく畑開きが行われている。このように近世においては、先に見たような中世において基本的に境界域の中立性を帯びた土地として位置づけられてきた河川敷や河川敷内の中州等もまた、新田開発の対象になっていったことは象徴的な事柄であったといえよう。

児玉の古道

ともあれ、先に見た「大道」と呼ばれる古道は、「深谷道」とも呼ばれ、児玉から深谷方面へと延びる道路である。しかし、今日の道路の起点［第51図Ｓ］である児玉「仲町」からの経路は、「鎌倉街道」と重複し［第51図ＣＤ］曲折するなど後出的であり、おそらくは字「飯米場」付近［第51図Ｄ］の「鎌倉街道」から分岐するのが本来的であるものと思われる。なお、この「飯米場」の北側を通る経路［第51図ＤＩ］は、城下の整備の後に発達したものであると推定されるところから、古くは法養寺の北側へと至る経路［第51図ＢＩＪ］が「大道」の本来の姿であったと考えることが可能である。また、「鎌倉街道上道」と「大道」の間の道の「大道」に沿った古道［第51図ＢＴ］は「中道」と呼ばれていたようであるが、おそらく数多く存在していたであろう幹線となる道路以外の古道については、今日その内容に不明な点が多い。

金屋の古道

また、児玉宿と市の西側に接する雉岡城の南側の区域に、鋳物師が定着し「金屋」が形成されたと推定されることとともに、この時期に生野山から移転したとする寺伝をもつ実相寺［第51図ｄ］等の寺院が見られることにも注目しておくべきであろう。なお、この「金屋」は、雉岡城が上杉氏治下の時期に、鋳物師が集住・定住することによって形成されたと推定され（鈴木、2005）、「鎌倉街道上杉道」から南に延びる後の秩父道（秩父新道）［第51図ＧＮＰＱ］に沿うような区域に位置していたと考えることができる。また、「大師道」とも呼ばれる、金屋から塩谷方面に延びる街道［第51図ＮＯ］に沿った区域に「別所城」や「篠城」が位置している点にも注目しておきたい。



第51図　児玉清水遺跡周辺の古道

鎌倉街道の支道

「鎌倉街道」以外の主要な古道については、児玉周辺の水田区域に条里形地割が施工されており、この方形の地割りに伴う曲折を辿らざるを得ないことから、近世に用いられていた本庄方面に向かう主要な経路は、水田地帯をはずれた経路であったことに注意しておきたい。このような経路には、条里水田地帯を避け、上真下から台地上を直線的に辿る「本庄道」とも呼ばれる古道の存在にも注意しておきたい。また「大名小路」と呼ばれる「鎌倉街道上道」から分岐する古道は、本来「鎌倉街道」から雉岡城へと延びる東西方向の道である［第51図ＥＫ］。この「大名小路」は、「鎌倉街道」と交差して生野山丘陵を経て本庄へと向かう古道へと連続している［第51図ＥＬ］。この生野山丘陵内を辿る経路は、一部に「鎌倉街道」との伝承をもつ古道である。

ｂ．児玉の町並みの形成

雉岡城下の整備

今日の本庄市児玉町児玉と八幡山の境界をなす「大名小路」と呼ばれる古道は、先に見たように「鎌倉街道上道」から雉岡城に延びる東西方向の経路であるが、「鍛冶小路」と呼ばれた小路は、この「大名小路」に接する南北方向の道であったものと推定される［第51図ＵＭ］。この「大名小路」と「鍛冶小路」の交差する児玉と八幡山の境［第51図Ｕ］には、今日においても直線的な街道に小さな食い違いが認められ、近世にはここに木柵と高札場が設置されていたようである。おそらく、この今日の街路の前身となる街道の整備は、後北条氏治下、雉岡城主が北条氏邦の家臣「横地左近忠春」であった時期を中心に、南北方向に延びる「鍛冶小路」を基礎に実施されたものであろう。この街道の整備とともに、大字八幡山の鍛冶小路（加治町）に接する「鎌倉街道上杉道」との間に、移住を伴う雉岡城下の街区が形成されることによって、今日の町並みの骨格が形成されたものと考えることができる。

町並みの形成

児玉の東石清水八幡神社の移転についても、すでに検討を行ったところであるが、今日その参道に相当する道路に面して幾つかの寺院が位置していることにも注目しておくべきである。この八幡神社が、今日の「本町」の西端の連雀町との間の位置［第51図ｂ］に移された時期を16世紀中葉頃と推定したが、この道路についても、この時期以降に設置されたものと推定することができるであろう。この道路が、古くは八幡神社の参道としての地位をもっているならば、かつての「上杉道」は今日よりやや南西側の経路をとっていた可能性も想定しておきべきかもしれない。ちなみに、「八幡山町」の「長浜」の形成については、「御用向日記」の天保二年（1831）の記載に雉岡城主横地左近が「城下町御取立之節八幡山之内長浜ヲ取立候」云々とあり、後北条氏治下に町並みとして整備されたことが推定されている（根岸、1973）。また、連雀町の成立も雉岡城下の整備と関連をもったものであると推定され、連雀商人の定住によって流通を安定させようとした政策に基づく部分があろう。雉岡城下に認められる連雀町、鍛冶小路は、鉢形城下の連雀小路、鍛冶小路に対応しており、寺町を構成することなどを考え併せるならば、おそらく後北条氏治下に八幡神社の移転を含む総合的な都市計画に基づく城下町の整備が実施されたことを想起すべきであろう。

新町と本児玉

先に見た、寛永22年（1644）の「児玉村かわらひらき帳」では、「児玉村」のうち、児玉、本児玉、連しやく町、新田等の小字が見える［児近資］。『新編武蔵風土記稿』では、「児玉町」には、「本児玉、児玉上町、下町、連雀町、新田、新宿」という小名が記載され

ている（註11）。ちなみに、このうちでも「新宿」は、松平清宗・家清親子が雉岡城入城後の天正十八年（1590）に、翌年までのうちに「児玉新宿」に住まう者に「役免除」の優遇策をとることが記載されており、これを契機に形成されたと考えることができるものである（根岸、1981）。おそらく、この「新宿」は、この時期までに充分な町並が形成されていなかったと考えられる「上杉道」に沿った区域に設置された、今日の「新町」に相当する区域であった可能性が高いであろう。また、先に見た「大道」に沿う「鎌倉街道上道」の東側の区域もまた、古くから「児玉」として位置づけられてきた区域であった。ともあれ、この城下町の整備に伴う移転以前の「児玉」の中心は、字「本町」の東端、今日の児玉本町のほぼ中央に位置する、法養寺と地蔵堂および龍体稲荷神社の位置する「鎌倉街道」に沿った分岐点付近［第51図C］を主とする区域と想定することが可能でありこの付近が『新編武蔵風土記稿』にみる「本児玉」に相当しているものと推定される。

交通の結節点

このように「児玉」の地は、水田に乏しく畑作が卓越する区域であったとはいえ、児玉党児玉氏の本貫地であり、古くから交通の結節点として人や物資の集散の場として発達したと見做してよいであろう。本庄市児玉町域のそれぞれの地区は、伝統的な地域社会としての相対的な自律性を帯びているとはいえ、交通路を通した地域相互の多重の連関の中で位置づけられるものである。

まとめ

中世の児玉は、鎌倉街道沿いに発達したひとつの小地方都市として捉えることができる。しかし、近世には児玉を通る街道が、中山道の脇往還となり交通の要衝としての地位が低下していった。近代においては鉄道幹線である高崎線の路線から離れ、近代都市としての発達が充分に認められなかったところから、今も中世の面影を残すところとなっている。鎌倉のような政治的な中枢をなす中世の都市とは異なる、このような地方の小都市の推移は、史料の稀少性と相まって、そのままの形で「歴史」に組み込み得ない些末な事例として打ち捨てられてきたが、このまま歴史の外側に放置しておくわけにはいかないであろう。今後は、この地域においては、児玉の町場をひとつの交通の結節として、この地域の村々の相互が連絡していた関係について分析してゆく必要がある。

今後の課題

この地域の変遷については、少しづつ視角を変えながら、これまでも繰り返し述べて来たところである。それぞれの土地には、その土地の上に展開した具体的な歴史が累積し、その推移の過程としての固有の履歴をもっている。遺跡それぞれのもつ多様な側面は、それぞれに生態的基盤をもちながらも、前代の利用形態に制約され規定されながら次代に継承されている。今後も、これらを徐々に捉え返しながら、より具体的で多面的な地域社会の形成過程と推移の中で、それぞれの遺跡のもつ地位を描き出していく必要があろう。本章もまた、地域の中における遺跡の地位を位置づけるための基礎的な作業のひとつである。

（鈴木徳雄）

註

⑴　児玉清水遺跡では、本地点に近接するＢ地点（未報告）においても縄紋後・晩期を中心とする遺構や遺物が検出されている。

⑵　本章で使用する史料等は、基本的に『児玉町史』資料編を用いており、以下、中世資料編は[児中資]、近世資料編は[児近資]と表記する。

⑶　近代の灌漑によって水源が確保された過程については、児玉用水（美児沢用水）児玉水路の開鑿によるものである（第Ⅱ章参照）。

⑷　児玉郡周辺地域における、胎土に結晶片岩と海綿骨針とを含む埴輪の分布については井口泰基氏（井口、1997）の検討がある。

⑸　児玉清水遺跡の東側に相当すると思われる「思池遺跡」付近の低地帯において縄紋時代の丸木舟が多量のトチの実とともに出土したという記録がある。この丸木舟は、長らく児玉小学校に展示されていたというが、考古学的な検討は行われていないために具体的な内容は不明である。なお、この丸木舟の年代については、その丸木舟という形式から縄紋時代と推定されたとするならば、「思池遺跡」が縄紋後晩期から平安時代に及ぶ遺跡であるところから、丸木舟が今日でも認めることのできる普遍的な舟の形式であることを考えるならば、その年代についても慎重に取り扱う必要があろうが、トチの実の出土を積極的に評価するならば縄紋後・晩期と考えてよいであろう。

⑹　この「河川跡」と榛沢・幡羅郡家等の関連については、鳥羽政之、知久裕昭両氏のご教示を得た。また、美里町地域については長滝歳康氏のご教示を得た。

⑺　これらの点については、前稿（鈴木、2005）で触れたところである。なお、「大道」は“おおみち”と読み、「鎌倉街道」をはじめとする中世古道の呼称とされる“だいどう”等ではない（埼玉県教育委員会、1983）。しかし、「大道」は“おおみち”と称される場合もまた積極的に検討しておくべきであると思われる。この地域ではこの「大道」のほか、暦応三年（1340）等の安保光阿譲状にみられる四至の記載にかかわる「東限地蔵堂大道」があり、「鎌倉街道」の伝承の認められない中世の幹道が数多く存在していたことを端的に示している。なお、児玉町の「鎌倉街道」をはじめとする古道等については、田島三郎氏のご教示を得た。また、児玉地域の古道については、『児玉町史』民俗編の「交通・交易」（野口、1995）で概観されており、本章とは幾分捉え方を異にするとはいえ、児玉町の古道を知る上で参考となるものである。

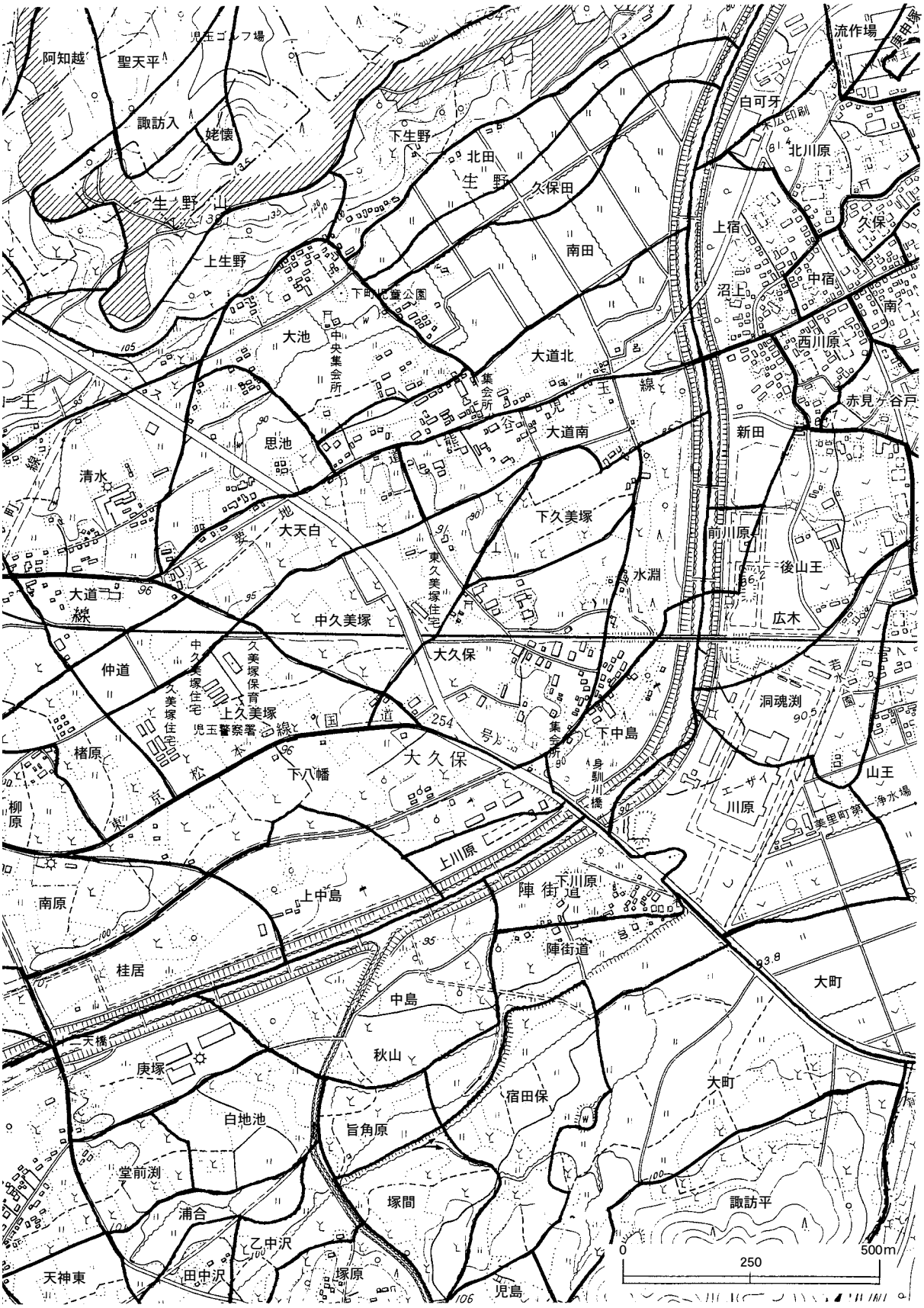
⑻　「生子」は、太田亮氏の『姓氏家系大辞典』によると「イカシコ」と訓じることについて小野英彦氏にご教示を得た。

⑼　ちなみに、伝承によると児玉町児玉字「白可牙」（しらかげ）には、常に白濁した水が滞水していたとされ、件の沼沢地はこの下流の美里町大字南十条に位置していたとされている。なお、この伝承については別の報文中で触れる予定である。

⑽　八幡神社は、東石清水八幡神社と称しており、『新編武蔵風土記稿』には「上ノ宮と称す」とされている。また、「下八幡」については「寛保二年洪水に流失せしを以て、別当寺の境内へ、移し立し」とされ、別当は法養寺と記されている。『神社明細帳』（明治18）によると、下八幡社は明治44年に児玉字柳原にあったものを現在の八幡神社に合祀したとされており、寛保二年（1742）から明治44年（1911）まで法養寺の境内にあったことがわかる。なお現在、八幡神社境内には、移転160年臨時大祭にかかる明治33年（1900）の「下八幡神社碑」が残されている。

⑾　これらの小名と今日の本庄市児玉町児玉を構成する上町・仲町・新町・連雀町・本町・下町という６行政区との厳密な対応関係は、必ずしも明解ではなく不明確な部分をもっている。なお、この近世の「児玉町」は、明治22年（1889）八幡山町と合併し児玉町となる。昭和30年（1955）、この児玉町は金屋村・秋平村・本泉村と合併し児玉町となり、次いで昭和32年（1957）共和村等と合併し児玉町となり、さらに平成18年1月10日に旧本庄市と合併し現在の本庄市へと推移したものである。

第52図　児玉清水遺跡周辺の字切図(1)



第53図　児玉清水遺跡周辺の字切図(2)

参考・引用文献

網野　善彦　他　(2003)　『都市と職能民の活動』日本の中世６　中央公論新社
井口　泰基　(1997)　「埼玉県北西部における埴輪供給の問題」『土曜考古』第21号
太田　博之　(2002)　『東五十子・川原町』東五十子遺跡調査会
太田　博之　(2005)　「“五十子陣”研究ノート」『群馬考古学手帳』15
海津　一朗　(1996)　「南北朝・室町期の賀美郡武士団・内乱と地域社会」『上里町史通史編上』上里町教育委員会
金鑽　宮守　(1940)　『縣社八幡神社社誌』縣社八幡神社社務所
恋河内昭彦　(2003)　『大久保遺跡－Ｂ地点の調査－』児玉町遺跡調査会報告書第14集
櫻井　和哉　(2004)　『児玉大久保遺跡－Ｃ地点の調査－』児玉町遺跡調査会報告書第17集
澤口　宏　(2000)　『利根川東遷』上毛文庫　上毛新聞社
鈴木　徳雄　(1987)　「古代那珂郡における水利灌漑と在地信仰」『秋山東遺跡』児玉町遺跡調査会報告書第２集
鈴木　徳雄　(1989)　「古代児玉郡の開発と真下大溝」『真下境東遺跡』児玉町文化財調査報告書第９集
鈴木　徳雄　(1995)　「古代児玉郡の土地利用と方形館の成立」『堀向・藤塚・柿島・内手・児玉条里遺跡』児玉町文化財調査報告書 第18集
鈴木　徳雄　(1996)　「古代北武蔵の開発と集落」『月刊文化財』11月号　№398
鈴木　徳雄　(1997)　「古代児玉郡の潅漑と地域圏」『金佐奈Ｃ・児玉条里遺跡上田地区』児玉町文化財調査報告書第25集
鈴木　徳雄　(2000)　「児玉条里と地域的景観の形成」『児玉条里遺跡－九郷地区－』児玉町文化財調査報告書第34集
鈴木　徳雄　(2000)　「児玉条里と地域社会の変化」『児玉条里遺跡－八幡山北田地区－』児玉町遺跡調査会報告書第９集
鈴木　徳雄　(2005)　「児玉丘陵における地域社会の形成」『高柳原遺跡－Ｂ・Ｃ地点の調査－』児玉町文化財調査報告書第39集
外尾　常人　(2003)　「寺西遺跡周辺の景観復元」『寺西Ⅱ遺跡』上里町教育委員会
田中　信　(2005)　「出土遺物からみた山内上杉（越後上杉氏）の城・陣所」『シンポジウム埼玉の戦国時代 検証 比企の城』史跡を活用した体験と学習の拠点形成事業実行委員会
鳥羽　政之　(1995)　『中宿遺跡－推定・榛沢郡正倉跡の調査－』岡部町埋蔵文化財調査報告書 第1集
鳥羽　政之　(1997)　『中宿遺跡Ⅱ－推定・榛沢郡正倉跡の調査－』岡部町遺跡調査会発掘調査報告書第５集
長滝　歳康　(1992)　『後山王遺跡』美里町遺跡調査会
長滝　歳康　他　(2004)　『広木大町古墳群第14号墳・川原遺跡』美里町遺跡調査会報告書第５集
根岸篤太郎　(1973)　『武蔵国児玉郡八幡山町桜沢家所蔵文書』児玉町史史料調査報告第一集
根岸篤太郎　(1981)　『解説近世「児玉」に関する二・三の問題』児玉町史史料調査報告第七集
野口　泰宣　(1995)　「交通・交易」『児玉町史』民俗編
野口　泰宣　(2003)　『児玉町の近代化遺産』児玉町史料調査報告書第18集
長谷川典明　他　(2004)　『長濱町のあゆみ』長濱町のあゆみ編集委員会
福島　正義　(1983)　「鎌倉街道の性格と機能」『鎌倉街道上道』歴史の道調査報告書第１集
松本　完　他　(2004)　『東本庄』本庄市埋蔵文化財調査報告第29集
丸山　陽一　(1990)　『国指定史跡水殿瓦窯跡試掘調査報告』美里町遺跡発掘調査報告書第６集
宮本　直樹　(1997)　『滝下遺跡』岡部町埋蔵文化財調査報告書 第2集
児玉町史編さん委員会　(1990)　『児玉町史』近世資料編
児玉町史編さん委員会　(1992)　『児玉町史』中世資料編
児玉町史編さん委員会　(1995)　『児玉町史』民俗編
埼玉県教育委員会　(1983)　『鎌倉街道上道』歴史の道調査報告書第１集
埼玉県　(1994)　『中川水系－人文－』埼玉県
埼玉県　(1994)　『中川水系－総論・自然－』埼玉県

図　版

児玉清水遺跡A地点より西側を望む

図版 1

1.児玉清水遺跡A地点調査区全景（東より）

図版２

１．児玉清水遺跡Ａ地点
　　調査前全景（南より）

２．第１号住居址
　　（西より）

３．第２号住居址
　　（西より）

図版３

１．第２号住居址遺物
　　出土状態　（西より）

２．第２号住居址掘り方
（西より）

３．第２号住居址カマド
（西より）

図版４

１．第２号住居址カマド
　　遺物出土状態（西より）

２．第２号住居址カマド
　　完掘状態（西より）

３．第３号住居址
　　完掘状態（南西より）

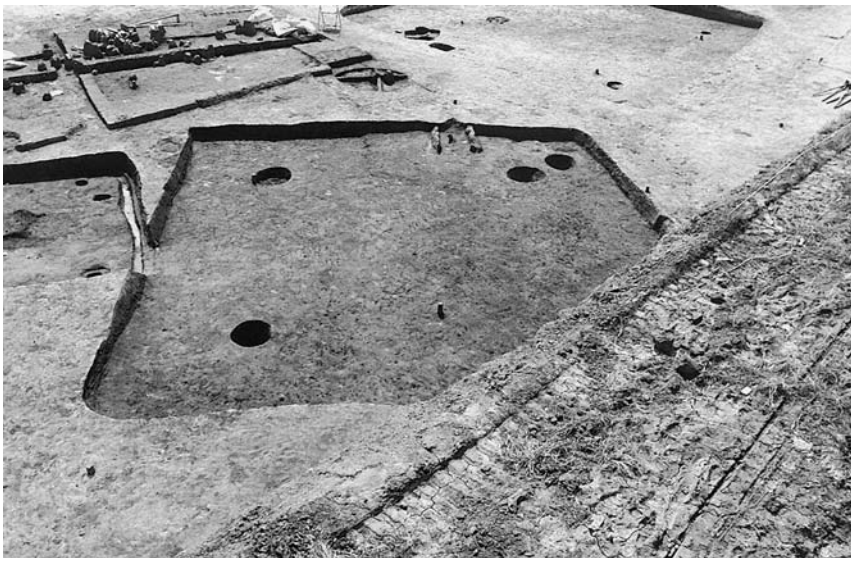
図版５

１．第３号住居址
　　遺物出土状態（南東より）

２．第３号住居址カマド
　　遺物出土状態（南西より）

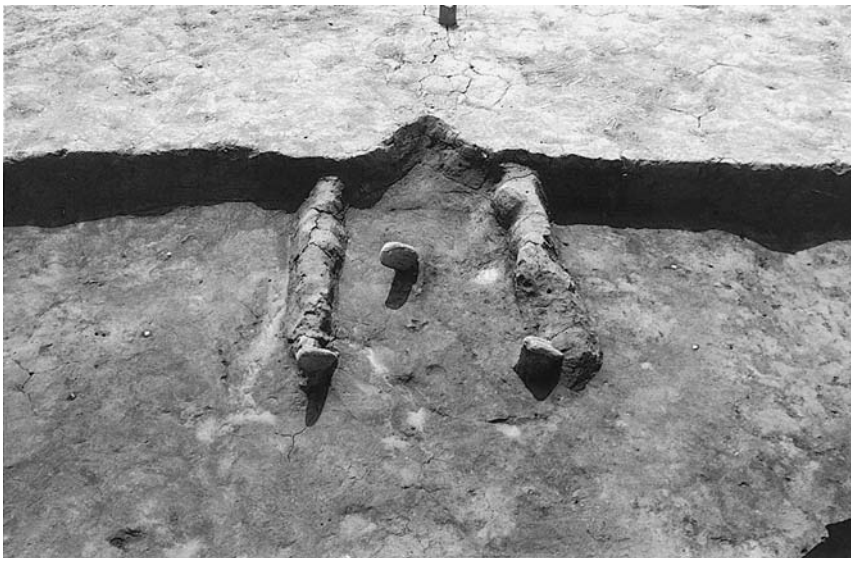
３．第３号住居址貯蔵穴
　　遺物出土状態（南より）

図版６



１．第４号住居址
　　完掘状態（北西より）

２．第４号住居址
　　遺物出土状態(南西より)

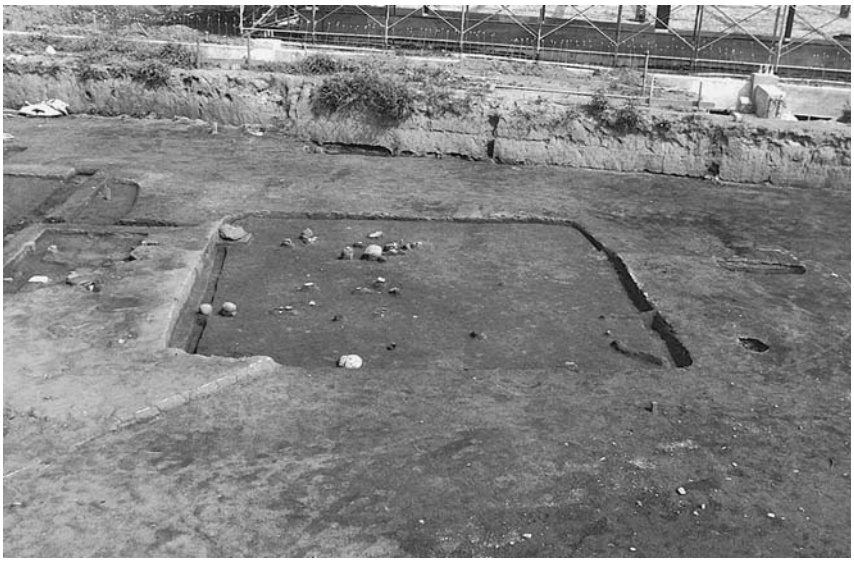


３．第４号住居址カマド
　　（北西より）

図版７

１．第５号住居址
　　完掘状態（南より）

２．第６号住居址
　　完掘状態（南より）



３．第６号住居址
　　遺物出土状態（南より）

図版８

１．第６号住居址
　　遺物出土状態（東より）

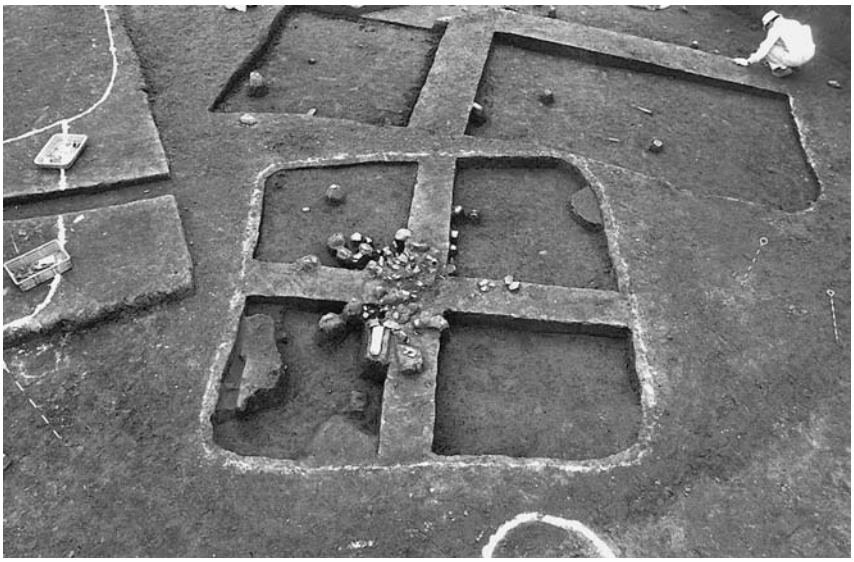
２．第７ａ・ｂ号住居址
　　完掘状態（西より）

３．第７ａ・ｂ号住居址
　　カマド（西より）

図版９

１．第８号住居址
　　完掘状態（東より）

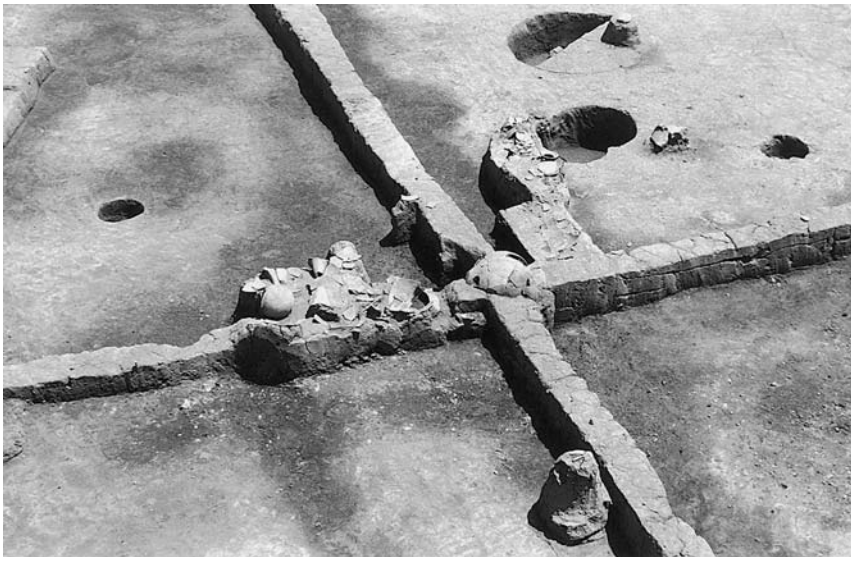
２．第９号住居址
　　完掘状態（北東より）



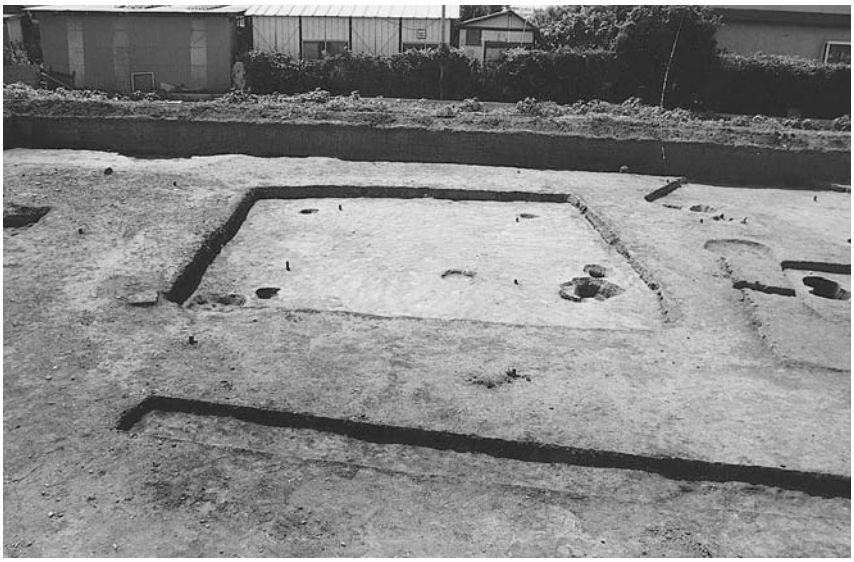
３．第９号住居址
　　遺物出土状態(北東より)

図版10

1．第10号住居址付近
　　完掘状態（南より）



2．第10号住居址
　　遺物出土状態(西より)

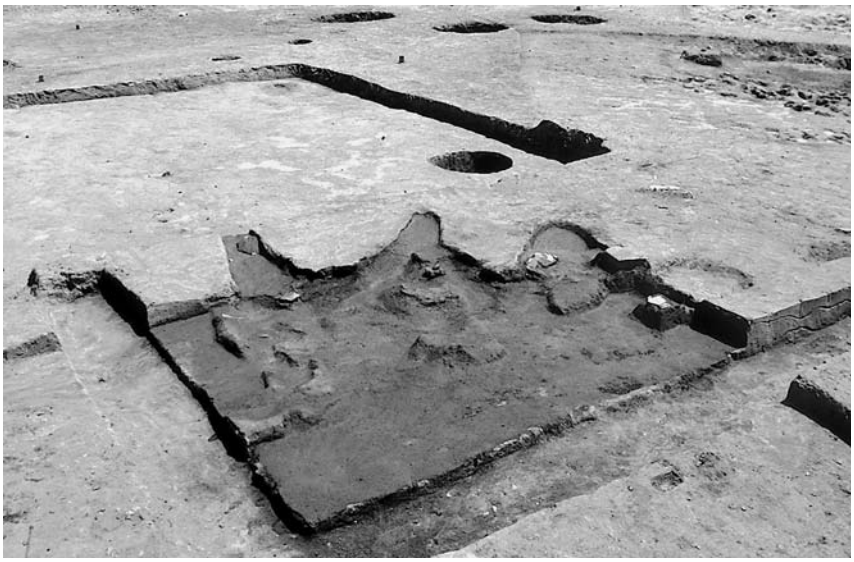


3．第11号住居址
　　完掘状態（東より）

図版11

1．第11号住居址
遺物出土状態(南西より)

2．第12号住居址
完掘状態（南より）



3．第12号住居址
カマド（西より）

図版12

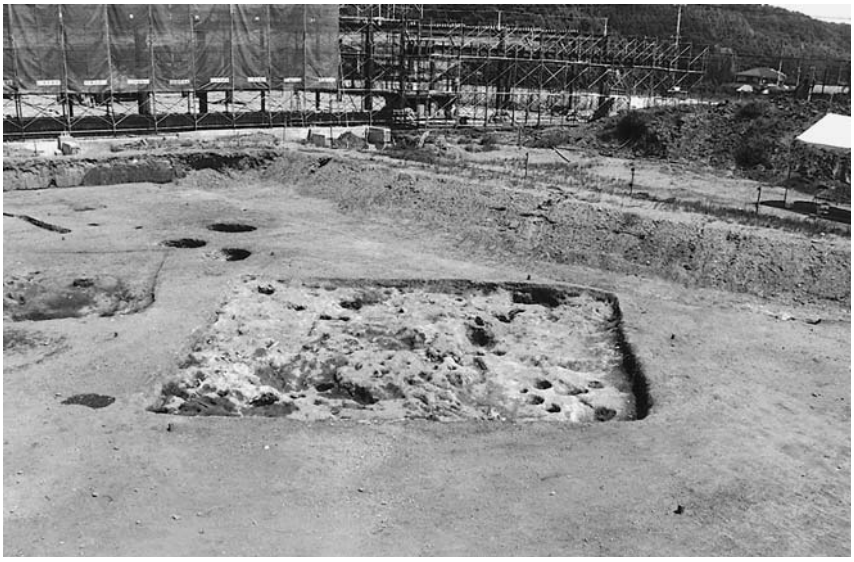
1．第13号住居址
　　完掘状態（南より）

2．第14号住居址
　　完掘状態（南より）

3．第14号住居址
　　掘り方（南より）

図版13

1．第15号住居址
　　完掘状態（南西より）

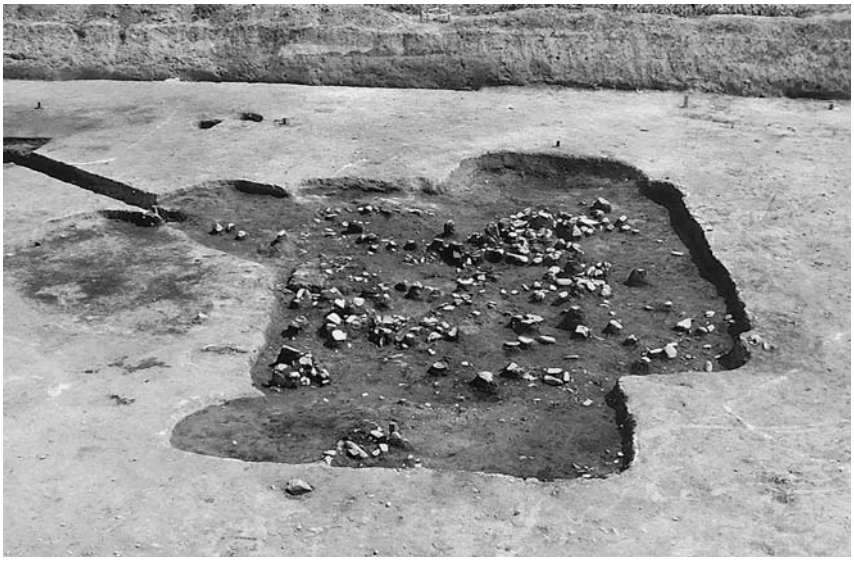


2．第15号住居址
　　掘り方（南西より）

3．第15号住居址
　　貯蔵穴（南西より）

図版14

1．第16号住居址
　　完掘状態（北より）

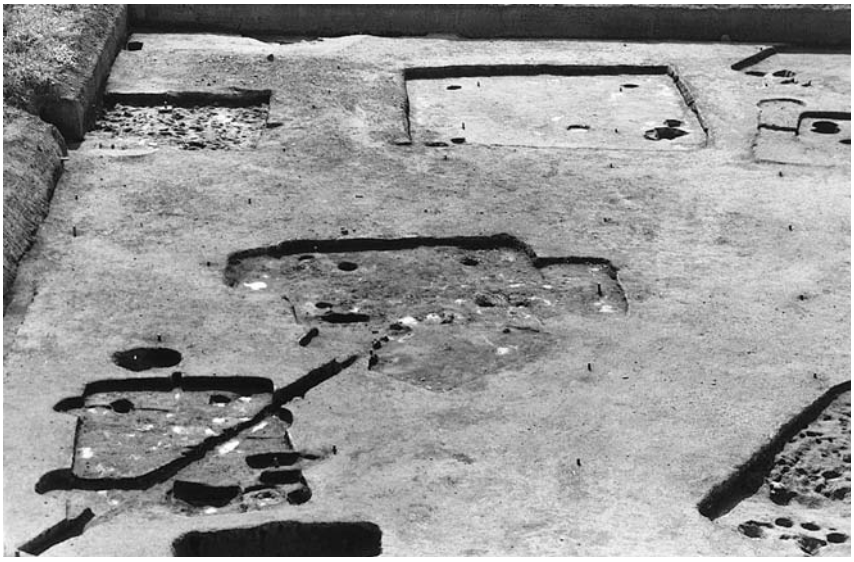


2．第16号住居址
　　遺物出土状態(北より)

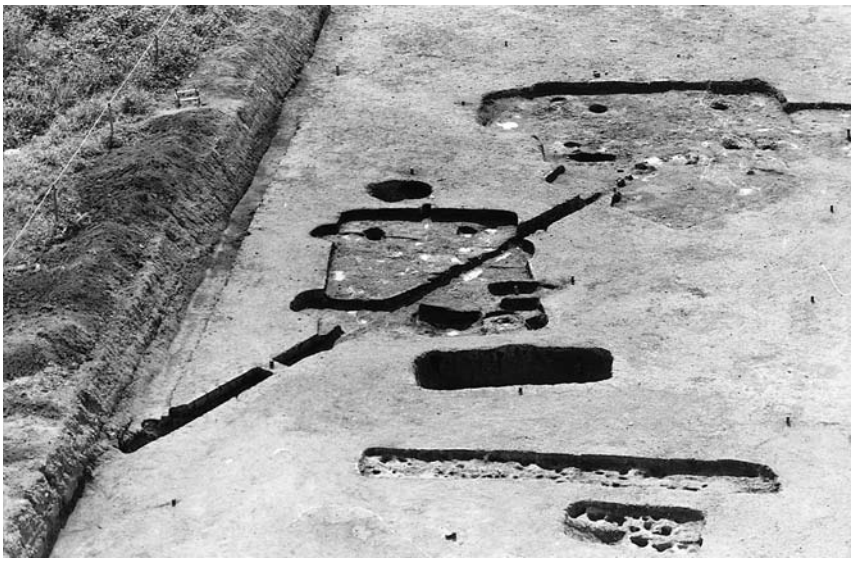
3．第16号住居址
　　遺物出土状態(南東より)

図版15

1．第16号住居址カマド
　遺物出土状態（左）
　完掘状態（右）



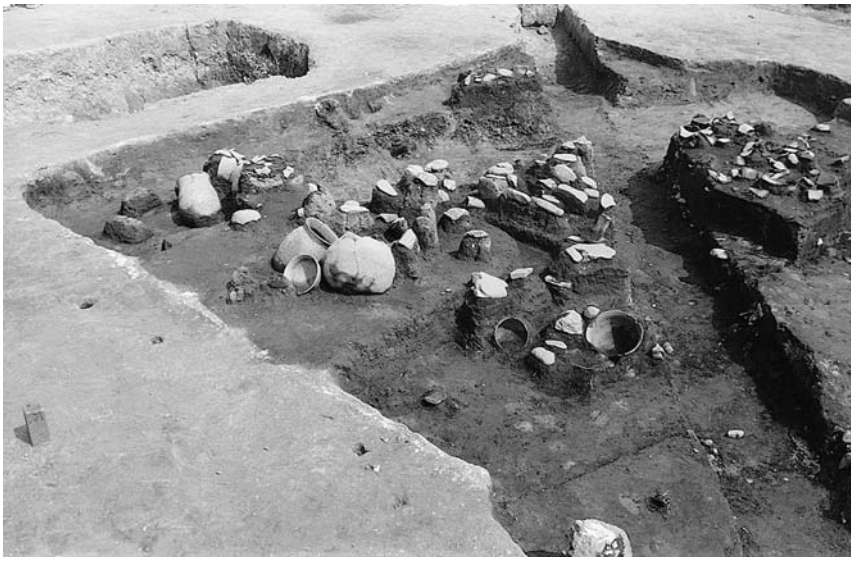
2．第17号住居址周辺
　調査区南側全景(東より)



3．第17号住居址
　完掘状態（東より）

図版16

1．第17号住居址
　遺物出土状態(南より)



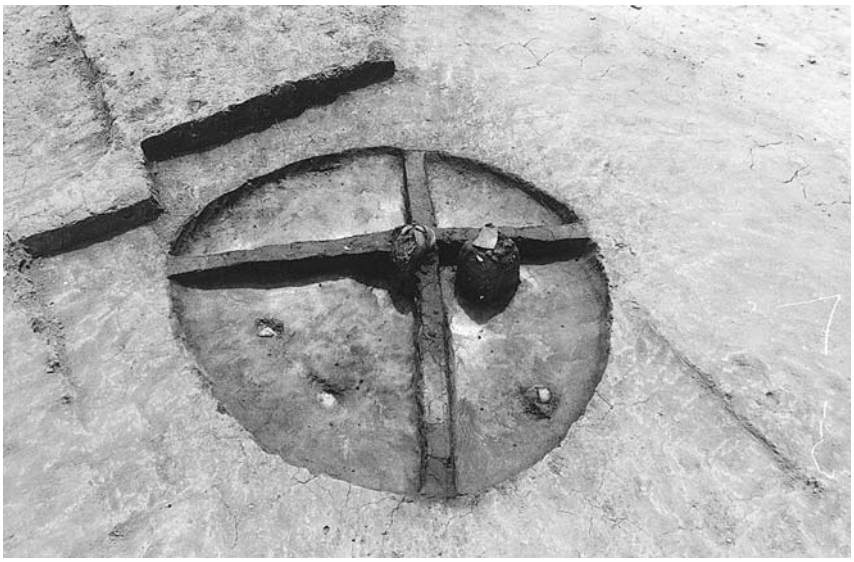
2．第17号住居址
　遺物出土状態(北東より)

3．第17号住居址カマド
　完掘状態（南より）

図版17

1．第１号（左）
　第７号土壙（右）
　　完掘状態（北より）

2．第10・11・12号土壙
　　完掘状態（北東より）

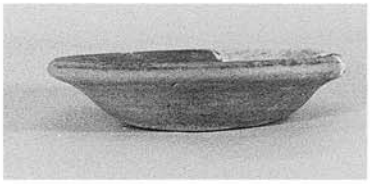


3．第21号土壙
　　遺物出土状態(東より)

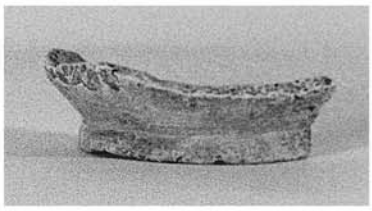
図版18

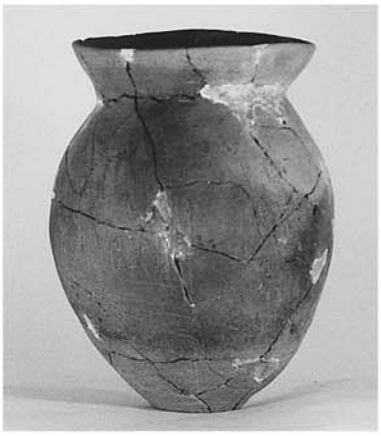
1－1

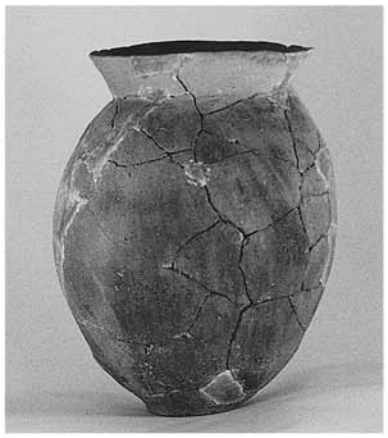
1－3


1－4

1－5


1－6


2－1


2－2

2－3

2－5

2－6

2－4

2－7

2－8

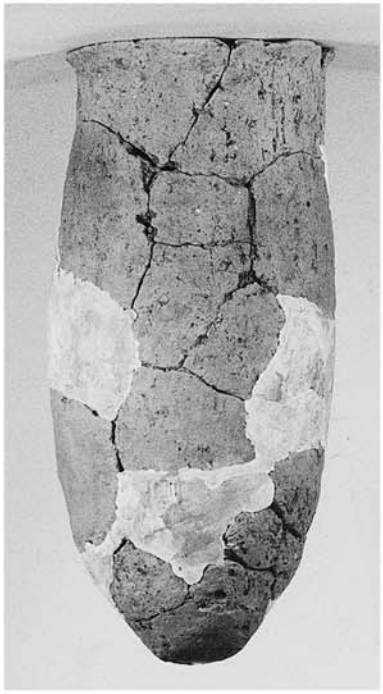
上左　第１号住居址
上右　第２号住居址
下　　第３号住居址

3－1

3－2

第１・２・３号住居址出土遺物

図版19


4－1

4－2

4－3

4－4

4－5

4－6

4－7

4－8

4－9

4－10

4－11

4－12

4－13

4－14

4－15

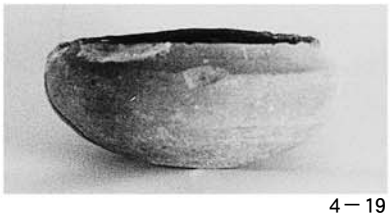
4－16

4－17

4－18

第４号住居址出土遺物

図版20

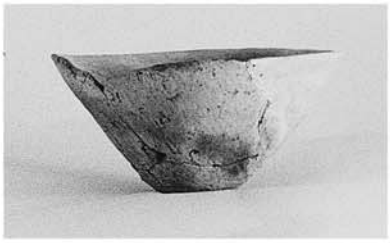

4－19

4－20

第４号住居址

6－1

6－2


6－3

6－4

6－5

6－6

第６号住居址

6－7

6－8

6－9

7a･b－1

7a･b－2

7a･b－3

第７ａ・７ｂ号住居址

第４・６・７号住居址出土遺物

図版21

7a･b－4

7a･b－5

7a･b－6

7a･b－7

第７ａ・７ｂ号住居址

9－1

9－2

9－3

9－4

9－5

9－6

9－7

9－8

第９号住居址

10－1

10－2

10－3

第10号住居址

第７・９・10号住居址出土遺物

図版22

10－4

10－5

10－6

10－7

10－8

10－9

10－10

10－11

10－12

10－13

第10号住居址

11－1

11－2

11－3

第11号住居址

第10・11号住居址出土遺物

図版23

11－4

11－5

11－6

11－7

11－8

11－9

11－10

11－11

11－12

上　　第11号住居址
下左　第13号住居址
下右　第15号住居址

13－1

13－2

15－2

15－4

15－3

第11・13・15号住居址出土遺物

図版24

16－1

16－2

16－3

16－5

16－6

第16号住居址

17－1

17－3

17－4

17－2

17－5

17－6

第17号住居址

第16・17号住居址出土遺物

報告書抄録

フ リ ガ ナ	コダマシミズイセキ		
書　　名	児玉清水遺跡		
副　書　名	Ａ地点の調査		
シ リ ー ズ	本庄市遺跡調査会報告書	巻次	第18集
編　著　者	鈴木徳雄・尾内俊彦・櫻井和哉		
編 集 機 関	本庄市遺跡調査会		
所　在　地	〒367-8501　埼玉県本庄市本庄３丁目５番３号　　TEL　0495－25－1185		
発　行　日	西暦2007年（平成19年）５月31日		

フリガナ 所収遺跡	フリガナ 所　在　地	コード		北緯 （°′″）	東経 （°′″）	調査期間	調査 面積	調査 原因
		市町村	遺跡					
コダマシミズイセキ 児玉清水遺跡	ホンジョウシコダマチョウコダマ 本庄市児玉町児玉 アザシミズ 字清水2924-2他	112119	54-309	36°11′28″	139°08′37″	19950601 ～19950815	2000㎡	店舗 建設

所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
児玉清水遺跡 Ａ地点	集落	弥　生 古　墳 平　安	竪穴式住居址・土壙	弥生土器片 土師器 須恵器他	弥生時代の土壙が確認された 古代集落の一端が明らかになった。

本庄市遺跡調査会報告書第18集

児 玉 清 水 遺 跡

－Ａ地点の調査－

平成19年５月31日　印刷

平成19年５月31日　発行

発行／本 庄 市 遺 跡 調 査 会

埼玉県本庄市本庄３丁目５番３号

（本庄市教育委員会文化財保護課内）

印刷／たつみ印刷株式会社